昭和58年4月15日号（毎月2回1日、15日発行）第26巻・第8号　通巻582号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1983
8
4.15.

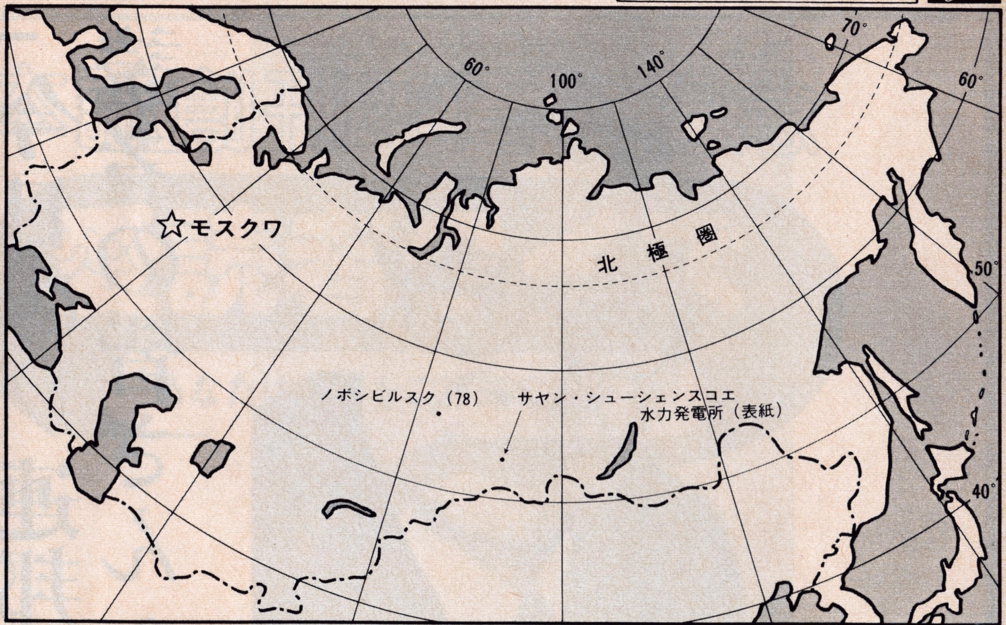
創刊25周年記念号



第8号　1983年4月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



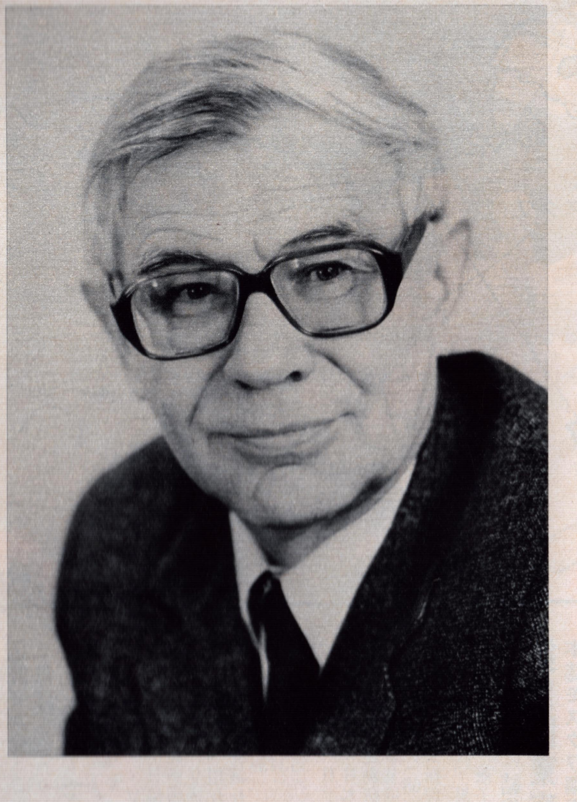
表紙　世界最大級のサヤン・シューシェンスコエ水力発電所を建設しているこの人たちの平均年齢は25歳。本誌が創刊された頃に生まれた彼らの思いはみな平和、幸福、祖国の繁栄に向けられている。

編集　在日ソ連大使館広報部　〒141 東京都品川区東五反田3—9—13　電話03(447)3536(代表)
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　〒101 東京都千代田区西神田2—7—12　電話03(263)2811
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

「今日のソ連邦」の読者の皆さんへ



尊敬する「今日のソ連邦」の読者の皆さん！

創刊25周年を迎えた本誌の誌上で皆さんにごあいさつできることを、大変うれしく思います。

この間ずっと、本誌はわが国の現実、ソビエト社会の政治、社会、経済、文化、ソ日関係における主要な出来事を読者の皆さんに紹介してきました。これまでもそうでしたが、本誌で紹介したいことはいつでもたくさんあります。ソ連国民は多民族文化と豊かな歴史、経済や科学技術における争う余地のない成果を誇っており、人類史上初めて、共産主義建設のきわめて複雑な社会的諸課題を解決しつつあります。本誌がソ連の生活の多面性をどこまで首尾よく伝え得ているかは、読者の皆さんのご判断を待つほかありませんが、同時に、大勢の皆さんからソ連大使館広報部にあてて、善意あふれる助言や興味深い質問、記事をお寄せいただいていることに感謝いたします。これからも引きつづきこのようなご協力をお願いします。

四半世紀といえば、一人の人間の生涯ではかなりの期間になりますが、定期刊行物にとっては、ささやかな期間でしかありません。「今日のソ連邦」が創刊されたのは、ソ日両国間の外交関係が復活したことの論理的帰結でした。以来、さまざまな困難にもかかわらず、多くのことがなされました。貿易・経済協力が拡大され、文化やスポーツの分野での交流も深まりました。こうしたことは、ソ日関係の将来を楽観してもいい根拠となるでしょう。なぜなら、ソ日関係がよくなることは、隣人同士である両国民の利益にかなうからです。

本誌は誕生したときから、両国関係の年代誌となってきただけではありません。真の善隣を発展させるためには、お互いをよく知り、信頼と相互理解の雰囲気を強めなければならないことは周知のところです。私たちは「今日のソ連邦」が、わが国の生活について、ソ連国民のやっていることや考えていることについて紹介することによって、わが国をよく知り、理解していただくことに寄与してきたと自負しています。

ソ連共産党中央委員会書記長Y・V・アンドロポフ同志はソ連邦結成60周年合同祝賀会での報告の中で次のように強調しています――「平和協力の強固なきずながソ連とすべての大陸の諸国とを結びつけている」。この比喩的な表現にならって次のように言いたいと思います――「今日のソ連邦」は、そのきずなの中の、細いながらもソ連と日本を結ぶ一本の糸である、と。

駐日ソ連大使　V・パブロフ



本誌創刊25周年記念

愛読者クイズ

〝あなたはソ連をご存知ですか？〟

1等賞は10日間のソ連旅行！

愛読者の皆さん！

恒例の愛読者クイズ〝あなたはソ連をご存知ですか？〟を今年は本誌創刊25周年を記念して行うことになりました。

問題は全部で5問ありますが、本誌の読者の皆さんはもちろん、ソ連に関心をお持ちの方ならどなたでも答えられるものばかりです。もちろん、これらの問題に関する記事は本誌にしばしば掲載されますから、本誌の読者の方が有利なことは言うまでもないでしょう。

正解者には次の**賞**を用意しています。

1等（1名）　10日間のソ連旅行にご招待。

2等（2名）ソ連製工業製品また
3等（5名）は民芸品1点

第1問　今年、ソ連では党大会の記念日が祝われます。この大会でレーニンの支持者は多数派となり、ボリシェビキと呼ばれるようになりました。これが現在一八〇〇万人の党員を擁するソ連共産党の実質的な前身です。この歴史的な大会の正式名は？　開かれた年は？　ボリシェビキの党は何年からソ連共産党という現在の名称に変わりましたか？

第2問　戦後、ソ日両国間の関係正常化に関するソ日共同宣言の批准書が交換された年月日は？

第3問　ソ連と日本のあいだの姉妹（友好）都市を10組以上挙げて下さい。また最初に姉妹都市関係を結んだのはどことどこで、それは何年のことですか？

第4問　ソ日通商条約と最初の貿易・支払い協定が締結されたのはいつ（何年）、どこで（都市名）でしたか？　一九八二年度のソ日貿易総額（単位ドル）は？

第5問　〝マダム・バタフライ〟世界コンクールで優勝したソ連の歌手の名前と優勝した年は？

回答の**締め切り**は一九八三年6月1日（当日消印有効）。回答はハガキで、お一人一通にかぎります。回答には問題の番号と答えのみをお書き下さい。ハガキには必ず氏名（ふりがな）、年齢、性別、職業、住所、電話番号をお書き下さい。**あて先**は〒141　東京都品川区東五反田3―9―13　ソ連大使館広報部「今日のソ連邦」クイズ係。**結果の発表**は、本誌一九八三年7月15日号（第14号）の予定です。

皆さんの回答をお待ちしています。ふるってご応募下さい。



2月25日、クレムリンで会談するチーホノフ・ソ連閣僚会議議長と永野重雄・日本商工会議所会頭・日ソ経済委員会代表委員



双方を満足させたソ日貿易経済会議

本誌評論員　フェリクス・プラテ

2月24—25日、モスクワの国際貿易センター会議場で、ソ日両国の実業界代表の会議が開かれ、ソ日貿易と両国間の経済協力の現状と見通しに関連した幅広い問題が討議された。

この会議の出席者はまれとも言えるほどの多人数で、日本代表団は、両国の新聞が再三指摘し、強調したとおり、総勢二五八名であった。日本代表団長の永野重雄日本商工会議所会頭・日ソ経済委員会代表委員の言葉によると、日本のこれほど多数の実業家の代表団が外国に出かけたのは、日本でも初めてのことだそうである。日本商工会議所、経団連、東京、大阪、名古屋の各商工会議所の幹部、住友、三和、三井、三菱、日立、新日鉄、東京銀行、富士などの銀行やメーカー、商社の首脳など、およそ日本のあらゆる大手の会社、銀行の代表が、

こんどの貿易経済会議に顔をそろえたと言える。日本の記者たちが書きたてたように、まさに日本の実業界があげてソ連を訪れたのである。

　ソ連側もこの会議に大きな関心を寄せ、多数の省、貿易公団の幹部が出席した。ソ連代表団長はソ日経済委員会のソ連側代表委員でもあるニコライ・パトリチェフ・ソ連貿易相であった。

　モスクワ滞在中に日本代表団の指導部は、クレムリンでニコライ・チーホノフ・ソ連閣僚会議議長と会談した。また日本貿易経済代表団は、イワン・アルヒポフ・ソ連閣僚会議第一副議長、グーリー・マルチューク・ソ連閣僚会議副議長・ソ連国家科学技術委員会議長と会談したほか、別にニコライ・パトリチェフ・ソ連貿易相と会談した。

　日本の新聞はこの会議についていろいろコメントしているが、本誌は会議の若干の側面を取り上げ、二、三意見を述べておきたい。

　ソ連と日本の経済が相互補完的性格をもっていることは、読者もよく知っている事実である。しかしソ日両国の実業家がこんどの会議で何度も指摘したとおり、この事実は両国の貿易と経済協力を拡大する大きなチャンスを開いているが、残念ながらこのチャンスはまだ十分に生かされていない。会議では双方の側の指導者たちから、この協力を伸ばす必要と希望、新しい道の探求と自分の側の可能性について発言があった。

　読者は対ソ貿易経済関係における日本の実業界の立場をよく御承知であろう。会議で永野団長は、シベリア・極東開発協力が双方の利益になることや日ソ貿易経済関係の大きな潜在能力、この関係の拡大、発展を日本側が望んでいることなどを指摘して、日本実業家の立場を明確にまとめた。ここでソ連側の立場について、若干詳しく触れておきたい。

　原則的な命題としてまず、ソ連の対日政策が一貫していることを指摘したい。同じく、対日貿易経済協力問題におけるソ連の立場も全体として不変である。ソ連の指導者たちは、ソ連が平等・互恵の原則に立つきわめて幅広い対日協力を求めてきたし、求めていると言明している。ユーリー・アンドロポフ・ソ連共産党中央委員会書記長は党中央委員会11月（一九八二年）総会で、最近3回のソ連共産党大会（一九七一、一九七六、一九八一年）で決まったソ連の対外政策の継承性を指摘した。

　ソ連側の意見によると、ソ日貿易経済関係の潜在能力は大きい。この楽天的な考えは、両国の科学・経済潜在力が高く、貿易構造が相互補完性をもち、発展途上にあるソ連東部地域と日本が地理的に近いことに根ざしている。これらの要因は、実業人に必要な互恵貿易の可能性を生み出しているから、客観的な要因と言える。

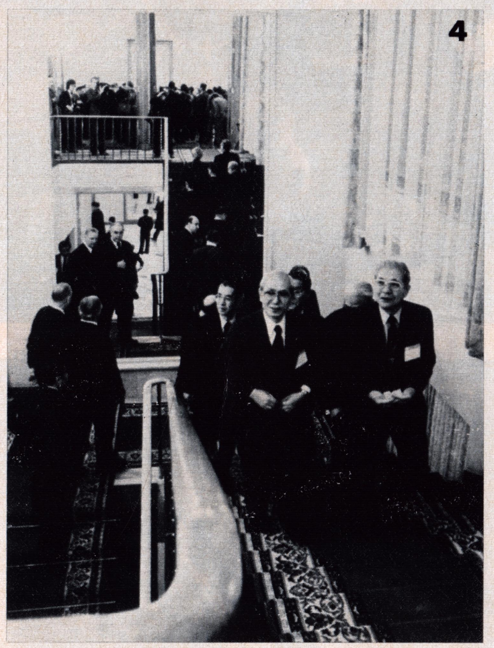
　会議で日本の実業人たちは、日本の経済不況や日本の有力筋による貿易経済関係の〝政治化〟のため、日本の実業界は貿易多角化の道を探さねばならなくなっている、と強調した。

　ソ連側団員たちは、ソ連の業界は協力する用意があるが、協力するにしても必ず平等・









1　ソビエツカヤ・ホテルで開かれた日本代表団主催のレセプションであいさつする永野氏

2　会議の会場になったモスクワの国際貿易センター

3　会議場のロビーで

4　レーニン丘のレセプション会館で開かれたソ連側のレセプションに出席した日本の実業界代表

互恵の立場に立ち、前提条件をつけたり、ありもしない問題とからめる態度を捨てる必要があると発言した。ソ連側の意見によると、貿易での差別待遇により損害を受けるのは、まず差別を始めた側であり、注文を失い、逆にわが身が損害を受ける。最近のソ日経済関係の推移も、この真理



5　ソ日貿易経済関係の発展について報告するボリス・ボリソフ・ソ連商工会議所会頭（2月25日）

6　ソ日貿易経済会議の会議場の日本側代表団員



を裏書きしている。

一九八二年のソ日貿易額は約五〇億ドルであった。ソ連の対日輸出品のうちで最も大きなウエートを占めているのは、工業原料とエネルギー燃料である。日本の輸入全体の内のソ連からの輸出品のシェアは、わりに少ないが、用材、綿花、カリ塩、若干の種類の非鉄金属、貴金属、結晶黒鉛など日本経済にとって重要な商品では、ソ連は大きな地位を占めている。ついでに書いておくが、ソ連の商品は日本市場で日本産の商品と競合しないし、日本の工業生産または農業生産に損害を与えない。

会議で報告したウラジーミル・スシコフ・ソ連貿易次官は、一九七六―一九八〇年中にソ連は80の工場、設備セットを日本に発注したが、この受注に日本の何百という下請け会社と何万人もの労働者、職員が参加したと指摘した。



読者は、長期にわたるソ連の大型注文が、とくに日本経済の景気後退の中で、どれだけ日本の企業の操業と雇用の増大に役立っているか、容易にわかるだろう。

会議で指摘されたとおり、ソ連側は中小商社が参加する貿易を重視している。日本の中小商社にとって、ごく近い将来にソ連から注文を受ける可能性があることは興味深いに違いない。つまりソ連の第12次5カ年計画（一九八六―一九九〇）では、食品工業、軽工業、消費財工業の企業の改装にとくに力が入れられるからである。この5カ年計画の方向は、会議に参加した日本の多くの人々の関心をよんだ。

会議でソ連側出席者たちは、日本側の目をひくような、ソ日貿易経済関係を伸ばすさまざまな提案や考えを沢山述べた。そのおかげで、日本代表団の指導者たちはモスクワ会議の有益性とその大きな影響を高く評価することができた。

そしてもし双方が会議で出した具体案のどれかを、互恵のものと見れば、それらの案を突っこんで討議し、決定するために、両国の経済合同委員会の会議の開催時期を共同で決めることができよう。

ウラジーミル・スシコフ貿易次官は報告の中で、日本の業者の仕事の質を高く評価し、日本側あるいは個々の日本の会社が契約義務を守らなかったケースは、ソ日貿易経済関





7　会議であいさつする高島益郎・駐ソ日本大使

8　本会議で経済協力について報告するウラジーミル・スシコフ・ソ連貿易次官

9　報告を行う佐治敬三・大阪商工会議所副会頭・サントリー社長

係においてはなかったし、相手に対する信頼度は銀行の保証以上の保証である、と述べた。

　次のことも言っておきたい。会議でソ連側は、ソ日貿易経済関係には10―15年先の協力の発展が見通せるような基盤がないことを再度指摘し、日本側の注意を喚起した。ソ連





10　レセプションでスシコフ・ソ連貿易次官と話す松尾泰一郎・丸紅会長と手島清之助丸紅モスクワ支店長

11　会議場のソ連側代表団員

12　クレムリンで永野団長と会見するイワン・アルヒポフ・ソ連閣僚会議第一副議長（2月24日）





側の意見によれば、経済協力の諸原則に関する協定が結ばれ、また期限10―15年、さらには25年の双方にとって互恵のさまざまな分野の協力案を含む長期の経済協力プログラムが作成されれば、こうした基盤ができるだろう。

　当然ながらこれは、自由意思の問題であり、その実現は双方の希望と同意にかかっている。ソ連側は対ソ貿易を押し付けたことはないし、押し付けていない。どの政策をとるかは日本自体の問題である。ソ連はこの点をつねに強調している。願わくは、これが国の固有の政策となることを望みたい。

　これと関連して、読者の興味をそそるような数字をほんの二、三挙げておこう。ソ連の工業生産高はいま世界のそれの1/5を占めており、1年間に石油六億t余り、圧延鋼一億五〇〇万t余り、綿花九五〇万tを生産し、大量の非鉄金属、貴金属の資源を持っている。ソ連の生産フォンドは一兆三〇〇〇億ルーブルで

13　ニコライ・パトリチェフ・ソ連貿易相と握手を交わす永野団長（2月23日）

14　科学技術協力の展望について意見を交換するグーリー・マルチューク・ソ連閣僚会議副議長・ソ連国家科学技術委員会議長と日本側代表団



あり、ソ連はここ15年間に国民の実質所得を倍増させ、一六億平方mの住宅を建てることができた。良識のある人なら誰でも、それだけで、善隣と互恵に基づく自主的貿易政策を立てるのに十分であることを理解しなければならない。

こんどの会議では科学技術協力の問題も取り上げられた。ソ日両国は、科学技術面の協力を深めることにより、科学技術進歩促進のために、ソ連における基礎研究の膨大な潜在力を利用できるだけでなく、最新の科学技術の成果に立って工業生産を迅速に組織する日本の多くのメーカーの能力をも、効果的に活用できよう。

このことはソ日双方がはっきり認めた。会議で発言したジェルメン・グビシアニ・ソ連国家科学技術委員会副議長は、ソ日双方の学者がたとえ協力の拡大を強く望んでも、日本の公式筋の支持を受けるとは限らないと述べ、とくに地震、津波、台風の被害の予測と減少、世界の海洋の広範な調査、地震地帯における建設などの分野で、両国の学者の力を結集しようというソ連の提案に対して、これまでいっこうに前向きの対応がなかったと述べた。これらの分野での協力により双方は必ず得るところがあろう。国家科学技術委員会を代表して、D・グビシアニはソ日科学技術協力の諸問題について一連の新しい具体的な考えを述べ、ソ連側は未来を楽観しており、ソ日両国の学者が多くのさし迫った問題を共同研究する日が来ると信じている、と語った。

この会議に関するソ日共同声明には、会議は実務的な雰囲気と相互理解の精神の下で進められ、有益であったし、会議ではソ日間の貿易経済関係の多くの問題をめぐって、広範に意見が交換された、と指摘されている。永野団長は会議終了後の共同記者会見で、記者の質問に答え、日本代表団の全員が会議を適切かつ有益なものと一致して評価しているのは、すばらしいことだと指摘した。またわれわれは政治と貿易を結びつけないとも述べた。日ソ間の政治問題は政治を通じて解決しなければならず、貿易経済協力はそれなりの方法で発展させねばならない。ソ連側もこの結論に同意した。

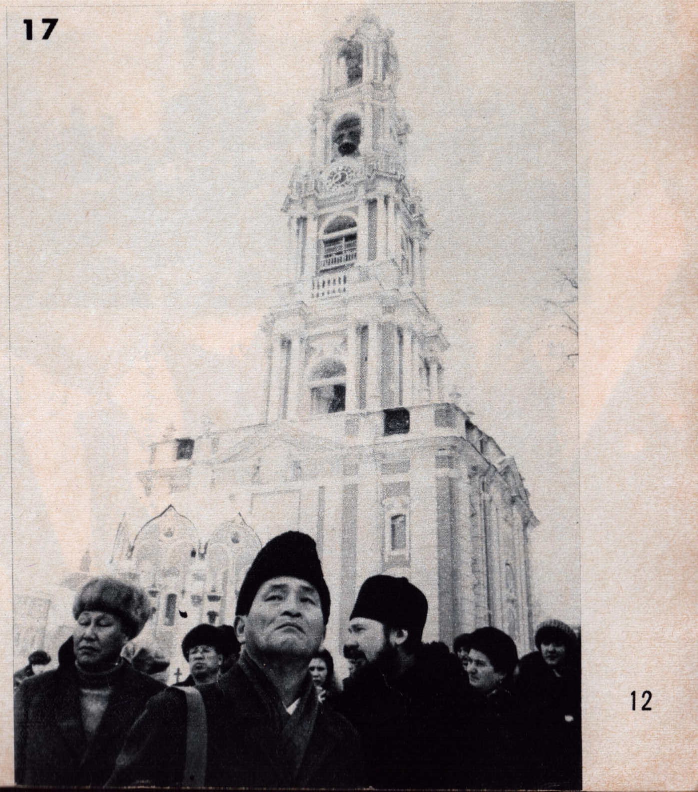
☆　☆　☆



15



16



17



18

15 会議場ロビーで懇談する八尋俊邦・三井物産社長とジェルメン・グビシアニ・ソ連国家科学技術委員会副議長

16 国際貿易センターでの会議終了後、会議出席者の合同記者会見が行われた（2月25日）。

17 モスクワ近郊の古都ザゴルスクでロシア正教会の本山トロイツェ・セルギー寺院を見物する日本代表団一行

18 レセプションで（左から）堀武夫・日ソ経済委港湾運輸委員長・山下新日本汽船社長、ドミトリー・ゾトフ・ソ連国家計画委員会運輸部長、古池一郎・ジャパン・ナホトカ・ライン共同事務所所長

ソ連の大きな政策の不変性

本誌政治評論員　ウラドレン・クズネツォフ

不変性は、単に日常生活的な概念であるだけではない。継承性、一貫性、安定性は、政治においても高く評価されるべき概念である。世界の舞台で重要な役割を果たしている国の外交方針が、その国の指導者が交代するたびに、指導者の気紛れによって、しかも悪い方向に変わるようでは、国際関係全体に否定的な影響を与える。

ソ連の対外政策は――国内政策もそうだが――その基本原則や目的において不動である。ソ連の政策をよく知らない人々だけが、ソ連の政治的、経済的方針は変わり易いなどと言えるのだ。

もちろん、実際的な政策はつねに発展している。基本方針が変わるのは、政策に長期的な目的、不変の原則、断固として選んだ方向がないために、舵が右から左へ、あるいは左から右へ揺れるからである。これは、しばしば西側諸国で、特に政治指導部の交代のさいに見られることだが、しかしソ連には無縁のことである。

ソ連の対外政策は指導者の交代によって変わることはなく、その基本原則は一貫している。その主要な方向は国際気候における何らかの御都合主義的な変動に左右されない。わが国の歴史の一部分でも思い起こせば、それは納得できるだろう。

一九一七年の10月社会主義革命後にソ連の外交方針が形成され、姿を現したばかりの時、それが目ざしていたのは何だったのか？　平和と平和共存、諸国民の善隣と協力、軍縮と緊張緩和である。いまはどうか？　65年前と、あるいは、たとえば「今日のソ連邦」誌が発行され始めた25年前と、全く同じなのである。

当時の政策の基本的なもので現在一層発展させられていないようなものは何もない。現在の政策の最も本質的なもので当時なかったようなものは何もない。対外政策のどの方向を取り上げても、偶然性や御都合主義的な落差あるいはジグザグのない継承性、論理的一貫性、合法則性が見出されるだろう。

全般的な平和のためにあらゆることをする――これがソ連の対外政策の第一原則である。

第1次世界大戦がまだたけなわで、世界最初の社会主義国家が歴史の舞台に登場したばかりの一九一七年に、レーニンは平和確立のためにあらゆることをする確固たる決意を宣言した。若いソビエト共和国の最初の法令の一つ――平和にかんする布告には、諸国の平和的協力、公正な民主的な平和にかんする交渉の呼びかけが含まれていた。

Y・V・アンドロポフ・ソ連共産党中央委員会書記長は、一九八二年12月21日にクレムリン大会宮殿で開かれたソ連邦結成60周年合同祝賀会での報告の中で次のように述べた。「ソ連は現在および未来の世代のために、安らかで平和な未来を保障することに全力を尽くすであろう。これがわれわれの政策の目的であり、この目的からわれわれは後退しない」

われわれの時代の現実は、核戦争がどこでぼっ発しようとも、それは不可避的に全般的な破局を招く、ということにある。だからソ連は、最初に核兵器を使用しないという義務を一方的に引き受けた。他の核大国がわれわれの例にならうならば、それは核戦争防止の事業への真に重みのある貢献となろう。われわれは核兵器だけでなく、通常兵器を最初に使用しないことについても合意する用意がある。

人類の平和な将来と社会的進歩を保障するうえで、いまや中心問題となった**軍縮問題**を取り上げてみよう。すでに一九二二年にレーニンのイニシアチブにより、ソビエト政府は軍備や軍隊の全般的縮小、最も野蛮な戦争遂行手段の完全禁止にかんする提案を作成した。5年後に、ジュネーブの世界軍縮会議の準備委員会でソ連政府は、段階的に行われる一連の措置を勧告した全面完全軍縮案を提出した。

武器のない平和はつねに社会主義の理想であったし、現在もそうだ。国連

設立の時から今日まで国連とそのさまざまな機関に持ち込まれた軍縮問題にかんする二三〇の提案のうち80、すなわち1/3以上はソ連によって行われた。

一九八二年末から一九八三年初頭にかけて、ソ連は軍拡競争の抑止を目的とした新しいイニシアチブを打ち出した。ソ米両国の戦略軍備の制限と縮小、および欧州の中距離核軍備の制限に関する提案がそれである。

戦略軍備では、ソ連は双方がこれ以上の増強をいますぐ中止すること、すなわち現在の水準に凍結し、その後、現在の保有兵器をそれぞれの側が約25%削減することを提案した。いずれは、さらに新しい削減に向かって進まなければならない。

中距離核兵器では、二つの案を提出した。それは、欧州ではいずれの側も核兵器をいっさい持たないか、あるいはソ連もNATOも中距離軍備（核兵器を運搬するミサイルと飛行機）を2/3以上削減しよう、という案である。そのさい互いに対峙しているソ連と米国のミサイルはここにはいっさい存在しなくなり、ソ連は英国とフランスが持っているのと同じ数のミサイルだけを残すだろう。

ソ連はどこの国よりも強くなり、世界で最も強力な軍事機構を持つということを目標にしていない。それどころか、他の諸国もそうするなら、すべての兵器器材を手放す用意がある。

ソ連と資本主義諸国との間の**実務協力**を取り上げてみよう。モスクワではこの実務協力を平和政策の物質的基盤、世界的な規模での社会進歩の基礎の一つとみなし、現在特に重視している。

すでにわが国が外国の干渉を撃退した一九二〇年代の初めに、ソビエト政府は西側世界と通商・経済関係を結ぼうとねばり強く試みた。いま資本主義諸国との互恵的な経済協力をめざす方針は、断固として、一貫して進められている。一九七四―八〇年の期間に資本主義諸国との貿易高は6・7倍に増えた。西独、フィンランド、フランス、イタリア、米国、英国、オーストリアとは期限10―15年またはそれ以上の政府間協定や、経済・工業・科学技術協力の発展計画が結ばれている。これらの協定に基づいて多くの工業分野で大規模プロジェクトが実現された。ソ連は八〇年代にもこのような互恵契約を実現する用意がある。

米国との関係を取り上げてみよう。ソビエト政権成立当初から、レーニンは世界平和のためのソ米関係の未来の意義を完全に自覚して、正常な関係の確立を主張した。われわれはいまでも、最も複雑な問題、何よりもまず核軍備競争中止の問題を双方に受け入れられるように解決して、米国とすっきりした、実り多い関係を打ち立てたいと考えている。

中国との関係を取り上げてみよう。わが国の成立の当初から、同権の原則に基づいて打ち立てられた全く新しい関係を、この偉大な隣国との間に確立しようと努めた。ソビエト政府は直ちに中国におけるロシアのあらゆる特権や特典を放棄すると声明し、不平等条約を改正し、完全な平等の原則に立って両国間の関係を打ち立てることを提案した。ソ連はいま中国との関係を正常化し、その関係を両国の社会主義的立場や友好協力の伝統にふさわしいものにするつもりである。

日本との関係について言えば、ソビエト政府は一九一七年の10月社会主義革命の勝利後すぐに、この国と真の善隣・政治・経済関係を確立することを主張した。この意向は、ソビエト極東での干渉時代にも変わらなかった。一九二三年春、ソ連政府は代表にソ日関係の正常化にかんする交渉を始めることを委任した。一九二五年、こうした努力は成功裏に終わった――外交関係が樹立されたのである。日本との善隣と協力の方針は、今日でも変わっていない。本誌のこの号の記事が、このことをはっきり証明している。

継承性と一貫性は、ソ連の対外政策の他のあらゆる方向や目的、外国との関係全体にも見られる特徴である。ソ連の対外政策の戦略路線に何らかの変化を期待している者や、ソ連の対外政策がだれか局外者の好みに迎合したり、ソ連がソ連との良い関係の代償として何かを譲歩するだろうと期待している者には、はっきり言おう――期待すべきものはない、と。ソ連には撤回すべきものはない。ソ連は他国の領土を要求していないし、何人に対しても制裁を加えたことはないし、始まった交渉を中断したこともない。

ソ連は、協力を希望するあらゆる国と誠実で平等な互恵的、友好的な協力を打ち立てる用意がある。社会体制の違いはこれを妨げてはならないし、現に双方の善意が見られる所では妨げになっていない。

ソ連は、今日の国際情勢を特徴づける困難と緊張は克服されうるし、克服されなければならないと考えている。国際舞台でのソ連のすべての活動は、諸国民は積極的な、明確な目的をもった行動で核戦争の脅威を取り除き、平和を、つまり地球上の生命を守ることができる、という確信から出発している。ソ連の大きな政策の不変性はこの点にも現れている。

ノーボスチ通信特派員報告

マルクス・レーニン主義こそわれらの闘いの武器

L・プラトノフ記者（メキシコ市）

いまメキシコの学術団体や社会団体は、マルクス生誕一六五周年・没後一〇〇年を記念するシンポジウムや学術会議を開いている。なかでも一番大きなのは、ビセンテ・ロンバルド・テレダーノ記念「第三世界」哲学・政治・社会研究センターの主催の「マルクスとマルクス主義」学術会議である。この会議にはメキシコをはじめとする中南米諸国や社会主義諸国の学者が参加した。会議の調整連絡主任をしている同研究センターのマルセラ・ロンバルド女史はこの会議について次のように語った。

「いまや帝国主義勢力は地球全体の破局をもたらしかねないような紛争に全人類を巻きこもうとしているが、われわれはこのような歴史上の劇的な難局にマルクス生誕一六五周年と没後一〇〇年を迎えた。平和を守る闘いに力を結集することは、全世界の進歩的な人々の義務である。そして、現代の一人ひとりの革命家や自覚ある人々に一貫して闘う力を与えうるのは、マルクス・レーニン主義理論である」

カナダ国民、巡航ミサイルに反対

A・サンダコフ記者（オタワ）

カナダでの米国の巡航ミサイルの実験に抗議するために、オタワ市で二人の若い男女が国会議事堂の正面入口のドアに自分の体を鎖で縛りつけ、凍りつくような冷たい風にさらされている。カレン・ピアースさん（26歳）とジョン・ウイルス君（20歳）で、二人は記者たちとのインタビューで「私たちはカナダを米国の軍拡競争の共犯者にしたくない」と語った。

カナダが自国内で米国の巡航ミサイルの実験を行うことを認める協定に調印してからカナダ全土に抗議の波がまき起こっていて、カレンさんとジョン君の行動はそのほんの一例にすぎない。トロント市では48時間の抗議デモが行われたし、そのほかカルガリー、モントリオール、ウイニペグ、ハミルトンなどの各都市でも大きな抗議デモがあった。

カナダの学術団体「平和のための科学」は、米国が巡航ミサイルを展開すれば、必ずやソ連も巡航ミサイルを装備するだろうとの報告書をつい最近カナダ政府へ送ったが、これについてE・フォーセット議長は、その結果、二超大国にはさまれているカナダは、潜在的な核戦争の惨禍の巻きぞえになる危険がある、とはっきり述べている。

またパグウォッシュ会議カナダ支部長のエプスタイン教授は「巡航ミサイルはこれまで人間がつくった最も危険な武器の一つで、人間の手に負えなくなって、軍備制限にかんしてこれまでに達成された合意を事実上有名無実のものにしてしまうところに一番大きな危険がひそんでいる」と言っている。

復興したプノンペン

B・モスクビチェフ記者（プノンペン）

カンプチア人民共和国の首都プノンペンで開かれていた東南アジアの平和を守るための国際フォーラムが閉会した。フォーラムにはカンプチアの各界代表をはじめ、約40カ国の代表と8国際団体の代表が参加した。フォーラム参加代表はポルポト政権が行った大量虐殺犠牲者の記念博物館になっている旧トウルスレン刑務所を視察した。この旧刑務所はプノンペン市内の高等中学校を刑務所にしたものだが、ここだけで二万人以上の人が投獄され、絞首刑や銃殺刑に処せられた。投獄された人はクメール人、ラオス人、インド人、パキスタン人のほかオーストラリア人、フランス人、イギリス人、アメリカ人と広い国籍にわたっていて、文字どおり老若男女が犠牲者となった。

ここを視察した会議出席者のうちフランス代表のバンデマーシュ夫人は次のように語っている。

「トウルスレンで見た恐ろしい光景は決して忘れられないでしょう。カンプチア民族は自分たちの国の歴史のなかで一番ひどい状態を味わったのです。私がはじめてカンプチアに来たときから4年たちましたが、この4年のあいだにカンプチア人民共和国はたくさんの成功を収めました。人間を虐殺することはできても、自由と平和を求める人の心までは殺せないというよい証拠です」

国際フォーラムの参加者はコミュニケを採択して閉会したが、そのコミュニケは次のように述べている。

「ベトナム社会主義共和国、ラオス人民民主共和国、カンプチア人民共和国の平和的な提議は東南アジアにとって大きな安定要因である。ベトナム、ラオス、カンプチア三国首脳が最近のビエンチャン会議に提出した提案は、これら三国が真剣に平和を望んでいて、東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟諸国と建設的話し合いをする用意があるという証拠である」

ソ連の新聞記事から

（一九八三年3月前半）

ソ連共産党中央委政治局の発表

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、コルホーズ・ソフホーズ生産に集団請負制を導入するオルグ（組織者）の活動を強化する問題を検討した。ソ連共産党中央委政治局は、労力と資金の支出を減らしても、農業生産で高い成果をあげることのできる集団請負制を取り入れたコルホーズ、ソフホーズ、その他の国営農業企業の経験を承認した。

ソ連共産党中央委政治局はS・マシェル・モザンビーク解放戦線（FRELIMO）議長・モザンビーク人民共和国大統領のソ連友好訪問の成果を検討した。

ソ連共産党中央委政治局の会議ではS・オルショフスキ・ポーランド人民共和国外相との会談・交渉の結果にかんするN・A・チーホノフ、A・A・グロムイコ両同志の報告ならびにその他のソ連対外政策の若干の諸問題が聴取された。（プラウダ紙3月11日号）

ソ連科学アカデミー総会

3月2日にモスクワで開かれたソ連科学アカデミー総会は、カール・マルクスの生涯と活動や人類の発展に対するマルクスの学説の変革的影響について討議した。

総会の開会の辞を述べたA・P・アレクサンドロフ・ソ連科学アカデミー総裁は、全世界のその後の発展に決定的な影響を与えた、社会主義の科学的根拠のある思想の発生は、カール・マルクスの名と結びついている、と指摘した。

P・N・フェドセーエフ・ソ連科学アカデミー副総裁は、「カール・マルクスと現代」と題して報告演説を行った。（プラウダ紙3月3日号）

国際婦人デー記念祝賀会

ソ連では3月8日の国際婦人デーは、春と母性の幸せのシンボルとして最も楽しい祭日の一つになっている。

3月5日、ソ連ボリショイ劇場でモスクワの党機関、ソビエト機関、社会団体主催の国際婦人デー祝賀会が開かれ、R・F・デメンチエフ・ソ連共産党モスクワ市委員会書記がソ連共産党中央委員会の祝辞を読み上げた。A・P・ビリュコフ全ソ労働組合中央評議会書記は、ソ連共産党、ソ連政府が婦人の同権に関するレーニンの遺訓をたえず創造的に実現していることを指摘した。ソ連では婦人の地位の不断の改善、社会生活のあらゆる分野での役割の向上に対する配慮が、国の政策のレベルに引き上げられ、一連の社会・経済・法的措置によって保証されている。（ソビエト・ロシア紙3月6日号）

国際婦人デーあれこれ

☆ことしはロシアで初めて国際婦人デーが祝われてから70年目にあたる。70年まえの国際婦人デーには、婦人の平等の経済的、政治的権利の獲得をめざして闘うことが主要なスローガンとして掲げられた。

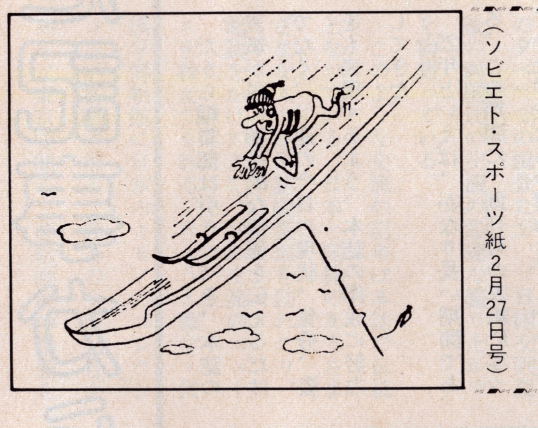
☆ソ連では婦人は労働者と職員の51%、農民の47%を占め、働く婦人の半数以上が知的労働に従事している。

☆学生全体の52%は婦人である。ソ連では医師の69%、裁判官の33%、科学者の40%以上が婦人である。

☆農業専門家の1/3以上は婦人である。婦人の機械取扱要員のノルマは男子のそれよりも10%低い。

☆一九八一年から婦人の産前産後の休暇が増やされ、一人暮らしの母親の扶助料が引き上げられ、二人以上の子供を持つ婦人の有給休暇日数が増やされた。

（モスクワ・ニュース紙3月6日号）



（ソビエト・スポーツ紙2月27日号）

海難救助

極東船舶公社の船舶は、過去1年間に遭難事故にあった43隻の外国船を救助した。沖縄の那覇港の海上保安本部長はディーゼル船「フェリクス・ジェルジンスキー」号に次のような電文を送った。

「貴船は迅速かつ的確に、海の兄弟愛にのっとり、ネプチューン・スカイ号の乗組員を救援し、救助しました。最も高い賞賛と賞に値します。このような行動は真の海員の行為です」

「迅速かつ的確に」――それは超人的な努力の7時間であった。嵐の中で、しかも夜に…

（モスクワ・ニュース紙3月13日号）

レニングラードの映画祭

第16回全ソ映画祭は3月17日、ソビエト映画誕生の地レニングラードの「オクチャブリスキー」ホールで開かれ、各共和国から出品されたあらゆるジャンルの一〇〇本以上の映画が上映される。

（ソビエト文化紙3月15日号）

創刊号に載った記事から



本誌創刊号（1958年4月発行）の表紙。顔に◯印のついているのが（左から）ミハイル・オルロフとガリーナ・ゴロドニャク。

写真1は本誌創刊号（一九五八年4月）の表紙である。一九五三年に完成したばかりのモスクワ大学の新校舎を背景に、1年生が7人写っている。

創刊号でこれらのモスクワ大学生を紹介したのには、特別の意味があった。編集部は、ソ連国民について日本の読者によく知ってもらいたかった。〝大人〟の道を歩き始めたばかりのこの学生たちの、若々しい、喜びに輝く顔を見てもらいたかった。彼らの運命がどう展開するかは、まだだれにも分からない。だが、彼らが平和な時代に生きており（みんな幼年時代に第2次世界大戦の惨禍を経験している）、国の最高学府で学ぶことを可能にしてくれた配慮深い平和愛好国家に住んでいることが、そしてみんなせいぜい18―20歳だということが、カメラのまえでのこのような笑顔となって現れたのである。

だから編集部は引きつづき、本誌の表紙が単に補足的な情報を伝えるだけでなく、ソ連の今日の現状、気分、姿をも表現するよう、本誌の作成に努力してきた。

25年といえば、かなり長い期間である。この期間に、創刊号の表紙に写っていた学生たちの運命はどうなっただろうか？ われわれはそれをぜひ読者のみなさんにお話ししたいと考えた。本誌記者マリナ・ルイクリナが〝追跡〟を開始し、そのうちの2人の行方が分かった。ミハイル・オルロフとガリーナ・ゴロドニャクである（写真1の左から3人目と6人目）。**写真4**はその2人が学内食堂にいるところを写したもので、創刊号11ページに掲載されている。25年後のこの2人については、本誌20―27ページ、78―85ページを読んでいただきたい。



日本映画『愛すればこそ』を上映中のモスクワのメトロポーリ映画館



日本公演の印象を語るバレリーナ、オリガ・レペシンスカヤ

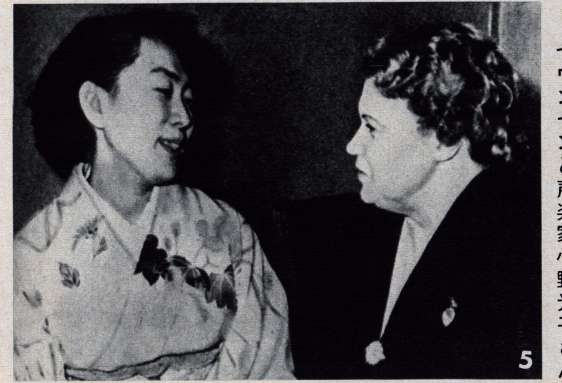


モスクワ大学の学内食堂で食事をするミハイル・オルロフとガリーナ・ゴロドニャク

創刊号のページをくると、過去の懐かしい出来事に出会う。ソ日関係の重要な出来事で、本誌が取り上げなかったようなものはないだろう。本号の4―13ページに掲載されている日本の貿易経済代表団のソ連訪問の記事もそのような記事の一つだ。しかしわれわれは、もっと〝些細な〟ことにも注意を払った。それらは実際には決して些細なことではないからだ。

創刊号に載っている写真の中からいくつか紹介すれば、**写真2**はモスクワのメトロポーリ映画館で日本映画『愛すればこそ』が上映されたときのもの。映画は珍しさも手伝って、連日満員の盛況で、ソ連の観衆に強い感動を与えた。**写真3**は日本公演の印象を語るバレリーナ、オリガ・レペシンスカヤ、**写真5**は当時モスクワ音楽院に留学中だった声楽家、小野光子さん、**写真6**は雪舟展に見入る人々、いずれもモスクワの労働組合会館で開かれた「日本の夕べ」での風景だが、ソ日国交回復後の両国民の交流の急速な盛り上がりを物語っている。

このような交流の記事は本誌の伝統となっている。日本と関係のあるさまざまな人々が本誌編集部を訪れたり、電話をかけてきて、ソ日交流のニュースを教えてくれる。きょう人類学・民族学博物館に日本のキモノのコレクションが寄贈される、囲碁の交流試合がある、東京で開くソ連絵画展の準備をしている、結婚宮殿で日本人カップルが式を挙げるからカメラを忘れずに、等々といった具合だ。こうしたことがまず思い出される。こんなことがこの25年間にどれほどあったことだろう！ 本誌はまさにソ日交流25年間の年代誌である。このような記事が読者のみなさんの関心を呼ぶことを期待しつつ、これからもわれわれはいっそう努力して、ソ日両国民間の友好の事業に寄与したいと思っている。



ロシア連邦共和国人民芸術家イルマ・ヤウンゼンと声楽家小野光子さん



雪舟展に見入る人々

創刊25周年

創刊号の主人公はいま……

母校モスクワ大学の教壇に立つ

本誌記者 マリナ・ルイクリナ　カメラ A・ルイスキンほか

本誌創刊号の表紙には、国立モスクワ大学の1年生たちの写真が載っている。モスクワ大学は一七五五年の創立以来、ソ連の科学の中心と見なされ、しばしば、わが国の〝大学本部〟と呼ばれている。本誌の創刊号でこの大学の学生たち、わが国の理性の希望である人々を取り上げたのは、多分そのためだったろう。

本誌の創刊25周年にあたって、この表紙に載った学生たちが、その後どのような人生をたどったのかを追跡してみるのも興味深いだろう。当時の学生たちの中から2人を、本誌記者マリナ・ルイクリナのルポで紹介しよう（もう一人のガリーナ・ゴロドニャクについては、78ページに掲載）。

モスクワっ子ミハイル・オルロフは一九五七年にモスクワ大学地質学部に入学した。本誌創刊号で記者が彼について知り得たことはこれだけだった。

この人を探し出すのに、それほど苦労はいらなかった。モスクワ市民住所案内所でたずねると、モスクワにはミハイル・オルロフという人物は六〇〇人いる、という返事だった。もっと具体的な手がかりが必要だ。

モスクワ大学地質学部に電話した。一九六二年の卒業生名簿はないだろうか、と思ったからだ。

「ミハイル・オルロフですか？」と学部長秘書が聞き返した。「別人かもしれませんが、同姓同名の人物が水文地質学講座で働いています。いま電話に呼びましょう……」

運がよかった。ミハイル・オルロフ、43歳。地質学博士候補、助教授。これが探していた人物だった。

私たちはオルロフが働いている学部



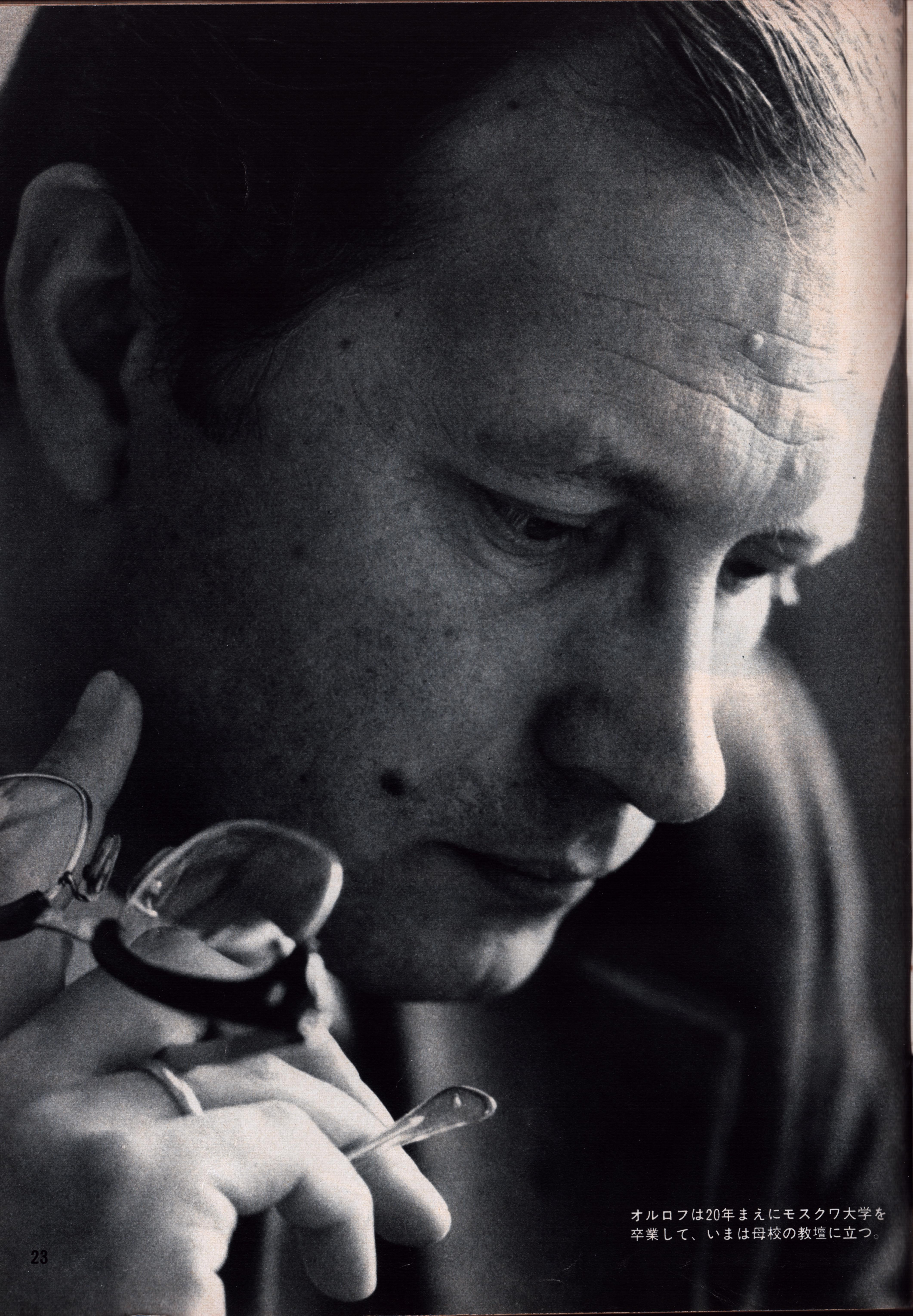
1970年代にオルロフはタタール自治共和国（ボルガ上流域）で仕事をした。当時ここのナベレジヌイエ・チェルヌイ（現ブレジネフ市）では世界最大級のトラック工場——カマ自動車工場が建設中だった。写真はカマ自動車工場の組立てライン。





オルロフの生涯はモスクワ大学と切り離しがたく結びついている。

大学5年生のときオルロフは東シベリアで実習し、それが卒業論文のテーマになった。当時はまだ基点になる線路が完成したばかりだったバム鉄道は、一九八四年秋の全線開通をめざして工事が進められている。



オルロフは20年まえにモスクワ大学を卒業して、いまは母校の教壇に立つ。

の水文地質学講座で会った。

25年といえば、人生にとって決して短い期間ではない。まして、人間18歳からの25年間といえば、最も活動的な期間だろう。

私はジャーナリストとして、さらにもう一つの理由で運がよかった。それは、いわゆる"書斎派"の地質学者、今では学生時代の思い出だけに生きている退屈な人に出くわすことも考えられたからだ。しかし、ミハイル・オルロフは、地質学者としては願ってもない地質学者であり、地質学を天職としている人だった。彼には、一つ所に座って、他人のデータをいじくっているのは退屈で仕方がない。ほとんど全国をまわり歩いた。運命と言ってしまえばそれまでだが、彼が仕事をやったところは、どこもすべて、工業的に極めて重要な場所ばかりだった。

学生時代からオルロフは毎年実習に出かけた。行ったのは、クリミア、カフカズ、ウラル、ハバロフスク地方だった。卒業論文は『水文地球化学的方法による鉱床探査』。これはアンガラ河畔での実習にもとづいて書かれたもので、当時現地では、今のバイカル・アムール（バム）鉄道の基点になる線路が完成したばかりだった。彼は鉄道の地盤の特性を研究し、駅の建設場所を選ぶ決め手となる地下水を探した。

一九六二年、学部事務局のあっせんで中央運輸研究所に就職したミハイル・オルロフはカザフスタンへ出かけ、処女地で働いている地質学者グループの指導を任された。バルハシ湖畔に鉄道を建設する可能性を水文地質学的に根拠づけるのが仕事だった。それだけでなく、この地域は多種類の有用成分を含む鉱石が豊富なので、地質学者グループが行う調査は採鉱業にとっても必要だった。処女地の開発は当時、国の発展にとって、農業地域の拡大にとって、巨大な意味を持っていた。

出張に次ぐ出張で、何年かが過ぎた。ミハイル・オルロフも専門家としての腕を磨き、実地作業の経験も十分に積んで、自分の研究の成果を深め、仕上げる必要性を感じるようになった。

一九六七年、オルロフは再びモスクワ大学のもとの講座にもどった。こんどは教師として。論文を書く一方、ゼミを指導し、学位論文に取り組む毎日がつづいた。一九七二年には、『炭酸質岩のろ過特性の形成』という論文で博士候補の学位を取得した。それから少しのちに、教務担当副学部長に任命された。それでも彼がフィールド・ワークへの愛着を捨て切っていないのは明らかだった。学位論文の準備と平行して、彼はタタール自治共和国南部で地質調査隊を指導し、岩石のろ過特性の形成の研究をつづけた。一九七二年には、学生たちを連れて、ドニエスト



講義を終えて学生の質問に一つひとつ答える。

水文地質学会で報告するオルロフ。







▶　ラトビア共和国ケメリのサナトリウム。この鉱泉地帯でオルロフは地下水の調査をした。

◀　1962年にオルロフが出張調査をしたカザフスタン。当時は処女地開拓の真っ最中だった。





▶　エキバストゥーズ炭田（カザフスタン）。オルロフにとっても思い出の深い場所である。

◀　バシキール自治共和国の首都ウファ。この共和国でもオルロフは調査を指導した。







ル水力発電所の建設予定地へ行き、発電所が環境に与える影響の水文地質学的予測を作成した。

　時がたつにつれて、副学部長の職務は仕事の妨げになり始めた。そこでオルロフはこの名誉あるポストを降り、教育活動（週3－4回の講義、ゼミ、卒論指導）と研究活動をつづけた。研究活動では、従来どおり、定期的に実地調査に出なければならなかった。

　今年中にオルロフは非常にむずかしい研究を仕上げるだろう。これはモスクワ大学の同僚とラトビアの微生物学者や数学者、生化学者たちと共同で、ラトビアの有名な鉱泉保養地ケメリ市一帯で行ってきたものだ。保養地は不断に拡張されている。需要の急増にともなって鉱泉の質が変わってしまうのではないか、という心配の声が上がっているからだ。オルロフは言った。

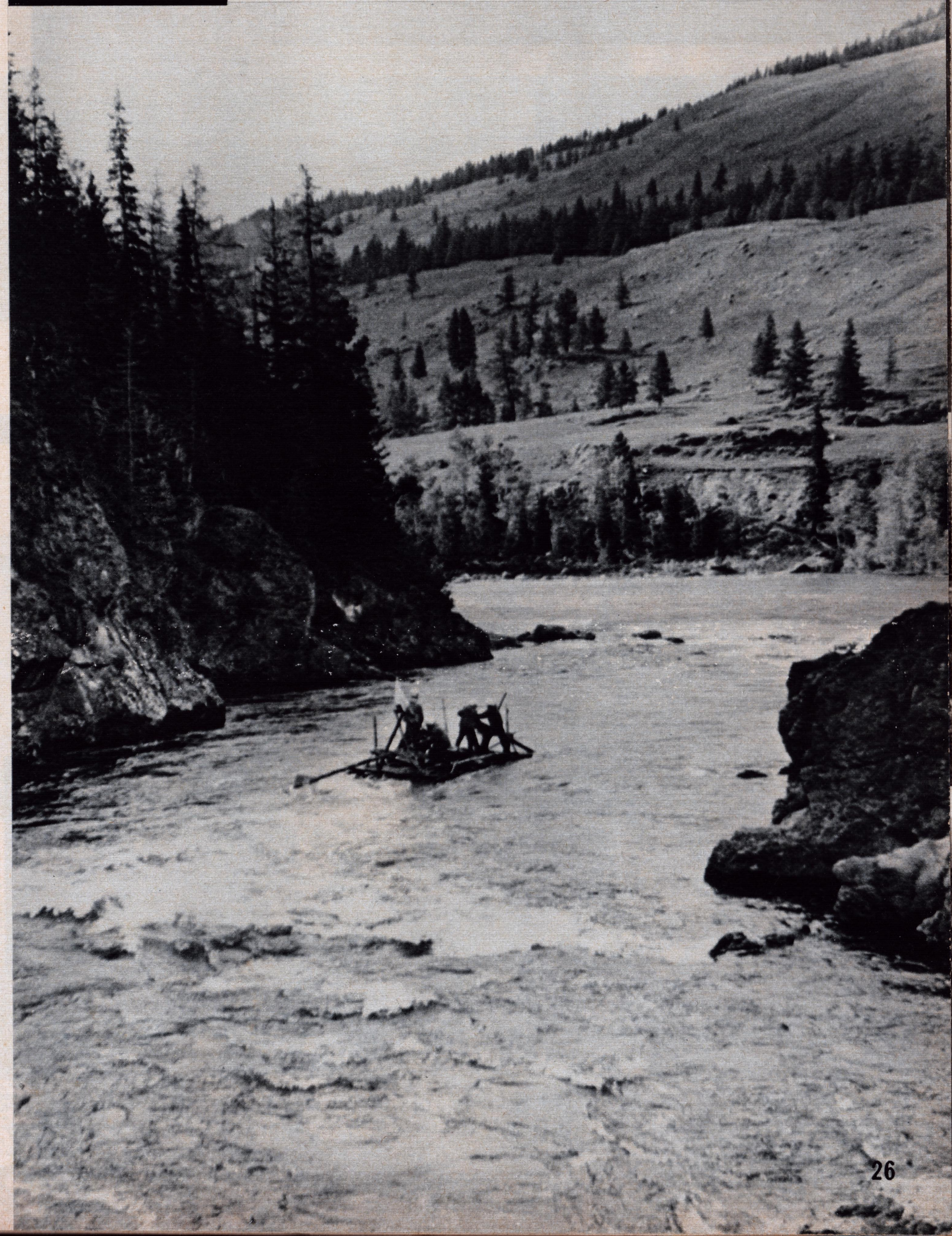
「ソ連のいくつかの地域では、地中から汲み上げている地下水の量が、天然の水資源の量とほとんど同じくらいにまで近づいてしまいました。だからい

左上　職業柄さまざまな図書館を利用するが、モスクワ大学の図書館がなぜかいちばん好きだ。

左中　地質学者は当然のことながら考古学にも関心がある（モスクワ大学地理学博物館地質学セクションで）。

左下　水文地質学講座の教員会議



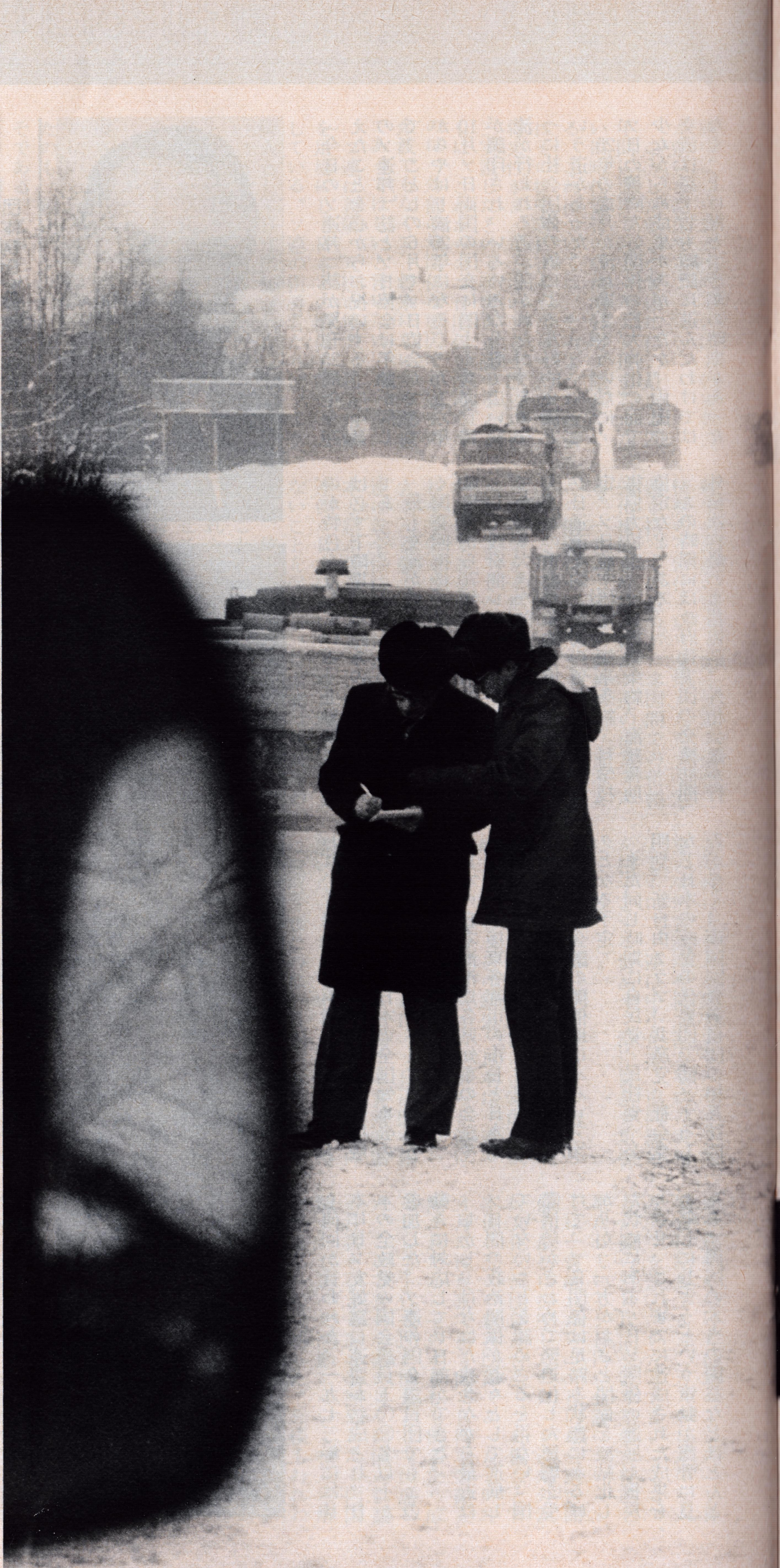


ま、自然のサイクルを乱さずに地下水を合理的に利用するように、考えを切り換える必要があります。

環境保護と言うとき、私たちはふつう、森や川、湖、空気のことを思い浮かべます。現在でも、人類は環境汚染とたたかう多くの方法を知っています。人々の将来の生活に大きな影響を与える地下水も、絶えず汚染が進んでおり、その化学的組成が変わっています。地下水の浄化と地殻の合理的な利用という問題は、いますぐにでも解決しなければなりません。私の仕事は、非常に重要な大きな仕事の一部なのです。私はつねに、人々に対する自分の責任を感じています。自分の直接の活動が未来の世代の生活に対して少なからぬ役割を演じているということを知るのは、とても大事なことだと思います」

オルロフが書いた論文は40本。仕事はますます多面的になっており、学会での報告、水文地質学の教科書の準備（共同執筆）、モノグラフの作成への参加もある。そのほか、オルロフは学

右上　オルロフのゼミは形式にとらわれないので学生たちに人気がある。
右下　地質学者は探険家でもある。必要ならどんな場所にでも出かけて行く。毎日毎日が遠い旅への新しい出発だ。
左　路面凍結防止剤による地下水の汚染を調べるためのボーリング地点を打ち合わせる。



部付設の地質学校の理事長でもある。この地質学校では毎晩、6年生から10年生までのモスクワの児童たちが学んでいる。目的は、地質学に対する関心を子どもたちに植えつけ、子どもたちがばく然としか知っていない最新の地質学についての知識を与えることにある。

おまけにオルロフは博士論文を準備しているのだ。彼は言う。

「少しまえ、私は新しい仕事に着手しました。今回はロシア連邦の欧州部の一部を成すモスクワ州です。非黒土地帯は工業と農業が非常に発達しており、ロシア連邦共和国はもとより、ソ連全体の国民経済に重要な役割を果たしています。ここの地質学的プロセスは自然の変化よりも人為的な変化――土地改良や化学肥料の投入、工業企業による大気の汚染その他によって大きな影響を受けています。近いうちにモスクワ州のあり得べき水文地質学的状況の予測が作成され、計画機関に提出されることになっています。この仕事の結果が、私の博士論文の基礎になると思います」

「ご自分の生活でいちばん大事だと考えていることは何ですか？」

「私は幸せな人間です。どこにいようとも、モスクワでも出張先でも、毎日仕事に満足しています。それだけでなく、私はいつでも学生たちを相手にしていますので、そのせいでしょう。いつも若いつもりでいられます。私の生活でいちばん大事なのは、大学から離れなかったということでしょう」



ソ連対外友好文化交流団体連合会幹部会議長　ジナイダ・クルグロワ

ソ連対外友好文化交流団体連合会（対文連）は、「今日のソ連邦」の創刊25周年にあたり、同誌に心からお祝い申し上げます。

「今日のソ連邦」は〝平和と諸国民友好のための情報〟をモットーにするノーボスチ通信社の提供記事で発行されていますが、この雑誌の目的と課題はソ連対文連の活動に近く、相通じるものがあります。

「今日のソ連邦」はノーボスチ通信社のこのモットーに完全に従って、すでに四半世紀にわたり日本の広範な層の人たちに、ソ連国民の生活について、日本国民との相互理解と友好を発展させたいというソ連国民の願いについて伝えてきました。その誌上ではソ連対文連や会員数50万人を上回るソ日協会の多面的な活動が絶えず紹介されています。

「今日のソ連邦」の編集部と読者の皆さんが、ソ連と日本の善隣、信頼、協力を強める上で新たな成功を収められることを希望します。

ソ日協会四半世紀の友好と協力の道



ソ日協会理事長、ソ連海運相　チモフェイ・グジェンコ

「今日のソ連邦」誌が発刊25周年を迎えたことを心からお祝いする。「今日のソ連邦」誌とソ日協会は年齢が同じで、ことしの6月でソ日協会ができてからやはり満25年になる。一九五六年10月ソ日両国の国交に関する共同宣言が調印され、いろいろな分野で広い交流が行われる道が開かれたが、その一つに社会団体の線による友好的交流という道があった。

25年の歳月が流れ過ぎるあいだに、ソ日の善隣友好関係の拡大強化の面で少なからぬ成果があがったが、両国の交流は必ずしも順調に進んだわけではなく、上げ潮と引き潮の時期があったのが特色をなしている。上昇期の次には必ず下降期、足踏みの時期が来たのであった。

最も交流が盛んだったのは、おそらく国交回復後の最初の20年間だった。60年代から70年代までの時期には、主として政府間レベルで両国の相互関係でかなり大きな前進が遂げられた。いくつかの重要な条約や協定が結ばれた。ソ日通商条約と最初の貿易・支払い協定、ソ日航空協定、領事条約、科学技術協力協定、ソ日漁業条約、海難救助協定などである。

この時期には政府代表団の交換訪問、外務次官級の事務協議、外相会談が行われ、首脳会談や両国首脳のメッセージ交換が行われた。地方レベルの接触も順調に進んだ。日本の全国知事会の協力のもとにソ連のシベリア、極東各地の州・地方執行委員会議長（知事）と日本の日本海沿岸各県知事の会議や、シベリア、極東各都市の市長と日本海沿岸各都市の市長の会議も定期的に開かれるようになった（ことしの次回日ソ沿岸市長会議の開催地はハバロフスクの予定）。

また同じ時期に自民党、民社党、公明党、新自由クラブ、共産党、社会党など日本の政党の代表団で訪ソするものが多く、両国国会議員団の相互訪問も何回か行われた。一九七三年には日本に日ソ友好議員連盟が結成され、日本の全政党の国会議員五〇〇名以上が参加した。ソ連の国会議員団でもこの動きに対応してソ日部ができた。

しかし、はなはだ残念ながら最近はソ日間の政治関係が遅々として進展していないことを認めざるを得ない。国際情勢がきわめて緊迫化した影響を受けて、ソ日関係は足踏み状態にあるばかりか、一方がわざと関係を凍結化した状態にある。日ソ関係の進展を後戻りさせ、これまでに達成された成果を台無しにしようという策動が露骨に見える。両国の本当の国益などほとんど

眼中にない日本国内や外国の特定勢力が動いた結果である。

こうした動きの背後には、最近の20年間に世界で起こった大変化を考えない旧時代独特の政治的姿勢が隠れている。これについては、そのような政策はその提唱者に害をもたらすだけで、将来性がまったくないことを歴史が再三実証したという事実を強調するとともに、これからのソ日関係を決めるものは、外部の無関係な要因でも過去の余波でもなくて、将来にたいする配慮であってほしいと言いたい。

ソ連は善隣、互恵の協力、相互信頼を足場にして日本との関係を築こうとしている。ソ連の指導者たちは、よき隣人として日本国民と共存していきたい、何ものも両国の関係を曇らせることがないように、信頼と好意と協力の雰囲気がソ日関係の主調となるように希望すると再三力説してきたのである。

ソ連がこれまでソ日の協力関係を発展させ、日本との善隣関係を固めるためにいろいろな具体的提案を行ってきたのも、前述のような目標があればこそである。これらの提案を実行に移せばソ日関係に堅固で安定した土台を据えられたはずであった。これらの提案のうちからほんの二、三をここに挙げてみよう。一九七五年にソ連は、ソ日両国が意見を交換して、善隣・協力条約に調印することを日本側に提案した。条約案は、すでにしっかりした条約的基盤の上に置くべき時を迎えていた両国関係の諸領域を包括するとわれわれが考えたものであり、七八年に日本政府に伝達された。また、極東における戦争の危険の除去、安全保障の強化、情勢の正常化という見地から重大な意義を持っているのが、多国間での信頼強化措置を呼びかけたソ連の提案である。一九八二年にわれわれは、日本とこの問題について、まず二国間で交渉を始める用意があると声明した。

核戦争を未然に防ぐこと、これは全人類にとって一日も後まわしにできない課題であるが、ソ日両国民が力を合わせて努力したら、この目標の達成に大きく貢献できよう。このために、ソ連は安全保障強化にかんする条約を日本と結ぶ用意がある。この条約は、ソ連側が日本にたいして核兵器を使用しないことを保証し、日本側は核兵器の生産、使用、日本領土内への配備をしないことを内容とするものである。

これらの提案はすべてソ日関係を安定させる立派な基礎になると、われわれは考えている。

そればかりではない。緊張緩和と善隣を物質的に裏付ける手段として大きな重要性をもつのが貿易経済協力である。一九七三年以降われわれは経済協力の原則を定めた政府間協定を結ぼうと日本側に提案している。ソ連が西側のすべての先進国とまったくこれと同じ協定を結んだことに注意を促したい。一九七六年にはソ連は、期限10－15年の長期経済協力協定を調印しようと日本側に提案した（西ドイツと結んだ同じような協定の有効期限は二〇〇〇年まで）。通商面ではソ日両国の進歩は大きく、一九五八年度と比較すると、両国間の貿易高はほぼ一〇〇倍増え、一九八二年度は約五〇億ドルに上った。70年代に大きく進展したシベリア・極東の天然資源開発協力基本契約の実施とともに、ソ連は中小企業、協同組合を相手とする貿易や、沿岸貿易を重視している。

残念なことだが、経済協力の面でもいまある程度足踏み状態が見られ、ソ日交流の安定や貿易総額に否定的に反映している。その結果、日本はソ連の対資本主義諸国貿易で2位から5位に転落してしまった。

それでもわれわれは、ソ日両国の相互補完的経済構造に立脚する実務的協力は、今後数年以内に着実に伸びるに違いないと考えている。このことを特に確信させたのは、日本の財界、業界の空前の大型代表団がさきごろ訪ソしたことである。その団長は日本商工会議所会頭の永野重雄氏であったが、会議の席上でソ日双方が述べた建設的な対話から判断すると、故意につくられたいろいろな障害物が取り除かれて、両国の経済協力が長期にわたって安定した性格のものになる希望が生まれてきている。

順調な時もあり、またそれほど順調とは言えない時もあったこの年月、日本のさまざまな社会団体、まず第一に日ソ協会、日ソ親善協会、日ソ交流協会、日本対外文化協会、それに北海道の各地に開設された日ソ友好会館が、ソ日両国民の友好の強化に積極的に尽くしたことは、とても重要なことである。

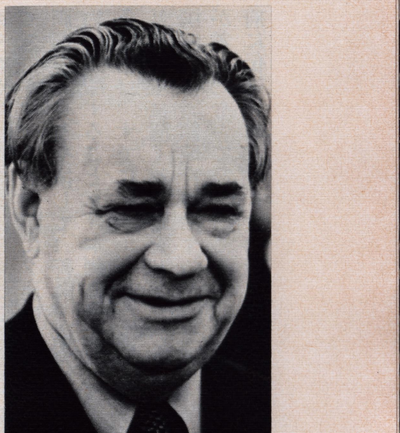
ソ日協会は日本の対ソ友好団体ときわめて密接な連絡、接触を保っている。交流のやり方は実に多種多様であるが、その詳細については36ページの「ソ日協会に結集する五〇万人の日本の友人たち」を読んでいただきたい。ここで、わが国の対日民間交流で重要な役割を果たしているソ日円卓会議についてとくに一言触れたい。ソ日円卓会議の開催を最初に提唱したのは、ソ連対外友好文化交流団体連合会、ソ日協会と日本側の五つの親善団体であった。昨年4月には東京で第3回ソ日円卓会議が開かれたが、そのとき私も80名から成るソビエト代表団の団長として出席した。このときの会議に日ソ両国の世論の注目をひき、広い範囲にわたる両国間のさし迫った問題について相互理解を得ることに成功した。今後もわれわれは、この種の両国間の交流を盛んにするために日本側と全面的に協力するつもりである。

ソビエトの世論は久しい以前からソ日両国民間の相互理解を深め、協力関係を盛んにしようとし[illegible]こそ、ソ連国内の各共和国、各都市に支部をもつソ日協会五〇万会員の最も大きな任務である。

われわれソ日協会の会員であり、ソビエト世論を代表する者は、ソ日関係の将来については明るい見通しを持っており、あらゆるレベルでの両国間の対話をこれからもますます盛んにして、社会団体同士の接触を強化する心がまえである。両国の友好・善隣運動は、ソ日双方の善意と熱意を前提とする過程であり、本当の信頼感と好意の雰囲気をつくりだし、ソ日関係を絶えず上昇線を描いて発展させる道はこれ以外にはない。

ソ日貿易・経済協力とその見通し

ソ連貿易相、ソ日経済委員会代表委員
ニコライ・パトリチェフ



「今日のソ連邦」創刊25周年に当たり、読者の皆さんにごあいさつを述べさせて頂きます。

「今日のソ連邦」誌の歴史は、昨年の12月に通商条約調印25周年を迎えたソ日経済関係の歴史とほぼ一致します。

過ぎ去った四半世紀に、双方は互恵の貿易・経済交流を拡大するために少なからぬことをなしとげました。ソ連の対日貿易高は25年間に著しく増大し、一九八二年には約三五億ルーブルでした。過去5年間（一九七六―八〇年）だけでも、貿易総額は倍加し、一二〇億ルーブルを超えました。ソ連は用材、綿花、カリ塩、非鉄金属、貴金属などの商品の日本への供給で、重要な地位を占めています。同時にソ連は日本から鉄鋼製品、とりわけ大口径鋼管、道路建設用機械、化学プラントその他の商品を大量に輸入しています。

過去20年間に互恵貿易の構造は改善され、貿易交流の諸形態が拡充されました。60年代半ばからソ日両国間に、シベリアと極東の天然資源開発における経済協力が成功裏に実現され、沿岸貿易や協同組合貿易のような貿易形態が発展し、科学技術交流が深まりました。ソ日関係の条約・法的基盤も強固になりました。すなわち通商条約が発展する中で、数次にわたる、期限1年、3年、現在は5年の貿易・支払い協定が結ばれましたが、そのうちの最近の一九八一―一九八五年度協定はモスクワで一九八一年5月22日に調印されました。

N・A・チーホノフ・ソ連閣僚会議議長が朝日新聞社の質問への回答の中で指摘したように、これらすべては〝ソ日関係における資産〟です。

それとともに、二国間の貿易・経済交流拡大の大きな可能性は決して完全には利用されていません。これらの原因は良く知られています。日本は、両国関係に安定した長期の基盤――経済、工業、科学技術での協力にかんする長期の政府間協定や、期限10―15年、さらには25年にわたるこのような協力の発展計画――がないために西欧諸国から大きく立ち後れています。ソ連と西欧諸国との間には長期の協力協定や協力計画があり、それが現在の世界における不安定な政治・経済情勢のもとでさえ、これらの国との貿易・経済交流の発展を安定させる影響を与えています。いうまでもなくソ日貿易・経済交流の正常な発展の歩みに否定的な影響を与えているのは、この交流の発展を、御都合主義的なあれこれの政治問題の解決に従属させようとする日本側の態度です。米国の対ソ〝経済制裁〟政策に追従した結果、日本は対資本主義先進諸国貿易高で伝統的に占めていた第2位という地位から第5位に落ちました。

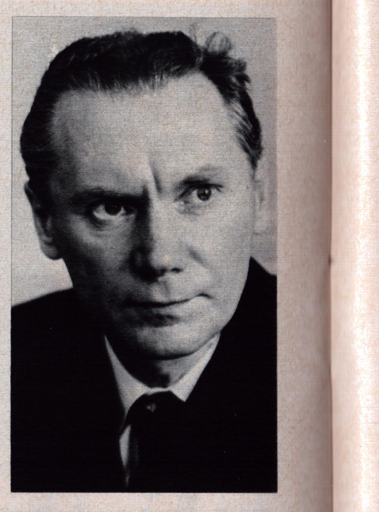
ソ日貿易の途上にある人為的障害を取り除き、ソ日貿易・経済関係に長期の安定した基盤をつくることは、将来の平等・互恵の貿易と経済交流を発展させるための最も重要な前提です。

日本の実業界がソ連との互恵の貿易・経済協力の発展に関心を示していることを指摘しないわけにはいきません。この文章を書いているいま、私たちは永野重雄・日本商工会議所会頭・日ソ経済協力委員会委員長を団長とする実業界代表団のソ連訪問に期待しています。この代表団はソ日貿易・経済関係史において最も代表的な代表団の一つです（商社、メーカー、銀行の二〇〇名以上の代表が参加）。このような会合は、私たちに両国間の貿易・経済、科学技術関係の分野の最も広範囲の諸問題について相互の意見交換を行う機会を与えてくれます。双方は、二国間関係の現状を分析すると同時に、ソ日間の平和と善隣のために互恵と平等に基づいて二国間関係を一層発展させる道を審議し、決めるだろうと、私たちは考えています。日本代表団の訪問は、日本との貿易・経済関係の発展の見通しと道すじを決定するうえで大きな意義を持ちうると思います。

ソ連はどうかといえば、日本との全面的な、平等で互恵の協力を発展させるわが国の方針は一貫していることを強調したいと思います。そのさい私たちは、貿易・経済交流の順調な発展は、ソ日間の相互理解と善隣の強化を促進し、世界平和に役立つという立場に立っています。

漁業協力の大きな可能性

ソ連漁業相
ウラジーミル・カメンツェフ



ソ連と日本は世界の漁業先進国の中の二大国です。両国の互恵協力は、太平洋水域での漁業の発展に大いに関係しました。

世界的に沿岸水域での漁獲量が削減する傾向にあり、むしろ遠洋漁業が発展していますが、これはすべての漁民に対し沢山の新しい問題を提起しました。漁獲量を増やす方法の一つは、国内水域で養殖漁業を発展させることです。ソ連ではこの問題は、内海と淡水域の魚族資源を調節し、養魚業を集約的に発展させることによって解決が進められています。池、いけす、湖などの養殖漁業での魚の生産テンポは著しく引き上げられ、現5カ年計画期（一九八一―八五年）中にそこでの生産高を倍加することができるでしょう。

要するに、わが国の漁業における新しい方向は、栽培漁業を発展させることです。栽培漁業は将来、国の魚製品の需要を最も完全に満たすものとして、漁業部門で主要な地位の一つを占めることができます。

私たちは漁業の主要な発展方向を定める一連の目的別総合計画を策定しました。すべての計画についてここで詳しく触れることはできませんが、そのうちから、特に極東水域向けに策定された二つの計画を挙げておきたいと思います。第一の計画は市場向け高級魚の大規模再生産を目ざすもので、第二の計画はソ連の大陸棚の生物資源を合理的に利用し、そこに栽培漁業を組織しようとするものです。

現在の5年間とそれ以降のソ連漁業の発展問題は、もちろん、諸外国、何よりもまず隣国日本との互恵科学技術協力を実現することによって、より効率よく、より短期間に解決することができます。

ソ日漁業関係は長い歴史を持ち、沢山の協定によって調整されています。これは、二大漁業国であるソ連と日本が世界の海洋、何よりもまず北西太平洋の生物資源の合理的な利用に関心を持っていることによります。

ソ連の漁業政策は、世界の漁業で諸外国との互恵協力を発展させたい、すべての問題はパートナーの正当な利益を考慮に入れて総合的に解決しなければならないということを常に基本にしてきました。このことは一九七七―七九年に結ばれたソ日漁業協定で改めて確認されました。

ソ日漁業関係の重要な面は、一九七八年4月21日付けの政府間協定に成文化されている科学技術協力です。まさにこれによって、二大漁業国間の漁業関係を発展させるためのしかるべき基盤がつくられたのです。

実際的な協力問題はすべてソ日漁業委員会で解決されます。委員会は年次会議で、情報と資料の交換、調整された調査・研究、専門家の交流などを含む諸計画を採択し、新年度の基本的な協力方向を決定します。

政府間協定は二国間の科学技術協力を深める基本的な手段ですが、唯一の手段ではありません。たとえばソ連漁業省は一九七四年12月27日に結ばれた経済・技術協力協定に基づいて日本の大洋漁業と長年にわたって積極的に協力しています。この期間に日本のパートナーから製網設備、冷蔵庫、海産物店用の設備、巻き締め機、魚肉ソーセージ製造工場、その他多くのものを買い付けました。一方、大洋漁業はわが国から鯨肉を買い、極東海域での共同カニ・エビ漁などに参加しています。

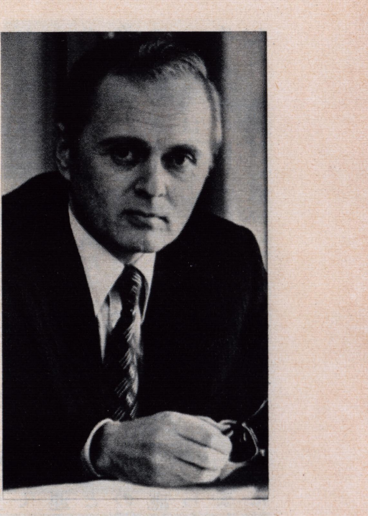
日魯漁業とも協定が調印されました。この会社とは、魚と水産物の工業的再生産と養殖、魚肉混合飼料の生産技術と機械設備、魚と海産物の加工技術、機械化、自動化の分野で協力しています。

ソ連漁業省と大日本水産会の間でサケ・マス再生産分野での協力協定も結ばれました。

両国の漁業関係の見通しについて言えば、その一層の発展と強化のための可能性は十分にあると言いたいのです。双方は魚族資源の状態の評価と漁獲量の予測にかんする共同実験、海洋水産学にかんする研究の調整、経験の交換、専門家の研修といった形態をまだ完全には利用していません。

両国は海洋栽培漁業の分野での栽培用の材料と情報の系統的な交換、オキアミの加工技術にかんする共同研究を行い、飼料の製法を共同で開発し、魚の病気とその予防法を研究することができるでしょう。

要するに、ソ日両国には漁業分野での協力を深めるための大きな可能性があります。日本との善隣関係や最も広範な互恵協力を発展させるわが国の方針は、一貫した、原則的なものです。



相互理解に重要なソ日文化交流

ソ連第一文化次官
ユーリー・バラバシ

「今日のソ連邦」誌の発刊25周年記念号で、ソ日文化交流の現状と見通しについて簡単に述べる機会を得て、心から喜んでいることをまず申し上げたい。

ソ日文化交流は全体的に見て、すこぶる範囲が広く、その形態も多種多様である。ソ日間の文化交流は第2次世界大戦後ソ日外交関係が再開する前に早くも発展しはじめ、代表団の交換、ソ連の芸能人の日本公演、画家・作家の日本訪問が盛んに行われた。その時以来人文科学の分野でのソ日文化交流は、その範囲と流れの強さを次第に加えて、遂に非常に大きな規模に及び、ソ日関係全体のうちでも重要な位置を占めるに至ったと、断言できる。

われわれはソビエト芸術の粋とソ連が所蔵する世界文化の宝をぜひとも日本国民に紹介したいと心から念願し、日本国民の要望に応え、そのきびしい美意識に敬意を払って、ソ連の最もすぐれた芸術家グループや優秀なソリストを定期的に日本に派遣し、ソ連の博物館所蔵の絵画の最高傑作の展覧会を催している。

たとえば、昨一九八二年だけでも、シベリアのクラスノヤルスク民族舞踊団、モスクワのロメン・ジプシー劇場、M・プリセツカヤらのバレエ・グループ、モスクワ児童音楽劇場、サーカス団、ピアニストのM・プレトニョフ、バイオリンのI・グルーベルトなどのソリストが、日本国内40以上の都市で公演し、二〇〇万人余りのファンを動員した。また私の知る限りでも、「ソ連の若い画家たちの作品展」、「芸術と革命」展（ロシア・アバンギャルド展）、「ソ連の人形と玩具展」、「レンブラント展」などが日本で開かれて、それぞれ大成功を収めた。

日本の古い独特な文化に対するソビエト国民の関心と興味は少しも衰えていないので、われわれとしても事あるごとに日本芸術の粋をソ連国内でできるだけ広く見せようと強くのぞんでいる。

昨年、日本からは静岡児童合唱団、松竹歌劇団、人形劇団「飛行船」、琴のオーケストラ、小沢輝佐子バレエ団、新潟少女バレエ使節団、そのほか有名なソリストたちがソ連で公演して好評を収めた。モスクワとレニングラードではこれまでソ連を訪れたことのある一流日本画家たちの作品展が開かれた。

まったく新しい形態の文化協力も育ってきた。一例をあげると、ソ連の演出家A・エーフロスが一九八二年に劇団東演で『ナターシャ』の演出にあたったことがそれである。この劇の主役は有名な女優栗原小巻さんが演じた。

残念ながら、ソ日文化交流はいつも順調に行っているわけではない。その原因の一つは、日本側の官庁がこの種の文化交流に助成金を出さないためだが、時によっては特定の有力筋が「政治的理由」と称して両国の文化交流に否定的な態度をとる場合さえある。

われわれを取り巻く国際情勢が複雑であるだけに、われわれとしては文化交流を上向きに発展させるのに貢献してくれる日本の社会団体、政治家、そのほか善意をもつすべての日本人の努力を高く評価したい。

この点に関連して、これまでソ日間の慣行となった「ソ日円卓会議」の意義について特に触れたい。ソ日両国の民間人のこの会議ではソ日文化協力問題に大きな関心が払われているが、このことは文化交流を前向きに発展させる具体的方法づくりに役立っている。

ソ連は善隣、内政不干渉、協力、互恵の立場に立ち、日本との関係を全力あげて発展させる用意がある。さらに、われわれはソ日双方が共同で立てた今後の文化交流計画を完全に実行するつもりである。

ことし、一九八三年の秋にわれわれは日本国内でロシア・ソビエト芸術祭を開催し、ボリショイ・バレエ、E・スベトラーノフ指揮の交響楽団、レニングラード・ボリショイ・ドラマ劇場、S・リヒテル（ピアノ）、M・プレトニョフ（ピアノ）などの日本公演を予定している。

ソ日両国の真の国益を踏まえ、さまざまな分野におけるソ日双務関係の諸問題に客観的態度で臨むならば、善隣と相互理解に基づく両国の協力を前向きに進めることができるはずである。

ソ連ジャーナリスト同盟

数万の会員を擁するソ連ジャーナリスト同盟は「今日のソ連邦」創刊25周年にあたり日本の読者の皆さんに心からの祝意を表します。

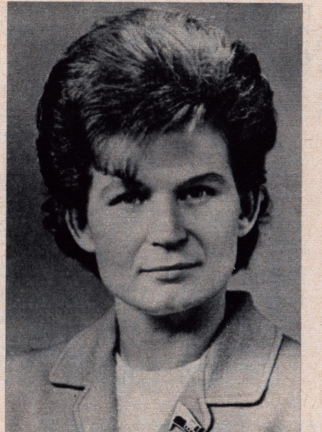
われわれソ連のジャーナリストは、日本国民もソビエト国民と同じく、世界で1、2を争う読書好きの国民であることを知って心から満足しており、「今日のソ連邦」に寄稿してソ連の生活やソビエト国民のことや、またソ日間の相互理解について日本の読者に話すことを喜んでいます。

「今日のソ連邦」はこれまで25年間、ソ日両国民の協力・親善関係を強化・発展するという事業に貢献することによって、平和の事業にも寄与しているのです。

われわれソ連のジャーナリストは、ソ日関係を盛んにする責任と大きな任務を十分理解しているので、常に客観的かつ良心的な態度でソ日の相互交流にかんする情報を伝えたり、両国の善隣関係の成立を終始一貫して追求するソ連の平和外交政策の話をするのに努めているのです。

昨年の11月、モスクワでソ日ジャーナリスト会議が開かれましたが、そのときの主な結論の一つは、ソ日関係を改善する大きな余力があるということ、ジャーナリストの任務はこの余力を現実のものとする手助けをするということでした。

われわれは、「今日のソ連邦」のソ日両国人からなる編集スタッフに対しては編集の成功を、また「今日のソ連邦」の読者に対しては、ご健康と、そして本誌を通じてソビエトの人々の生活への関心が満たされることを、心から望むものです。



ソ連婦人委員会議長
ワレンチナ・テレシコワ

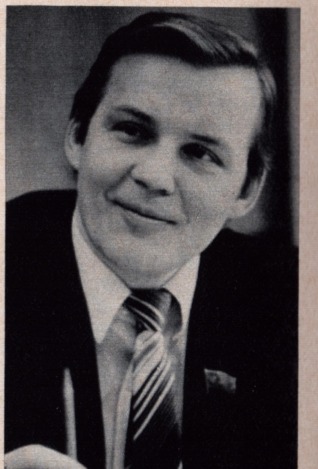
「今日のソ連邦」創刊25周年に当たり、ソ連婦人委員会を代表して読者の皆さんにごあいさつできることを大変うれしく思います。

ソ連の婦人たちは、日本の婦人たちや日本の全国民に対して尊敬の念と好感を抱いており、両国間の善隣・協力関係の発展を心から願っています。私たちは、日本の多くの人たちが同じ気持ちでいることを知っていますし、私は1981年5月に日本を訪問した際にこのことを改めて確信する機会を持ちました。

ソ連と日本の婦人たちには、祖国愛、子供たちへの愛情など共通するものが沢山あります。しかし、その中で最も大事なものは、平和を守り、これからの世代に平和な未来を確保し、人類を核戦争による滅亡から救いたいという双方の願いです。

1979年と1981年のソ日婦人会議で、現代世界における婦人の地位と役割、反戦運動への婦人の参加などの問題についての重要な対話が開始されました。私たちはこの会議が恒例のものとなり、ソ連と日本の婦人たちの協力が両国と両国民のために活発になることを希望しています。

この機会を利用して、「今日のソ連邦」の読者の皆さんに、そして皆さんを通じて全日本国民に、ご成功とご幸福、繁栄と平和な空を希望させて下さい。



ソ連青年団体委員会議長
V・アクショーノフ

ソ連青年団体委員会を代表し、「今日のソ連邦」とその読者の皆さんに創刊25周年のお祝いを申し上げます。

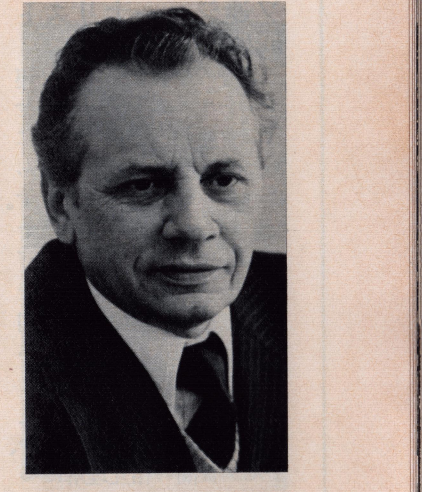
25歳というのは、若さが円熟の境地へと移行しはじめ、十分な知識と力が蓄えられ、それを実践に用いて成功を収めることのできる年齢です。

「今日のソ連邦」の読者の中には若い人たちが大勢います。彼らはこの雑誌によってソ連の青年がどういう生活を送っているか、何に関心を持っているか、何をめざしているか、どういう問題に取り組んでいるかといったことについて、自分の知識を増やすことができたものと思います。

現在、ソ連青年団体委員会は日本をはじめ世界140カ国の1350以上の青年団体と交流しています。われわれが交流している日本のパートナーには民主青年同盟、全学連、社会主義青年同盟、総評青年部、日本社会党青年局、公明党青年部、日本青年会議所、創価学会青年部、日本青年団協議会など、さまざまな政治的・思想的傾向の団体が入っています。にもかかわらず、われわれは、話が最も大事なこと── 相互理解を深め、平和と軍縮をめざし、核破局の脅威に反対する闘いでの協力を強化しなければならないということに及ぶ時は、これらの団体と共通の言語を見出しています。

日本の青年の皆さんのご幸福とご平安をお祈りします。

また、「今日のソ連邦」の若い読者がますます増えることと、同誌が今後もソ日両国青年の接近と友好に寄与することを希望します。



相互の観光旅行を盛んにしよう！

ソ連外国旅行公社「インツーリスト」総裁
ワレンチン・レベジェフ

こんど「今日のソ連邦」の創刊25周年記念号を通じ、読者の皆さんをはじめ、ソ連国民の生活に関心を持っているすべての方々にごあいさつする機会を得て、うれしく思っています。お互いによく知り合うということは理解することであり、その理解は、今日国際情勢が複雑なればこそ、ぜひとも必要な諸国民間の信頼を確立するための第一歩です。

何億人もの人々に自分の目で他の国民の生活、習慣、伝統、文化を見る機会を与える国際観光は、周囲の実状や他国にかんする情報を得る重要なルートです。

インツーリストはあらゆる国や地域の旅行代理店や運輸組織との接触を盛んにし、外国人観光客のソ連旅行を組織し、いろいろとコースやプログラムを準備しています。

現在外国からのツーリストの観光コースには、ソ連国内一四六個所の観光中心地をはじめ、全部の連邦構成共和国、ソ連のすべての自然・気象地帯が入っています。安定した発展を続けているのは伝統的な種類の観光で、ソ連ではその数は約20あります。まずその一つは、名所旧跡の見物やソ連の実生活の視察など、盛り沢山の日程がつまった団体旅行です。

この10年間に休息のためにソ連にくる観光客の数は、約3・5倍に増えました。数万人の外国人観光客が毎年クルーズ船でソ連にやってきて、黒海やバルト海の沿岸の諸都市を見物しています。ことしは外国人観光客を乗せた約二五〇隻のクルーズ船がソ連の港を訪れる予定です。

ソ連と諸外国との経済・科学技術・貿易交流が拡大するにつれて、学会や会議に出席するためのツアーが急速に発達しています。ことしはソ連で約一〇〇の国際行事（国際会議、展覧会、オークション、見本市、セミナーなど）が催され、その中には〝科学83〟〝印刷機械83〟、〝石炭83〟などの国際展や第10回欧州リウマチ症学者会議、第9回国際スラブ学会といった大きな行事があり、各行事とも一〇〇〇人―二五〇〇人の外国人の参加が見込まれています。

約二〇〇万人の外国人観光客が昨年、ソ連の劇場やサーカス、コンサート・ホールを訪れました。インツーリストが組むツアーの大部分には、普通3―5回の観劇が含まれています。

ソ連で外国人に最も人気のある特殊旅行の一つは芸術祭ツアーです。一九八三年にはモスクワ、キエフ、バクー、レニングラード、タシケント、ソーチ、その他のソ連の都市で全ソ音楽コンクールや大芸術祭が約20回開催されます。

外国人がソ連旅行にいかに関心をもっているかは、外国人の訪ソ観光客の数が増えていることでわかります。日本からの観光客は、若干落ち込んだあと再び増えています。その伸び率はかなり大きく、この数年間年率10％以上です。

ソ連国民の歴史、文化、現代生活に対する日本人観光客の関心のほどは、ザカフカズ地方、沿バルト共和国、ウクライナの諸都市など遠くの土地へ旅行する人が著しく増えていることに表れています。ロシアの古都——ウラジーミル、スズダリ、ノブゴロド、プスコフへ旅する日本人の数も増えています。同時に、日本の観光客にとって〝古典的な〟コースであるモスクワとレニングラード、シベリアめぐり、中央アジアの〝シルクロード〟めぐりなどの旅行者数も増え続けています。日本の旅行代理店が日本の友好団体と共同で企画している〝友好の船〟といったソ連旅行も相変わらず人気があります。

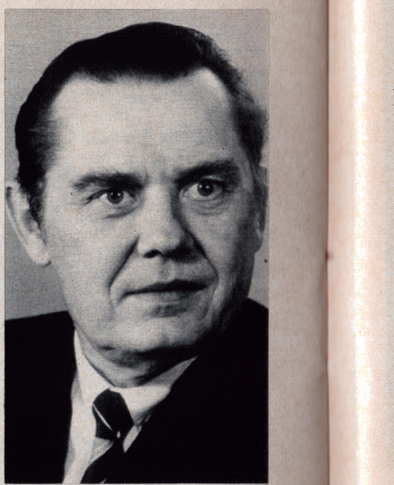
飛行機でモスクワに飛び、その後の旅行の全部または一部分をバスでやる〝飛行機＝バス〟ツアーにも人気が集まりつつあります。ことしはたとえば、行きはモスクワからカフカズまでバスで行き、その後飛行機でモスクワへ帰るという旅行が、日本の旅行ファンを待っています。

河川クルーズのような、日本人にはあまり味わえない旅への参加希望者も増えています。ソ連のクルーズ船によるボルガ川、ドン川、ドニエプル川の旅は、ゆっくり休み、川辺の風景を楽しむだけでなく、船の停泊中に近くの見物や親善の夕べに出かけたり、同じ仕事の人と会ったりすることもでき、ソ連人の日常生活を知るよい機会となるでしょう。

国際観光とは、外国人観光客をソ連に受け入れることだけではなく、ソ連の人々が外国へ旅行することでもあります。たとえば一九八二年にはソ連のクルーズ船6隻が日本を訪れました。ソ連の観光客は伝統的な観光地の日光、京都、奈良、東京だけではなく、小樽、神戸、鹿児島にも行きました。そしてとくに強烈な印象を受けたのは広島と長崎でした。日本国民の文化財もソ連の人々に深い印象を残しています。

私は、日本の友好団体その他の社会団体のソ日観光事業への貢献に対して感謝の意を表明したいと思います。

ソ日観光交流のきずなが、ソ日両国民間の相互理解と信頼を深めるためにさらに強まることを確信しています。



ソ日スポーツ交流の発展

ソ連閣僚会議体育・スポーツ委員会議長、ソ連オリンピック委員会議長
マラート・グラモフ

ソ日外交関係が復活してから四半世紀以上たつ。双方の努力により、スポーツも含め種々の分野で互恵の関係の発展・拡大のために多くのことが成しとげられた。

ソ連体育・スポーツ委員会（以下、スポーツ委員会と略す）およびソ連オリンピック委員会の見るところでは、日本とのスポーツ交流は、お互いに対する双方の関心を土台にして、両国でポピュラーな種目間で、それぞれの種目のナショナル連盟同士の合意した条件に基づいて発展している。

本誌の読者の方々は、ソ日スポーツ協力の数々の肯定的瞬間をご存知だろう。だが最初は交流もごく地味なもので、年に2―4の代表団の往来が見られただけだった。その後代表団の数は若干増えたが、それでも最初の10年間は代表団の数が六つとか七つとかで、それを超えることはなかった。一九七一年以後スポーツ交流は明らかに活発になり、一年間に10種目20の代表団（約二〇〇人）が交流した。一九七八年と七九年には年間12―14種目25代表団（約三〇〇人）が交流するまでになった。

残念ながら、一九八〇年にはわれわれのせいではないが、スポーツ交流に若干の縮小が生じた。モスクワで開催された第22回オリンピック大会に日本選手は参加しなかったが、それは日本のスポーツに明らかな損害を与えたように思われる。しかしながらわれわれはモスクワ五輪の成功に寄与した日本のあれこれのスポーツ関係者と会社の功績を覚えている。その中にはIOCプレス委員で、一九七九年の第7回ソ連諸民族夏季スパルタキアード大会および80年五輪で国際スポーツ記者連盟代表団長を務めた宮川　毅氏がおり、美津濃や日本光学、その他の会社がある。

一九八一年からソ日両国のスポーツ交流は再び上昇線をたどるようになった。この発展はソ日スポーツ交流協定に基づいている。われわれの主なパートナーは日本体育協会だが、交流には他の団体も加わっており、最も活発な役割を担っているのは日本対外文化協会とその会長松前重義氏である。

一九八一年の対日交流は15種目28代表団（三九〇名）になり、一九八二年には16種目32代表団（三九三名）になった。一九八三年の交流も興味深い。

ソ連スポーツ委員会は、レスリング（フリースタイル、グレコローマンスタイル）、柔道、体操、水泳、重量挙げ競技の6種目の主要選手を7―8月に開催される第8回ソ連諸民族夏季スパルタキアードに招待している。

今年1月初め、札幌で開催されたスキー複合競技の国際競技会にロシア連邦共和国選手団が参加し、柔道選手も東京での大会に出場した。2月には日本の柔道選手がグルジア共和国の首都トビリシで行われた大会に出場した。年末までにはまた柔道、アイスホッケー、体操、陸上競技チームの交流が行われる。

ソ連スポーツ委員会と北海道体育協会との間にはソ連極東と北海道のスポーツ交流協定が結ばれている。この協定では卓球、体操、バレーボール、バスケットボールなど3―4種目の選手50人の代表団の交流を定めている。

日本とは今や安定したスポーツ交流が行われており、その効果は徐々に上がっている。試合以外にも、両国選手の合宿練習、専門家やコーチの交流、模範演技の披露などが行われている。

日本のアイスホッケーの発展にはソ連のコーチ、V・スタルシノフ、Y・リャプキン、V・シャドリンが大きな貢献をした。招へい先の王子製紙はソ連コーチの仕事ぶりに最高の評価を下している。

ソ日両国スポーツ交流の質的向上は、共同合宿練習にも見られる。このような合宿はすでにソ連と日本で行われ、柔道、フィギュア、バレーボールの選手が参加した。体操、バレーボール、柔道のソ日両国選手の国際舞台での成功は、われわれの定期的なスポーツ交流に直接結びついていると言っていい。

東京で行われた第3回ソ日円卓会議で、ソ連スポーツ委員会代表は、特に、他の諸国との協力で実際に行われているように、現行の協定を発展させてスポーツ交流に関する議定書を年ごとに調印する慣習を作ろうと提案した。このような議定書があれば、スポーツ行事のカレンダーをより正確に調整することが出来よう。スポーツ交流の効果は、専門家、コーチ、学術研究員の交流拡大によっても高めることが出来るだろう。

われわれは、このほかの提案も検討する用意がある。なぜなら両国のスポーツ交流は両国民の友好と相互理解の強化に積極的に貢献できるし、また貢献しなければならないと確信しているからである。そして、これはとりもなおさず世界平和の事業にも貢献することになる。

ソ連スポーツ委員会およびソ連オリンピック委員会を代表し、「今日のソ連邦」の読者の皆さんに創刊25周年のお祝いを申し上げ、ソ日両国の今後の協力発展を心から希望する。

ソ日協会に結集する 50万人の日本の友人たち

ソ日協会理事 ナタリア・ポリャコワ

ソ連の憲法には「他国の国民との友好と協力の発展、全般的平和の維持と強化を助成することは、ソ連市民の国際主義的義務である」と記されている。ソ連対外友好文化交流団体連合会（対文連）とソ日協会（一九五八年6月5日設立）の活動は、国際的な活動に社会団体が大々的に参加していることを示すよい手本である。

現在ソ日協会はソ連の共和国や市に15の支部をもつ全国的な大衆組織で、会員数は五〇万人余り。ソ日協会中央理事会はソ連の社会諸団体の代表一〇〇余名から成り、理事長（会長）はソ連海運相、ソ連最高会議代議員、ソ連共産党中央委員のチモフェイ・グジェンコである。理事会に付属して、学術、経済、文化、観光、婦人、青年の各委員会および支部・団体会員担当委員会がある。

ソ連人はいつでも日本人の生活様式や文化に興味を持ち続けてきた。だからソ日協会の重要課題の一つは、極東の隣国日本とその歴史、経済、文化、芸術をソ連人に紹介することである。そしてこの分野での成果は大きい。

学術委員会は日本の政治・経済情勢、外交政策、ソ日関係、ソ連の大学や学校における日本語教育などの問題に関する講演会、会議、シンポジウムを開催している。こうした催しにはふつう、主だった日本研究家をはじめ、日本と何らかの関係のあるさまざまな団体も参加している。例えば毎年調印されるソ連と日本の諸団体間の文化・学術交流計画には、ソ連の30以上の団体が、対文連やソ日協会の仲介で加わっている。

ソ連と日本で交互に開催されるアジア安全保障問題ソ日シンポジウムやエネルギー問題、無線電子工学や文学に関する二国間シンポジウムは、恒例になっており、これらのシンポジウムのためにソ日協会はソ連科学アカデミーの諸研究所から一流の専門家を招いている。

ソ日協会の支部・団体会員担当委員会は日本に関するあらゆる参考資料、日本の記録映画、ソ日関係に関する写真展などを支部や団体会員に送付している。だから日本人の生活のさまざまな面に興味をもつ人は誰でも、ソ日協会の支部で詳しい情報を受けることができる。

姉妹都市デー、姉妹都市週間の行事は日本の現実を知る興味深い形となっている。現在ソ連の18都市と日本の20都市が姉妹都市になっている。ハバロフスク＝新潟、ナホトカ＝舞鶴、ナホトカ＝小樽、イルクーツク＝金沢、ボルゴグラード＝広島、ミンスク＝仙台、リガ＝神戸、ユジノサハリンスク＝旭川などがその一例である。姉妹都市は公式代表団、旅行団、芸術家、スポーツ・チームを交互に派遣し、各種写真展、装飾工芸展、児童絵画展などを交互に開催している。





右上　I・ウスマンホジャエフ・ソ連最高会議幹部会副議長から民族友好勲章を授与される赤城宗徳・日ソ親善協会会長

右下　一九八〇年度ソ日文化交流計画に調印する松前重義・日本対外文化協会会長（左）とジナイダ・クルグロワ・ソ連対文連会長（一九八〇年1月25日、モスクワの対外友好会館で）

左下　イルクーツクの学生キャンプで友好の集いを楽しむ福井県「訪ソ青年の船」の青年たち（一九八一年8月）

ソ日協会の活動

文化委員会は日本の劇団やコーラスグループ、楽団の公演、日本の新しい記録映画や劇映画の上映、日本人の芸術、文化に関する講演会を催し、日本の作家、詩人、演出家の作品に関する集いを開いている。文化委員会はまたソ日合作映画の製作や演劇の上演などに協力し、日本人の書いた作品を露訳している。協会の文化講演会部は昨年は非常に活発に活動し、著名な日本研究者たちに講演をしてもらった。15年前に誕生した文化委員会付属「生け花クラブ」は、ソ連の婦人の間で大きな人気を呼んでいる。

日本の諸都市と友好関係を結んでいるソ連のどの都市でも、ソ日協会の支部が積極的に活動している。例えばレニングラード支部のシリーズ講演会「現代日本」には、年間約一五〇〇人が参加している。協会の支部は日本の友好団体やその地方支部（東京、大阪、神戸、金沢、広島、秋田など）と交流しており、さまざまな代表団や「友好の船」を受け入れている。

キエフの〝京都通り〟にあるビルにかかっている京都・キエフ親善記念板





ソ日協会の活動





合唱団白樺の演奏に盛んな拍手を送るモスクワの聴衆（一九八一年8月）

オデッサ市とその姉妹都市の横浜市との友好関係は古い。昨年、ソ日協会オデッサ支部は日本の演劇、文学、芸術を紹介した非常に興味深い集いをシリーズで催した。オデッサ市に生まれた日本語学習サークルの参加希望者は年ごとに増えている。

イルクーツク市では、金沢市との間の夏季スポーツ交歓会、友好の夕べ、ソ日青年討論会が恒例となり、一九八一年には「兼六園クラブ」の日本語講習会が最初の卒業生を送り出した。

協会のナホトカ支部の仕事は、夏場は特に多い。ナホトカ市の周辺のピオネール・キャンプに、夏休みを利用して舞鶴市や小樽市の小中学生が参加している。支部の会員は恒例となったソ日船員スポーツ週間に参加し、また市ではナホトカ支部の後援で日本の貿易・産業見本市を定期的に開いている。

夏になると、日本からソ連に「友好のキャラバン」や「友好の船」がやってくるが、その参加者のために観光、青年両委員会の協力で、観光プログラムのほかにさまざまな集い、質疑応答の会、工業企業やソフホーズ、病院の見学、スポーツの親善試合などが催されている。ソ日協会は、日本からの観光団の滞在日程をインツーリストやソ連青年団体委員会と密接に連絡をとって準備している。

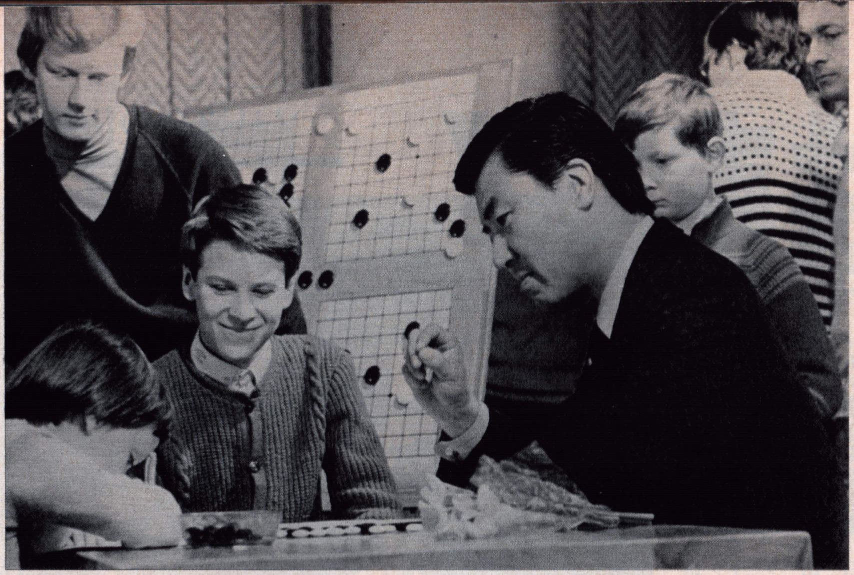
ソ日協会は、日本の平和擁護者との交流を強化している。昨年8月にはモスクワ、レニングラード、ハバロフスク、ボルゴグラード、ミンスクでソ日両国の社会団体の反戦行進が行われた。その時はソ連対文連、全ソ労働組合中央評議会、ソ連婦人委員会、ソ連平和擁護委員会の招きに応じて、日ソ親善協会、総評、社会主義青年同盟、婦人その他の社会団体、国会議員の代表など、三〇〇名余りの日本の平和擁護者のグループが訪ソした。8月15日、レニングラードのピスカリョフ墓地で、ソ連と日本の代表が「不戦の誓い」をし、平和の維持と人類に対する核の脅威の排除のために全力を尽くすことを誓い合った。同じような集会は、日本人が訪れた他の都市でも行われ、日本の代表団員たちはソ連の反戦運動の大衆的性格とソ連人が心から平和を願っていることをはっきりと確かめることができた。

ソ日関係における昨年のビッグ・イベントは、4月に東京で開かれたソ日民間人の代表による第3回ソ日円卓会議である。この種の会合は、国際情勢や国家間の関係が悪化しているとき、建設的な対話を続けるために極めて不可欠なものだ。ソ連と日本の〝国民外交〟の代表による次の会談――第4回ソ日円卓会議は一九八四年モスクワで開催される予定である。

ソ日協会の主要な活動方向の一つは、各界各層の日本人の代表との直接の交流と会合である。日本の一部マスコミの懸命な反ソ宣伝の挑発にもかかわらず、ソ連を訪れる旅行者の数は年々増加している。旅行者の多くは名所旧跡や文化記念物を見物するだけでなく、ソ連の人々と積極的にふれ合おうとしている。ソ日協会はこうした人々の希望を入れ、協会活動家との懇談会、協会の団体会員である工場、研究所、学校の見学、ソ連国民の生活のさまざまな質問に関する講演会を催している。



イワン・ポリャコフ・ソ連最高会議幹部会副議長から民族友好勲章を授与される柴野安三郎氏（一九八一年4月13日）。



▲日本の合唱団白樺のソ連公演（一九八一年8月17日、モスクワ）。指揮は北川 剛氏

左下 ハバロフスクと北海道のバスケット親善試合。

囲碁のソ日交流。レニングラードの少女アンナ・ソロビヨワと対戦する下田真樹6段（一九八二年3月）。



昨年7月には、平和と友好の使節として全国抑留者補償協議会のメンバーと元抑留者およびその家族一八〇名の代表団がソ連極東を訪れた。代表団はソ日協会やソ連平和擁護委員会、ソ連参戦軍人委員会の活動家らと会談して、両国民がともに平和と友好の中で暮らし、過去の苦い苛酷な過ちをくり返すまいと願っていることをはっきり示した。

ソ日協会は、所属党派にかかわりなくソ連との友好をめざすすべての日本の諸団体との関係強化を、最重要課題の一つと見ている。現在日本の各県と多くの都市に、一八〇の対ソ友好団体の支部がある。日本の対ソ友好運動には、政府関係者を含むあらゆる政見、思想の人々が加わっている。

日本の対ソ友好団体をはじめ、ソ連に友好的なすべての団体は経済、教育、

文学、芸術などの分野での協力を促進すると同時に、沢山の催しを行っている。日本での親善月間、ソ連デー、ソ連週間やソ連での対日親善の催しは伝統になった。一九八二年だけでも、日本にはロシア、リトワ（リトアニア）、グルジアの各共和国の人民芸術を代表する五つの芸能集団が訪れた。札幌の北海道日ソ友好文化会館ではウズベク共和国の版画・工芸品展が開かれた。東京の西武美術館では革命60周年を記念した「芸術と革命展」が開かれた。

なお今年は、各地でモルダビア共和国、タジク共和国、アルメニア共和国をメインにしたソ連デーが催される。

ソ日協会の会員は今後とも長期間にわたるソ日両国民の強固な友好関係の発展を促進するつもりである。



ボルゴグラード市で〝パンと塩〟の歓迎を受ける「不戦の誓い」代表団の長谷川正三団長（衆議院議員・日本社会党中央執行委員）

「不戦の誓い」代表団のピスカリョフ墓地での反戦行進▼

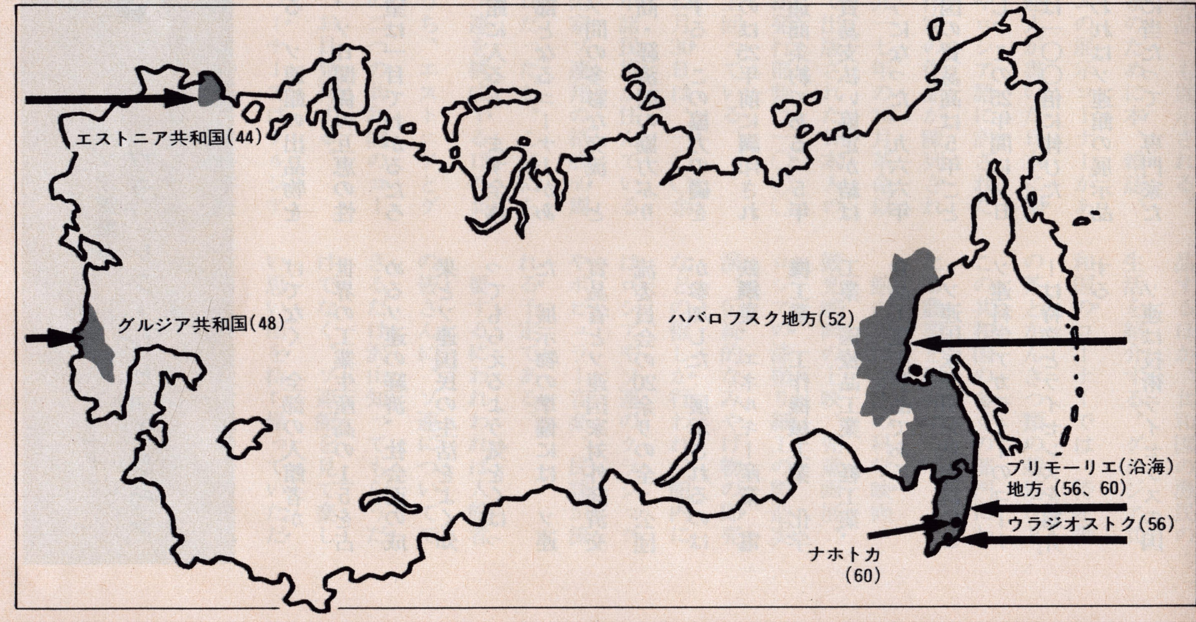


今日のソ連邦

とじ込み付録

第15回東京国際見本市・ソ連館特集

（4月26日から5月5日まで東京・晴海で開催）



★数字は関連記事のページ

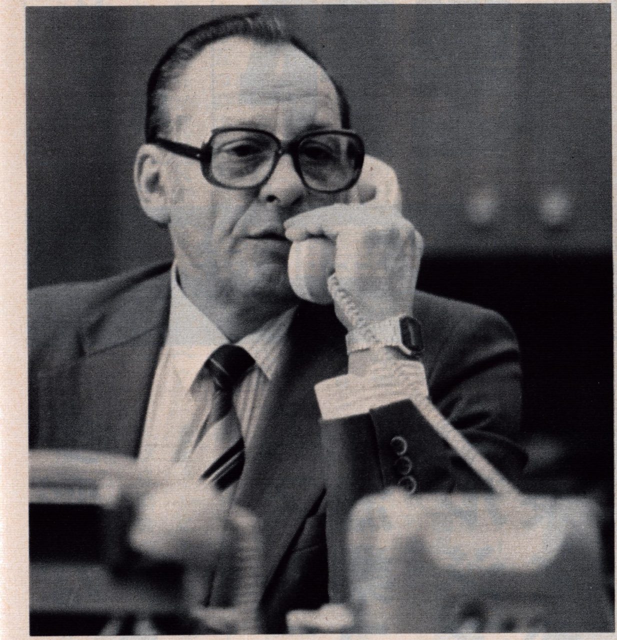
東京国際見本市

多彩なソ連館の展示

ソ連館館長
ウラジレン・レピョーシキン

4月26日から5月5日まで東京で恒例の国際見本市が開かれ、ソ連も参加する。周知のとおり、商業見本市に参加すれば、世界市場の商況や購買需要を研究する絶好の機会に恵まれるし、しかも見本市ではつねに実業界代表同士の幅広い接触が期待でき、あれこれの商品や特許、製造技術の販売取引の成立などが見込まれるので、そのメリットは大きい。

われわれは、東京国際見本市への参加は、日ソ通商・経済交流の拡大、深化や両国民間の相互理解と善隣の強化に役立つ機会をつくるものだと見ている。ソ連館の出品物を見れば、ソ日関係の互恵の性格と展望は一目でわかるだろう。



ウラジレン・レピョーシキン（55歳）はウラルのステルリタマク市生まれ。一九五一年レニングラード技術経済大学卒業後、貿易省関係の仕事に就く。一九五七年からソ連商工会議所の職員になり、現在はその海外ソ連展示会局の副局長。これまでロンドン、パリ（一九六一年）、ブカレスト（一九六七年）、ロサンゼルス（一九七七年）、メキシコ（一九八一年）で開かれた大ソ連展の組織と開催にたずさわった。一九六七年にはソ連商工会議所代表として来日し、東京、新潟のソ連展を組織した。

ソ連館に入ると、まず全体の導入部となるコーナーがあり、日ソ間の多彩な交流、とくに通商・経済面の協力ぶりを紹介する。この協力の礎を築いたのは25年前に調印されたソ日通商条約である。5年ごとの貿易支払い協定が結ばれるようになった一九六六年以降両国の貿易高は5年ごとに倍増し、この25年間にソ日貿易高は一〇〇倍に伸びた。

われわれはソ連館の展示品を選ぶに当たって、専門家だけでなく、全部の入館者が、世界の工業生産高の$\frac{1}{5}$を占めるソ連の経済、社会面の成果とソ連国民の生活をよく知ってもらえるよう気をくばった。展示物の準備には、ソ連貿易省とソ連国家対外経済交流委員会の20余りの全ソ公団が参加した。展示されるのは鉄鋼業、エネルギー産業、電機工業、工作機械工業、化学工業、医療品工業、軽工業、食品工業の製品である。

ソ連国家発明発見委員会とソ連科学アカデミーのコーナーは特許とライセンスを紹介する。

ソ連は技術ライセンスの国際取引に積極的に参加しており、この5年間に七〇〇件のライセンスを輸出した。日本の企業にはコークスの乾式消火法および同装置、連続鋳造設備、フィアニット単結晶製造法などを輸出した。

鉄鋼業、非鉄金属工業、化学工業、医学、漁業と養殖水産業の分野のソ連の学者たちの最新の発明は、専門家の興味をひくだろう。

外科縫合装置および骨折治療と関節機能回復用の装置、フョードロフ式人工水晶体などは、日本の医療関係者の関心を集めるに違いない。

いま世界の人々は、海洋の研究と利用の問題に関心を寄せている。プリモーリエ（沿海）地方コーナーはこのテーマを大きく取り上げ、水産資源の保護と増殖、養殖業の発展、水質汚染の防止の分野のソ連の学者の研究成果や津波の研究調査などを紹介する。

プリモーリエ地方は、ソ日経済交流で重要な役割を果たしている沿岸貿易を、全ソ公団〝ダリイントルグ〟（東シベリアおよび極東地域と外国との間の沿岸・境界貿易に関する輸出入業務を担当）を通じてやっている。このコーナーでは、プリモーリエ地方の成果と発展の見通しや輸出能力のほか、もちろんナホトカ市と舞鶴、小樽両市との姉妹都市交流が紹介される。

その隣のハバロフスク地方コーナーでは、タイガ（針葉樹林帯）とそこに生息する動植物や、ほかの土地では見られないここのユニークな自然の保護活動を紹介する。

専門家の注目を集めるに違いないと見られるのが、最新の金属工作機械である。これを出品する全ソ工作機械輸出入公団（スタンコインポルト）は、日本を含む90カ国の商社と取り引きしている。同公団は、年産三〇万台以上（うち金属切削機械二〇〇〇種、同工具一万種余りのほか数値制御式工作機械など）を生産しているソ連工作機械工業の製品を供給している。

また全ソ動力機械輸出公団（エネルゴマシエクスポルト）が出品する電気・電熱設備と溶接設備も、関心を集めるだろう。

細工した石、金・銀・コハク製品、楽器、猟銃、毛皮、衣類、玩具、各種ワイン、民芸品（塗り物の木のスプーンやひしゃく、マトリョーシカ人形、色塗りの盆、石や骨で作った細工品）も展示される。

読書家のために本、雑誌、アルバムの展示コーナーがあり、ソ連人が書いた日本に関する本やロシア語に訳された日本の作家の作品が陳列される。一九一七年の10月革命以降ソ連で出版された日本人の作品の総発行部数は一〇〇〇万部を上回っている。

昨年12月30日は、一〇〇余りの大小諸民族が住んでいる多民族国家ソ連邦の結成60周年記念日だったが、これにちなんでソ連を構成する15の共和国のうち、エストニアとグルジアの二つの共和国のコーナーも、お目見得する。

このコーナーではグルジアとエストニアの経済、科学技術、文化の成果が紹介される。たとえばエストニアは、50余りの企業が約二〇〇〇点を出品するほか、共和国の漁民の生活を紹介する。グルジア共和国のコーナーでは、特産物の茶とかんきつ類の栽培など、この共和国の多くの部門にわたる農業を紹介する。

館内ではソ連の科学映画、観光映画の上映、児童画展、ロシアの漆塗り細工の製造実演、伝統的なみやげ物の即売などの催しが行われ、館内にはロシアやソ連のクラシックやポピュラー音楽、民謡が流れる予定である。

要するにわれわれは入館者の皆さんに、ソ連についてできるだけ沢山知ってもらうだけでなく、ソ連館を見て楽しい思い出を持ち帰っていただけるよう、最大限の努力を払うつもりである。

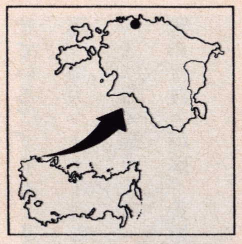
どうぞ、ソ連館へお出かけ下さい。



漁業コルホース員の家(ハアプネメ町)

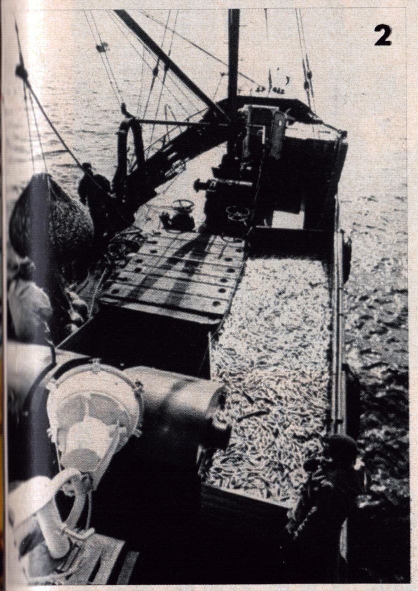
エストニアの漁業コルホーズ

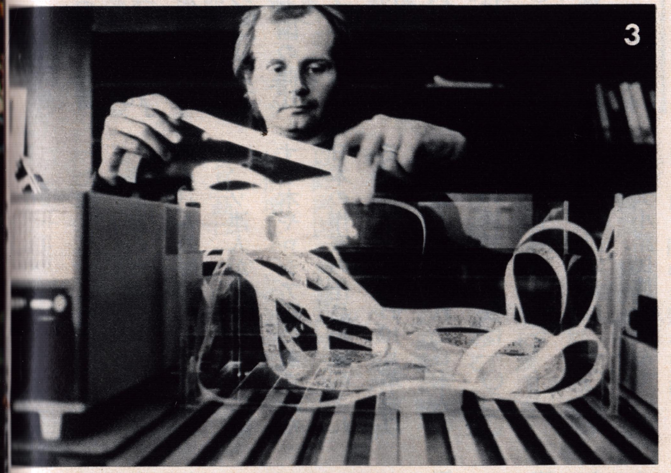
エストニア駐在本誌記者
カルル・ヘレミャエ
カメラ
V・タラセビチ

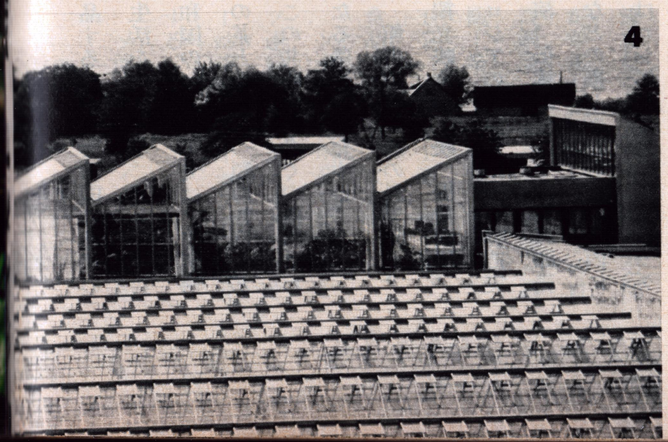


エストニア共和国
●印は首都タリン









1　フィンランド湾で漁をするキーロフ記念漁業コルホーズの漁民たち

2　キーロフ・コルホーズのトロール船

3　コルホーズの操業指令所で。

4　漁業コルホーズの野菜栽培ハウス。熱帯性の植物や花を栽培しているユニークな室内庭園もある。

東京国際見本市のエストニア・コーナーに出展している団体の一つ――キーロフ記念漁業コルホーズについて紹介しよう。

エストニアのキーロフ記念漁業コルホーズの商標がついていれば、その品物の品質は絶対大丈夫。こう信じているのはバルト海沿岸のソ連最小の共和国エストニアの住民（約一五〇万人）だけではない。ソ連全国の魚料理の好きな人みんながそう思っている。このコルホーズの加工工場から出荷される缶詰（年間五五〇〇万個）は消費者の間で大変評判がいい。コルホーズの本部はエストニアの首都タリンの近くにあるが、本部の直営店には海産物がいつも豊富にあるので、タリン市から大勢の人が買い出しに来る。

「水中の魚はまだ手中の魚にあらず」――これは漁船ミイドゥランナ号の名船長アールネ・ニイタの言葉だ。ニイタ船長のたどった道はエストニアの多くの漁民の人生の典型と言っていい。父親も一生を海で過ごしたが、彼はタリン漁業中等専門学校を卒業し、トロール船の3等航海士を振り出しに徐々に船長にまで〝昇進〟した。

ニイタ船長が〝手中の〟魚という表現を使った気持ちは実によく分かる。シコやサラカ（ニシン属の一種）、その他伝統的なバルト海産魚の水揚げは魚群の動き次第という面がある。魚群がいつもキーロフ・コルホーズに都合よく動いてくれるとは限らない。網の中にたった37尾のシコしかいないという不漁もあった。魚資源保護のために漁獲制限がどんどん厳しくなっている。魚種別に漁獲量が制限され、操業水域や操業時期の制限もある。コルホーズの漁船隊も

ミイドゥランド港に停泊中のコルホーズの漁船





キーロフ・コルホーズの本部があるハアブネメ町

縮小せざるを得なかった。

こういう条件下でコルホーズの経営をどうするのか？

「綿密に、熟慮に熟慮を重ね、真剣に切り盛りするしかありませんよ」――社会主義労働英雄のコルホーズ議長オスカル・クールはこう語る。

近年、バルト海のタラ資源は著しく増大した。水揚げしたばかりのタラを鮮魚としてすぐに流通網にのせてしまえば、ことは簡単だ。だがそうすると、未利用で捨てられる部分が出る。タラはそういう無駄が多い魚だし、それに消費者の方もタラをそのまま調理するだけでは飽きてしまうだろう。

コルホーズの設計・技術ビューロー主任のアーレ・アシ（40歳）はコルホーズ議長から、タラの切り身の製造設備を開発するように命じられた。コルホーズの技術者たちはこの課題を見事に解決した。タラの切り身の売れ行きはなかなかのものだ。切り身の製造の過程で出るくずも利用される。タラの皮は、例えば、のりの最上の原料だ。魚脂からはシャンプーが作られる。

だが、〝水中の魚〞が〝手中の魚〞になるようにするにはどうしたらいいか？

養殖だ！　キーロフ・コルホーズでは魚の養殖を将来の経営の柱にしようと考えている。

エストニアでは海水濃度の低いバルト海の入り江を利用して、ニジマスのいけす養殖が盛んに行われている。だが、海中いけす養殖の生産性は気象条件に非常に左右される。このコルホーズがあるエストニアの北海岸にはニジマス養殖に適した入り江がない。必要な水温を保つためには風が来ない深い入り江がいいのだが、ここの入り江はどれももろに暴風にさらされ、給餌など魚の管理が難しくなり、いけすが流されたり、壊されたりする危険がある。

そのためにキーロフ・コルホーズの設計陣はバルト海沿岸のいけすの変形としてポンプで海水を汲み上げる養魚池を作ることにした。こうしてソ連で初めて海水利用の陸上の養魚場が作られた。ここでは年に二五〇tのニジマスを生産できる。一九九〇年までには七カ所の養魚場で年間最低二〇〇〇tのニジマスを生産するようになる……

〝自家製〞の魚のおかげで、コルホーズから出荷される生産物の品目は格段に広がっている。だがソ連的条件のもとでは順調な経営ということは、コルホーズの金庫に何百万ルーブルも収入を保証しても、それが最終目的というわけではない（だが年間一六〇〇万ルーブルの純益があることは言っておかねばなるまい）。重要なのは、コルホーズ員全員（六〇〇〇人以上いる）の福祉についての配慮だ。

例えば医療を見てみよう。ニイン・アヤスタ医師は以前はタリン市中央病院の医長をしていた。どうしてコルホーズの新病院の医長になったのか聞いてみた。

「ここでの仕事が面白くてね。ここはエストニア有数の医療機関と言っていい。

一つ屋根の下に診療所とベッド数一〇〇の総合病院、小さなサナトリウムがある。25人の医師と中級・下級医療要員が50人。コルホーズ全員が定期的に検診を受けており、われわれ医師はみんなの健康状態を把握している。ここの泥浴治療センターではコルホーズ員一人ひとりが年に2度の治療を受けられるし、物療室もある。もちろん、どの治療も無料だ」――アヤスタ院長の答えはこうだった。

コルホーズが病院をかかえたら高くつくのではないかという疑問が出るかも知れない。なにしろ建設費だけで一〇〇万ルーブル以上かかったし、病院の〝運営〞のためには毎年約四〇万ルーブルの金がかかる……

「この支出は全部元が取れますよ。人間の健康は何よりも大切ですからね。われわれの仕事の意味もここにある。コルホーズ員の生活はどんどんよくならなければなりません」――コルホーズの議長は自信たっぷりにこう語った。

コルホーズはそのスタジアムでも有名だ。ここでは大競技会がしばしば開かれる。バレーボールとハンドボールの両チームはエストニア有数のチームだ。吹奏楽団、舞踊アンサンブル、民族楽器オーケストラ、合唱団のレベルも高い。

コルホーズでは高齢の漁民たちが特別な尊敬を集めている。ここには〝ランナペレ〞（海の一家）という老人ホームもあるが、これはペンションと呼んだ方がふさわしい。〝ランナペレ〞居住者の扶養費としてコルホーズは居住者の年金の75％を徴収し、残りは老人たちの小遣いになる。ここでは全員が個室に住んでいるが、その個室は入り口が二つあり、一つは外に、一つは廊下に通じている。看護婦が24時間勤務している。コルホーズの年金生活者全員（一〇〇人以上）と同じく、〝ランナペレ〞の居住者も死ぬまでコルホーズの成員でありつづける。

コルホーズ員にはたくさんの特典がある。第一に、コルホーズ員は所得税を払わなくていい。コルホーズがコルホーズ員に代わって所得税を払う。一年の決算のあとコルホーズ員の働きに対して多額の報奨金が支払われる。勤続年数に応じて休暇手当にも割増し金がつくが、その額の上限は給料1カ月分。キーロフ・コルホーズには生活コンビナートがあり、コルホーズ員はそこで無料のサービスを受けられる。

新しい集合住宅には都会型の設備が完備しているが、大部分のコルホーズ員は自分の家を持ちたがる。こういう人たちのためにコルホーズは建設費用の貸付けや建設資材の運搬を援助する。よく働いた人には、コルホーズが後でローンの一部を肩代わりするという特典が与えられている。

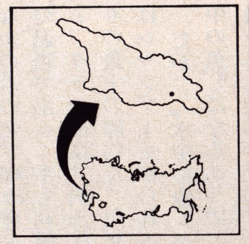


グルジアの茶畑で活躍する
茶つみ機“サカルトベロ”

東京国際見本市

グルジアの茶とかんきつ類

グルジア駐在本誌記者
ダビド・イメダシビリ



グルジア共和国
●印は首都トビリシ

東京国際見本市のソ連館には、ソ連を構成する15の共和国の一つグルジア共和国のコーナーが設けられる。このコーナーの展示物を見れば、一九二一年2月21日グルジアにソビエト政権が樹立されていらい、かつてのロシア帝国の立ち後れた辺境が、現在の発達した工業と多部門の農業をもつ共和国にどのように変わったか、その発展ぶりを理解していただけよう。

　グルジアの農業で当然ながら重要な役割を果たしているのは、茶とかんきつ類の栽培であり、これらはそれぞれソ連全体の生産高の96%、99%を占めている。

　グルジアの黒海沿岸の亜熱帯地区は、ソ連で一番これらの作物の栽培に適したところであるが、グルジアでかんきつ類の栽培が非常にさかんになり、産業として発達するようになったのは、ソビエト時代になってからのことである。それ以前のグルジアでのかんきつ類の栽培はアマチュア園芸的なもので、その栽培総面積は一〇〇haちょっとにすぎなかった。

　現在、グルジアのかんきつ畑の総面積は二万五〇〇ha。ここ10年間だけで三二五〇haのかんきつ畑（うち五〇〇ha

はレモン畑)がつくられた。一九七九年のグルジアのかんきつ類の生産量は三二万八〇〇〇tで、最高記録をマークした。

グルジアでは一六四の経営がかんきつ類を栽培しているが、かんきつ類の栽培には大きな障害がつきまとっている。グルジアの亜熱帯地区は世界最北の亜熱帯地区であり、定期的に冷害を受けるので、とくにレモンの被害は大きく、レモンの木の多くが立ち枯れている。

かんきつ類の豊作を確保する条件は、木を低温から守ることである。だから大半のかんきつ類栽培経営ではガスを燃やして木を温める方法で効果を上げており、一部の経営ではレモン畑加熱用の赤外線装置さえ備えている。

一九八五年までにグルジアのかんきつ類の生産量は三五万t(うちレモンは一万二〇〇〇t)に達する予定で、さらに一九九〇年までには五〇万t(レモンは一〇万t)に伸ばす計画が立てられている。そのため一九八五年までにグルジアでは、一万一〇〇〇haのかんきつ類その他の亜熱帯作物の畑(うちミカン畑とオレンジ畑は三四〇〇ha、レモン畑は二三〇〇ha)が新たにつくられる予定である。また四〇〇―五〇〇ha分のガス加熱装置が備えられよう。

ソビエト政権になってからグルジアの茶栽培は、強力な産業に成長した。茶はグルジアの多くの地区で栽培されているが、中心は西グルジアである。茶畑の面積は六万七七〇〇haで、1ha当たりの平均収量は約九〇〇〇kgである。茶葉の生産量は年々増えており、一九八〇年にはグルジアの茶栽培史上初めて五〇万tの大台を突破した。

一九九〇年にグルジアの茶



▶バツミ市郊外のソフホーズのかんきつ類の収穫

◀山の斜面の茶つみ風景

葉生産量は七〇万tに達する予定であり、そのためには一万一〇〇〇haの茶畑を新しくつくらねばならない。

グルジアでは茶葉の加工もやっており、国産の新鋭機械を備えた80余りの製茶工場がある。昨年これらの工場は一三万t余りのさまざまな等級、種類の茶を製造した。

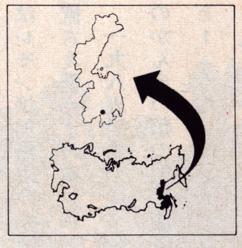
グルジアの茶畑に世界で初めて茶つみ機「サカルトベロ」が登場したのは一九六三年のことである。茶つみ機1台で1シーズンに茶つみ労働者30―40人分の働きをする。

グルジアの地形の関係で、すべての茶畑に機械が入れられないのが難点である。グルジアは山国なので、最近、傾斜が急な土地や狭い土地では、手づみ装置や刈り込み装置が使われ出しており、そのおかげで茶栽培における労働生産性は向上している。



東京国際見本市

ハバロフスク地方のタイガ



ハバロフスク地方
●印はハバロフスク市

極東駐在本誌記者
エブゲニー・ブガエンコ

ソ連館のハバロフスク地方のコーナーでは、現在の極東のタイガ（針葉樹林帯）のもようやタイガの代表的な動植物を紹介する。

ハバロフスク地方の上空を飛ぶ旅客機の窓から下界を見下ろすと、地平線のはるか果てまで緑のタイガのじゅうたんが広がっている。ハバロフスク地方は面積八二万四六〇〇平方kmで、ほとんどが森林であり、市や町はその森の中のちっぽけな島にすぎない。

ハバロフスク地方の南部は植物の種類が多く、カシ、シラカバ、ベニマツ、カラマツ、エゾマツ、野生ナシ、クルミ、キハダ、ハシバミの茂み、有名な薬効をもつエレウテロコックの低木などが繁茂している。こうした木々には、野ブドウ、サルナシのツルや、土地の住民のみならず学者も、人体の防御力を上回る薬効をもっと折り紙をつけているチョウセンゴミシのエキゾチックなツルが絡みついている。

厳密な学術的な立場から言うと、ここはまだタイガとは言えず、ベニマツと広葉樹の森林であり、手っ取り早く言えば〝北のジャングル〟である。タイガそのものはアムール川の北に始まり、カラマツやベニマツを主体とする低木が多い。

1　タイガの主――ヒグマ

2　ハバロフスク付近のアムール川

3　カラマツの花



1



2



3

タイガと〝北のジャングル〟の木材蓄積量は数千万立方m以上である。樹木は川の流域の沼沢地に生え、山の岩石の多い斜面にしっかりと根付き、川辺を縁どっている。ここにはキノコやイチゴ、クルミ、さまざまな薬草が沢山あり、自然の宝庫である。イノシシ、シカ、ヘラジカ、クマの群れがタイガをうろつき、クロテンやリスが木から木へととぶ。川には魚が多い。

人家から何百kmも離れたタイガの奥でけものを追う猟師たちは、小型機が上空を旋回するのをよく目にする。これは山火事を監視する航空隊の巡回飛行である。森の火事はタイガの最も恐ろしい最大の敵である。夏、とくに乾燥した年の夏は、針葉は火薬そっくりである。猟師や地質探査員が何気なくタバコの吸い殻を捨てれば、その一本で火事が起こる可能性は十分にある。もしちょっとした火事に風が加われば、火の竜巻きが起こり、火の手はあらゆるものを焼き尽くして進む。そんな火事の跡は、数年間、時には数十年間もあらゆるものが死んだままである。

飛行機のパイロット＝監視員は煙か火元を発見すると、直ちに無線で特別の消火装置を備えたパラシュート降下隊員の出動を求める。荒れ狂う火の手を食い止める有効な方法の一つは、迎え火、つまり、二つの火の地帯をぶつからせて消すやり方である。もう一つは爆破で火を消す方法である。火元が小さい場合は発泡消火器で消す……

しかしこれらはあくまでも火事が起こったときの消火の仕方である。ハバロフスク地方人民代議員ソビエトは山火事防止本部を設けた。干ばつが長く続いている時期に森の中で焚き火をすることは禁止され、タイガ内で使われる自動車やトラクターのマフラはとくに厳しい点検を受ける。土地の人々の有志でつくられるいわゆる「緑のパトロール」隊は、森の中の一切の出来事を監視する。

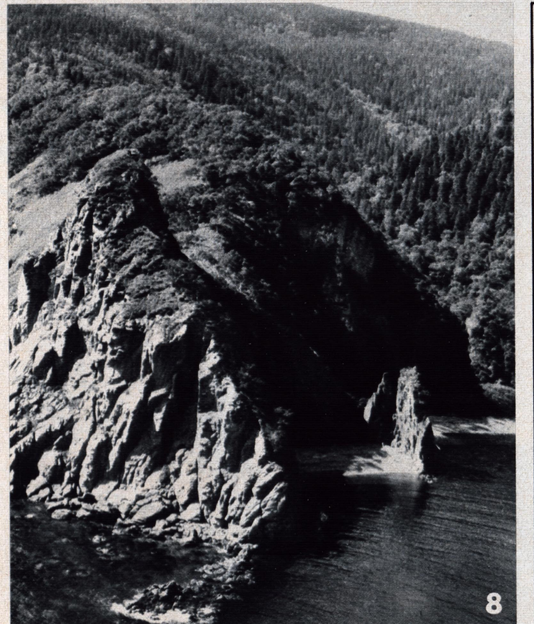
残念ながら、タイガの敵は火だけではない。人が自分の必要のために数ヘクタール分の森の木を切れば、その跡に同じような木を育てるのに10—12年かかる。長い間の経験から人はそのことをはっきりと確信した。しかしこのことをしっかり確信するまでに森も人も、高い代償を支払わねばならなかった。タイガが無雑作に若木も残さずに伐られたところは、2、3年後に沼沢地になった。

だから林業の専門家と林学者は、木材調達者が必ず守らねばならない特別の規則をつくった。森林1haを伐ったら、種子をまきつけ、苗を植えることというのが必須条件になっており、ベニマツ、キハダその他の珍しい樹種の伐採は、事実上禁止された。

ハバロフスクの極東林業研究所は、タイガの生活の法則を研究調査し、タイガの保存、再生措置を作成している。研究所長のワシリー・チューミン農学博士候補は次のように語っている。

「タイガはさまざまな地区からなり、老木が晩年を過ごしていて、その木を伐採し、その跡に新しい木を植えたらよいと見られている地区がある。わが専門家たちはこうした地区や箇所を指定している。そのほかわれわれは、森林の病気や害虫駆除法を研究している。植林機械や害虫駆除、山火事消火用の機械も開発中である。

とくに貴重な樹種や珍しい樹種が多い地区は、保護区や伐採禁止区に指定するよう勧告している。これらの区域では、樹木の伐採や狩猟、キノコやイチゴの採取は厳禁されており、すべてが自然の望みどおりのままでなければならない……」



8



4



7



6



5

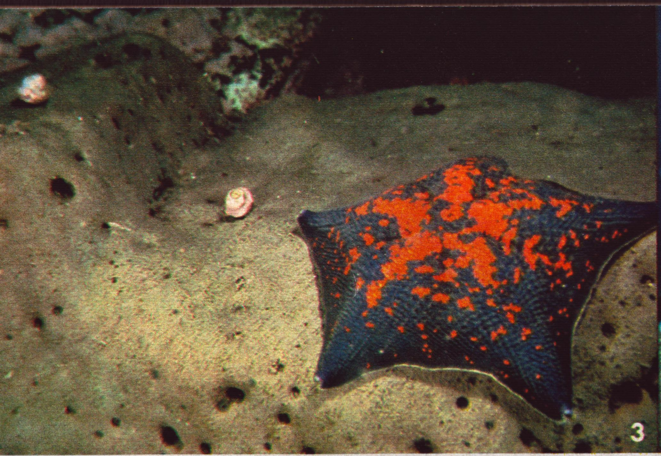
4　どこまでも続くタイガ

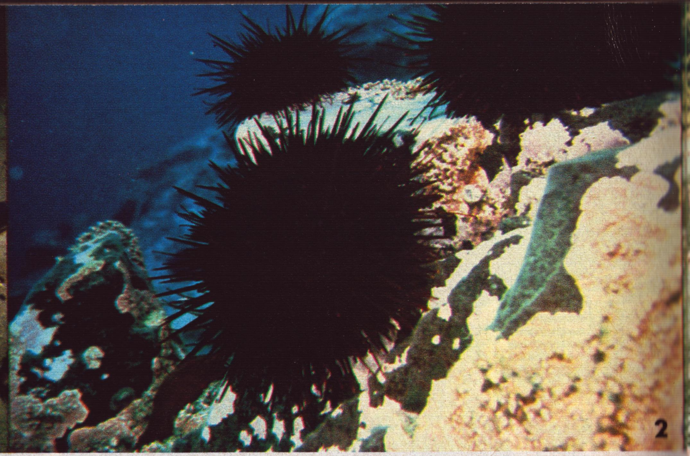
5　タイガに咲くユリ

6　ハスの花が咲く池

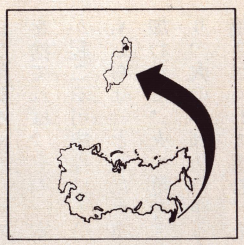
7　これが〝命の根〟といわれるエレウテロコック

8　ハバロフスク地方のオホーツク海岸









プリモーリエ(沿海)地方
●印はウラジオストク

ソ連極東の学術センター

ソ連科学アカデミー極東学術センター幹部会議長
ニコライ・シーロ

本誌の読者の皆さんには、プリモーリエ(沿海)地方に関する記事はすでにおなじみだろう。本誌ではしばしば、極東学術センターが行っている海洋研究について、またこの分野でのソ日両国の学者の協力について紹介してきた。このテーマについて改めて、ニコライ・シーロ・ソ連科学アカデミー会員、同極東学術センター幹部会議長、社会主義労働英雄に語ってもらおう。

極東学術センターは19の研究所と、北極圏のウランゲリ島から北緯42度のピョートル大帝湾のポポフ島までの広大な地域のさまざまな地点にある多数の常設施設と、地球周辺宇宙、太陽、彗星、電離層を観測する数十のステーションから成っている。研究所の多くは極東学術センター幹部会の所在地ウラジオストクにあり、他はハバロフスク、ブラゴベシチェンスクその他の都市にある。

極東学術センターは最新の設備をそなえた科学調査船を15隻保有しており、これらの船は太平洋の全域で活動している。そのほか、極東学術センターはソ連の宇宙船から得られる情報を広範に利用している。

極東の住民の生活は、海と非常に密接に結びついている。海は、その資源が十分に活用されれば、人類を養うことができる。だが、残念ながら、海の多くの謎は、まだ完全には解明されていない。いまのところ人類は、食料資源の1



1　ピョートル大帝湾ポポフ島のホタテ貝養殖場

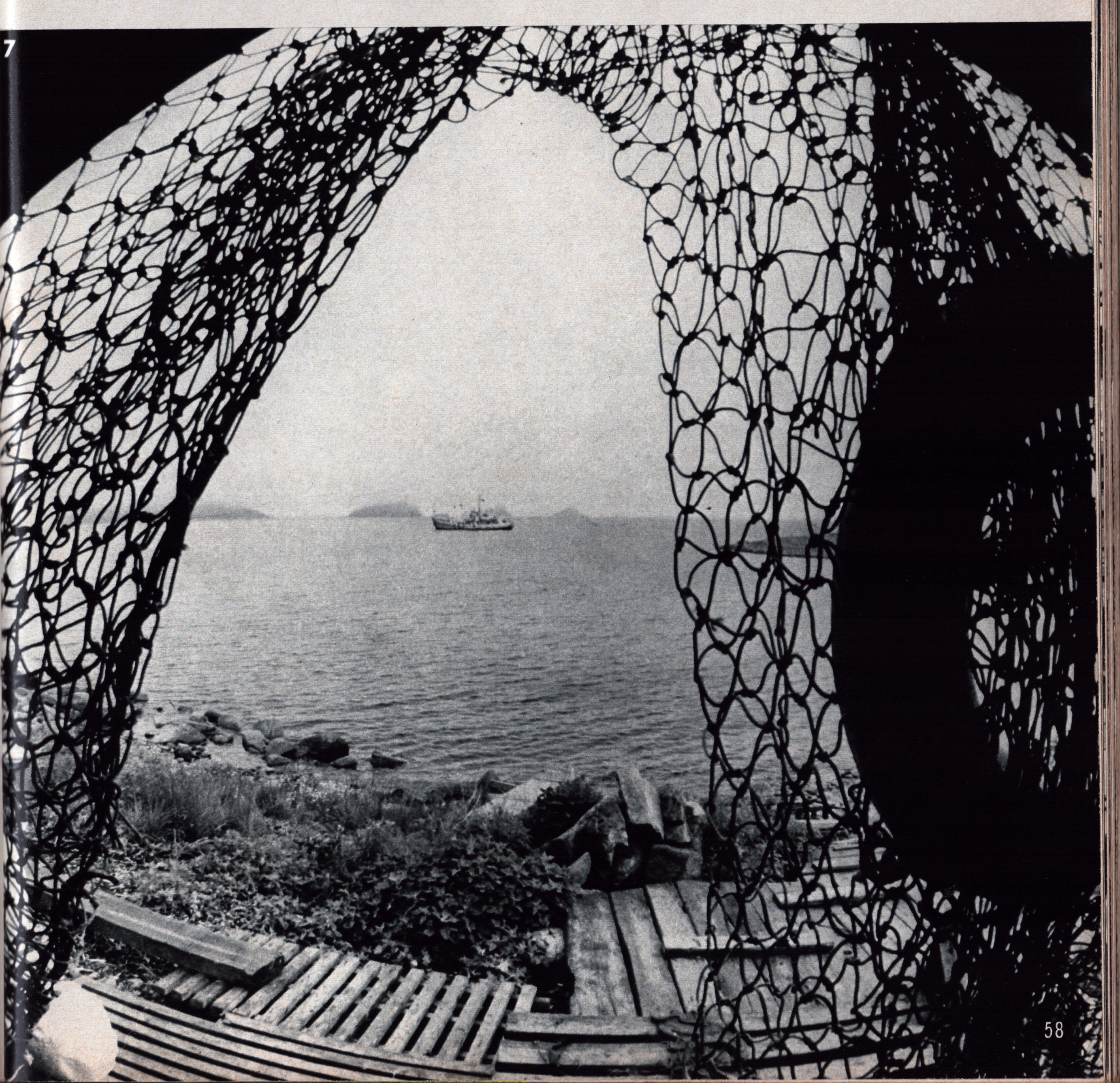
2　ムラサキウニ

3　イトマキヒトデ

4　シマゾイは好奇心が旺盛で人なつこい。







・5%を海洋から得ているにすぎない。

ソ連の太平洋沿岸大陸棚には、われわれの計算では、太平洋の生物資源のほぼ1/5が集中している。大陸棚では石油、ガスその他の貴重な資源も発見されている。だがここでは、他の諸分野とちがって、トロール網やエクスカベーターは役に立たない。

海はかなり気まぐれである。たとえば、同じ水域でナマコの生息数の調査が行われた。一九三三年にはその数は一億五〇〇〇万匹と見積もられたが、一九七六年にはわずか二二〇万匹にすぎなかった。乱獲の結果だろうか？ そうではない。ナマコが漁獲の対象になったのはごく最近のことである。つまり、他の理由を探さなければならないわけだ。以前にはまったく問題にされなかったような要素も関係しているかもしれない。

極東は大陸から大洋の深みへ移行する地球で最も広大な地帯の一つであり、このことが、極東学術センターが研究活動のかなりの部分を地質学と地球物理学に割り当てている理由になっている。これによって、有用鉱物の新たな発見が促されるだろう。極東学術センターの学者たちはこの地帯の地殻の構造を熱心に研究している。

シベリアと極東の新しい地震地帯図が作成されたが、これはさまざまな地域での建設の方法に修正をもたらすだろう。ある場合には、不必要な経費を節減できるかもしれないし、ある場合には、建設中のプロジェクトの安全性と耐久性を高めなければならなくなるだろう。

いくつかの研究所では産業用あるいは研究用の自動システム、計器、装置の開発が進められている。特にサハリン総合研究所では海洋研究用の自動システムが、自動化・操縦プロセス研究所では製図作業の自動化、漁業資源の予測、漁期の操業調整のための自動システムが作られている。

ポシエト湾の科学ステーションは、沿岸地域での採算の取れる栽培漁業、ホタテ貝、海草、高級魚の養殖の方法を研究している。極東水域のサケマス類の資源回復の可能性に特別の注意が払われている。

そのために、海流の温度の変化、塩分、海底音響その他が詳細に研究されている。

目ざましい成果が収められている。たとえば、生物有機化学研究所の海洋生物に関する化学的、生物学的データはユニークだ。

だが、研究や調査がいかに重要であっても、海洋の動物相や植物相に損害を与えてはならない。だから科学的な目的での採集は、大量には行わない。貴重な生物サンプルが見つかると、学者たちはそれを工業的に合成できないかどうか追求する。いまでもすでに、一連の物質が人工的に得られているが、そのさい化学者たちは、物質の有益な特性を強め、生体に与える有害な副作用を取り除いている。生物工学の発達とともに、海洋有機体を人工的に必要な量だけ増殖することも可能になるだろう。そうなれば、特定の化学的構造を持つあらゆる天然物質を手に入れることができる。

津波予報局の学者たちも非常に重要な仕事をしている。津波を公海上で、海岸に到達するずっと以前に発見するシステムの作成が可能なことは実験によって証明されている。現在すでにわが国では、津波の早期警報業務が完成に近づいている。地震のエネルギーによって津波を発見する方法も完成しつつある。研究によれば、地震波のいくつかの特徴（形状やスペクトル）が、津波を起こす地震を判別する有力な手がかりになることが分かっている。地震のエネルギー的指標と同時に津波形成のこの二つの大きな特徴を利用すれば、予知の確率は実質的に一〇〇%にまで高まる。

極東学術センターは多くの国の学者たちとつねに連絡を保っている。協力の形態は多様だ。センターの学者たちを外国へ出張させたり（毎年60−70件）、外国の専門家を招いたり、国際的な会議やシンポジウム、セミナーに参加したり、共同で調査を行ったり、情報や観測結果を交換したり、研究結果を外国の学術雑誌に載せたり、外国の研究結果をわが国の出版物で発表したりしている。

日本との接触も少なくない。たとえば、国際測地学・地球物理学連合（IUGG）の第14回総会では極東学術センター火山学研究所の代表団が日本の学者たちと双務的協力を組織することを話し合った。その結果、弧状列島の火山活動に関するソ日シンポジウムの開催が決まった。ハバロフスク構造地質学研究所とサハリン総合科学研究所の学者たちは、シンポジウムの席上、日本の専門家たちと地質学や地球物理学の分野での協力について合意した。

ソ連科学アカデミー極東学術センター幹部会の学者と米国、カナダ、日本の学者たちが参加した〝ベーリンギア大陸〟問題の総合的な解明は、この地域の地球物理学的、地質学的、生物学的、歴史的研究のための実践的な結論を出すことを可能にした。

一九七四年から毎年ナホトカで開かれている太平洋水域での協力問題に関する若手研究者の国際セミナーは、すでに伝統となった。ナホトカ、ハバロフスク、ユジノサハリンスクではさまざまな問題に関するソ日シンポジウム、ソ連・ハンガリー、ソ連・ポーランド、ソ連・ベトナムのシンポジウムが開かれた。

5　実験養殖中のホタテ貝を引き揚げて成長具合を見る専門家たち

6　ウラジオストク郊外のソ連科学アカデミー極東学術センターの研究都市

7　ピョートル大帝湾のリムスキー・コルサコフ群島。ここの6万3000haの水域が自然保護区に指定されている。

ナホトカの姉妹都市交流

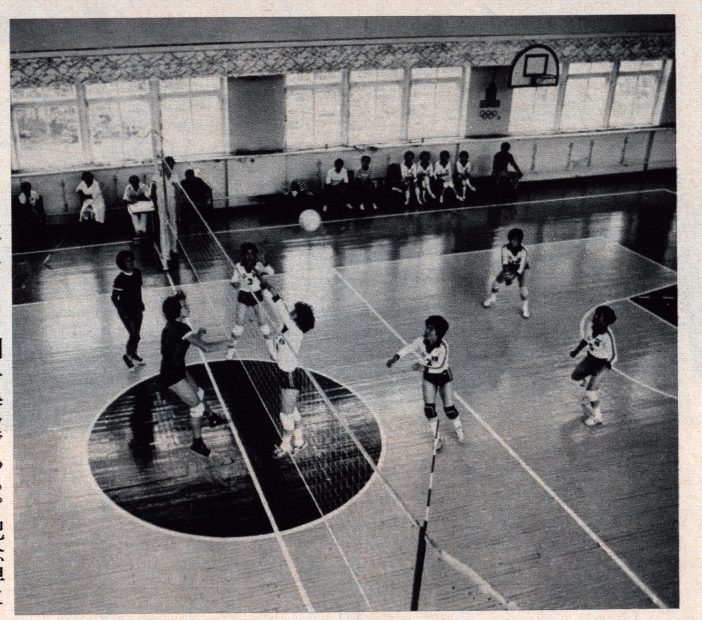
プリモーリエ(沿海)地方
●印はナホトカ



ナホトカ港の投錨地



◀1981年3月にナホトカで開催された第6回沿岸貿易日本商品専門見本市の開会式。テープにハサミを入れるプリモーリエ地方執行委員会副議長アレクセイ・ザイチコフ（左）とナホトカ駐在日本総領事岡崎慶興氏。



◀1982年8月に「小樽市民友好の船」でナホトカを訪れ、地元チームと対戦する小樽のママさんチーム。



▼1981年10月に開催された第7回沿岸貿易日本商品専門見本市の会場

東京国際見本市のソ連館には、ソ連極東地域と日本の姉妹都市の交流を紹介する展示コーナーが特設される。

ナホトカ市の中心部にある特別の広場に大きなみかげ石の碑が立っている。碑の表面にはロシア語と日本語で、ナホトカ、舞鶴両市が姉妹都市となってから17年目を迎えたので、ここに記念碑を建てたと刻み込んである。記念碑にしたみかげ石は一九七八年に舞鶴市の代表団が持ってきたもので、当時この広場で盛大な除幕式が行われた。その後ナホトカ市当局はこの広場を



ナホトカ市にあるナホトカと舞鶴、小樽との友好の壁



ナホトカの国際船員クラブのピクニック風景。女子学生のナタリア・ゼリョーナヤにウニをごちそうする今泉・長隆丸船長（左端）と山下新日本・飯野海運ナホトカ駐在員の田川豊さん。

「友好公園」とし、賓客がナホトカ市を訪れると、必ずここで植樹してもらうことになっている。

ナホトカ市の中心部に記念碑が建てられてから3年後、こんどはナホトカ市の代表団が舞鶴市を訪れ、舞鶴市役所から程遠くないところにある舞鶴・ナホトカ友情の園に「地上の平和のために舞鶴ナホトカ両市の友好関係を深めよう」と刻んだみかげ石の記念プレートを贈った。

この二つの都市の市民の間に姉妹都市協定が調印されたのは一九六一年で、この協定が日ソ間で姉妹都市の縁組みをしようという両国の世論の動きの端緒となった。現在ではソ連極東と東シベリアの18都市が日本の20都市と姉妹都市になっている。ナホトカ市はたちまちのうちに姉妹都市をいくつも持つことになった。一九六六年にはナホトカは小樽市と姉妹都市になった。七九年にはナホトカ市の外港で、水深の深い良港でもあるウォストーチヌイ港と敦賀港が姉妹港になった。八二年10月には敦賀・ナホトカ両市の代表が両市と両港（ウォストーチヌイ、敦賀港）が姉妹提携をするという文書に調印した。

「敦賀とナホトカ間の海上距離は四五五カイリだが、こんど両市が姉妹都市になることによってこの距離もぐんと縮まった」――敦賀市議会のある幹部は本誌記者にこう語った。

ナホトカ市のニコライ・ブハンツォフ市長も「ナホトカ市民と、ナホトカ市と姉妹都市になっている日本の諸都市の市民との友好関係はますます発展強化している」と言っている。代表団の交換が好ましい慣行となった。日ソ双方の市議会、一般人、婦人団体、青年団体、スポーツ団体などの代表団や芸能団が日本海を渡って互いに賓客として行き来した。近年、特に盛んになったのは、いろいろな分野の代表で構成される大型の代表団で、「友好の船」とか「友好のキャラバン」とか呼ばれるものだ。この種の代表団にはいろいろな年齢層の人、ありとあらゆる階層の市民が入っている。こういう代表団がやってくると、ナホトカでは市をあげて主客一体となったお祭り騒ぎをするのが恒例になっている。日本から来たお客さんたちはソ連側の代表と自分たち姉妹都市間の協力関係を今後どうするかを話し合ったり、工場や学校を見学したりする。一番好評だったのは日ソ合同コンサートやスポーツの試合だ。

もちろん、日本からの代表団はそんなにひんぱんにナホトカへ来るわけではないが、姉妹都市とのきずなを強める活動はいつでも続けられている。ナホトカ市の郷土博物館のホールの一つは、日本の姉妹都市との交流を物語る展示に当てられている。姉妹都市の重要な記念日とか、日本からのさまざまな代表団の訪問にちなんだ展示会や児童画展も、この博物館で開かれている。日本映画祭、生け花や折り紙の講習会などはナホトカ市の恒例の行事になった。

ナホトカ市には全ソ輸出入公団「ダリイントルグ」があり、沿岸貿易商品の見本市や展示会を毎年開催しており、姉妹都市の会社や協同組合の代表と取引上の接触を恒常的に計る手助けをしている。

また、毎年夏になると、日本の姉妹都市から子供たちが来て、ナホトカ市の近郊に散在するピオネール・キャンプでソビエトの子供と一緒に夏休みを過ごしている。ナホトカでは16の中学に国際友好クラブがあり、国際協調の精神や他国民に対する尊敬の念の育成に力を注いでいるし、生徒たちが日本側姉妹都市の住民の生活と慣習について知識を得られるようにしている。

ブハンツォフ・ナホトカ市長は次のように語った。

「ナホトカ市ソビエトと一般市民は舞鶴、小樽、敦賀三姉妹都市とナホトカ市の友好のきずなが毎年毎年新しい芽を吹くように全力を尽くしている。

いま私たちは次に日本へ送り出す二〇〇名の代表団の顔ぶれを選考中です。海員、港湾労働者、船舶修理工場労働者、事務関係職員などで編成され、日本の姉妹都市を訪問することになっています。日本側からもお客さんたちが来るのを待っています。

これまで日本の姉妹都市との間によい関係が積み上げられてきましたが、これを大切に守りながら、ぜひとも発展させ、強めていきたいものです……」

「今日のソ連邦」創刊25周年に寄せて



日ソ友好議員連盟会長
衆議院議員
石田 博英 氏

ソ連事情の報道を通じて日ソ両国の友好増進に大きな役割を果してきた「今日のソ連邦」が、創刊二十五周年を迎えたことを心からお祝い申し上げます。

一九五六年の両国国交回復以来、日ソ関係は各分野で大旨順調な発展を遂げてきました。しかし一方において、未解決の政治課題の存在が、平和条約締結を遅らせ、日ソ関係の根本的な改善をはばんでいることも事実であります。また昨今の国際情勢のもとで、日ソ間の政治経済関係はさらに冷却化してしまいました。

しかしながら、こうした状態は、日本にとってもソ連にとっても好ましいものではありません。地理的に隣接した日ソ両国の友好関係が、アジアと世界の平和にとって大きな意味をもっていることは言うまでもありません。また、経済的には日本とソ連は相互補完関係にあります。ソ連は日本の経済力・技術力を、日本はソ連の天然資源を必要とし、お互いに協力することによって、より大きな発展の可能性が開けるのです。

そのためには、残された政治課題の解決をめざして、両国が、一九五六年の日ソ共同宣言、七三年の日ソ共同声明の精神に立ちかえり、積極的な対話を進めていく必要があります。

そして両国間の実りある話し合いには、両国民間の相互理解と友好の精神が存在しなくてはなりません。

日ソ関係が困難な状況にある現在、「今日のソ連邦」の役割への期待は益益大なるものがあります。本誌が今後とも、両国国民間の相互理解を深め、友好関係を促進するため貢献されることを希望しております。



日本商工会議所会頭
永野 重雄 氏

この度貴誌が創刊二十五周年を迎えられたことを心からお祝い申しあげます。

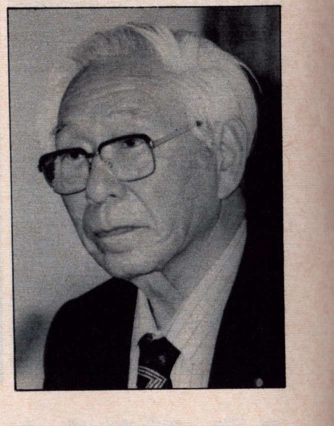
国と国との交流を進めるうえに相手国の実情に対する相互の理解が何よりも大切であることは申す迄もありません。「今日のソ連邦」は、長年に亘り、日本国民にソ連のさまざまな素顔を紹介し、貴国に対する我々の理解を深めるうえで大きな役割を果してこられました。

幸い、両国の経済関係が着実な発展をみておりますことはご同慶に堪えません。日ソ貿易は、昨一九八二年に往復五五億八千万ドルに達し、貴誌が創刊された一九五八年当時の約百四十倍の規模となっております。

私も、常々日ソ経済交流のため微力を尽しておる者の一人でありますが、さる二月下旬には、パトリチェフ外国貿易大臣のお招きをうけ、総勢約二百五十名の貿易経済代表団を率いてソ連を訪問いたしました。ご多忙の折にも拘わらず、チーホノフ首相はじめ政府首脳の方々にお会い頂き、相互の貿易経済関係の拡大策を中心に率直な意見の交換を行ってまいりました。今回の訪問を通じ、ソ連の意欲的な経済建設計画の実情について大いに認識を深めることができ、大変有意義でありました。この誌上をかり、ソ連の関係者の方々のご厚意あふるるご歓待に厚く御礼申し上げる次第であります。

日ソ両国はお互いに隣国として、今後とも経済交流を深めていく必要があります。このうえに貴誌が引き続き寄与されんことを期待して止みません。

終りに両国関係の一層の発展を心から祈念し、私のお祝いのことばといたします。



日本対外文化協会会長
松前 重義 氏

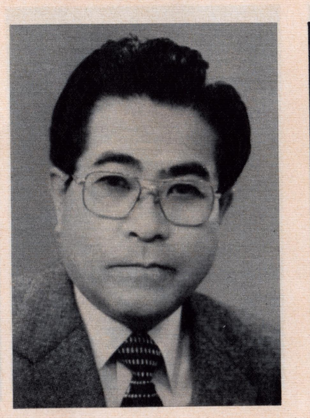
「今日のソ連邦」の二五周年、まことにおめでとうございます。私は日本対外文化協会の会長として、また国際柔道連盟の会長として毎年のように外国に行くし、また国内でも外国と接する機会が多くありますが、「今日のソ連邦」は、諸外国の日本での広報誌という点だけではなく、政府の海外広報紙・誌の類のなかでも、最も質が高く、内容の充実したよい雑誌であると、いつも考えつつ愛読してきました。

ソ連邦は知られざる大国であるという見方がありますし、事実、開かれた社会といわれる西側社会と比較すれば、知られない部分は大きいと思います。

しかし、私は「今日のソ連邦」を手にするにあたり、ソ連を知らざるは、知ろうとしない怠慢であると考えています。この雑誌には、ソ連に関する実に貴重な多くの情報が盛り込まれております。この雑誌を読めば、ソ連に関する知りうる範囲の知識が得られると考えられるからです。

「今日のソ連邦」の編集も立派であると思います。写真も豊富ですが、ただ難をいえば、活字離れを起している日本の現状にさからって、活字が多すぎ、とくに私のような年寄りには字が細かすぎて読みにくい面があることです。

いずれにせよ、毎月二回、このような真面目な雑誌を根気強く出版されてきた編集部の御努力には頭の下る思いがします。日本人にソ連邦を理解させるための活動を、これからも一層強められることを切望しています。



日本労働組合総評議会
議長
槇枝 元文 氏

「今日のソ連邦」発刊二五周年に当り、総評を代表してお祝いの言葉を申し上げます。

過去二五年にわたって日本の労働者、国民は、本誌を通じてソ連邦における政治・経済・社会・文化・科学など、さまざまな分野における発展過程を知ることができました。また、創刊のときから今日に至るまで、日ソの関係は、さまざまな事情により、決して順調に進展してきたとはいえません。しかし、困難な状況の中にあって本誌が、日ソ間の友好親善の発展のために果した役割はきわめて大きいものがありました。

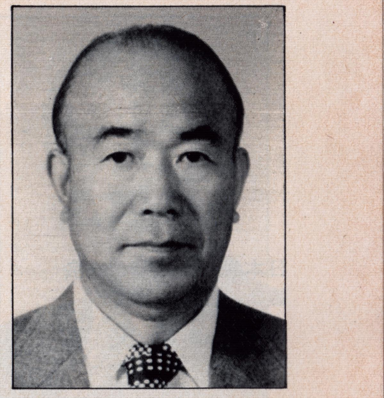
総評と総評傘下の各組合は、労働組合として、労働者レベルでソ連の労働者・労働組合との間に友好協力関係を維持し発展させましたが、その過程を本誌はつぶさに紹介されてきたことに私どもは心から感謝しています。

今日、日ソ間をとりまく状況はこれまでにもまして厳しいものがあります。対ソ強硬路線を進めるレーガン政権の圧力の下で、日本にはソ連を仮想敵国とした軍拡路線を進める動きがあり、平和と友好への危機が一段と高まっております。

このような危険な状況にあればあるほど、両国の労働者、国民が互いに理解し合い、友好関係を前進させ、協力・連帯し合うことが何よりも大切です。その意味において、本誌が果すべき役割は今までにもまして大きいものがあります。

私どもは、ソ連の労働組合と幾つかの点について意見を異にしていますが、互いに違いをのみあげつらい、対立関係を深めるのではなく、一致点を見出し、それを拡大し、両国の労働者・労働組合との友好協力関係を発展させていくつもりです。

本誌が、ますます日ソ関係の発展と、世界平和のために大きく貢献されることを期待するものです。



国際労働運動研究協会
会長
岩井　章　氏

「今日のソ連邦」誌の創刊二五周年を心から祝賀する。「今日のソ連邦」は、日本とソ連のもっとも効果的なチャンネルだ。それは二五年間両国の勤労人民の親善の為の橋渡しを成功的に果してきた。

今日、ソ連に向けられた物騒な言葉が日本のマスコミをにぎわせており、まるで戦争前夜のような挑発的発言をくりかえしている向きもある。

だが、日本の勤労者・労働者はそのような発言にだまされはしない。ほとんどの勤労国民は反ソでもないし、ソ連と対決して緊張を高めることなど全く望んでいない。だから軍事大国路線を歩もうとする動きには常に反対してきた。最近の世論調査でも、国民は日本が世界平和に寄与することを望んでいるし、反ソ政策を支持していない。今ほど平和への熱意が要求される時代はない。

そういう中で、「今日のソ連邦」に紹介されたソ連国民の生活と意見を、国民は正しいメッセージとして受けとめている。

ソ連国民が平和を望み、戦争を厳しく拒否していることを疑うものはいない。第二次世界大戦で二〇〇〇万人の同胞が死んだ国が再び破滅的戦争をする筈はないと確信している。

今後もこの雑誌を通じて両国民の友好関係はますます強まるだろう。そしてそのことが全世界の平和、軍縮、経済発展のために大きな基礎となるだろう。



ソ連東欧貿易会会長
小林宏治氏

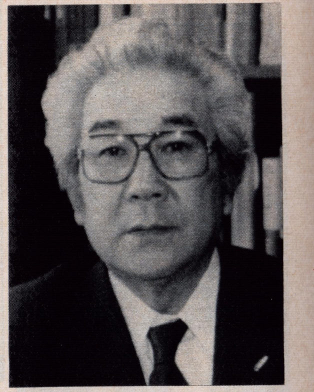
「今日のソ連邦」誌がこの度、創刊25周年を迎えられたことは、誠に喜ばしい限りであり、ここにお祝いを申し上げます。

同誌は、ソ連邦の政治、経済、文化、スポーツ、その他ソ連国民の生活や日ソ両国間の諸関係を幅広く日本国民に紹介しておりますが、解説、記事、写真等を豊富に盛り込んだその内容は、誰にも分り易く、日本国民がソ連邦に対する理解を深め、両国の友好関係の発展のために、同誌の果してこられた役割は、大きいものがあります。

なかでも、度々掲載される日ソ間の経済交流の記事は、我々経済人にとりましても興味深く、日ソ経済関係発展の歴史の貴重な記録として、高く評価致すものです。

日本海を挟んで隣国同士にある日ソ両国が友好裡に発展していくためには、経済交流も大きな役割を担っております。この経済交流の強化・発展に資することが我々に課せられた課題であり、両国間の貿易取引高が一九八二年には、年間50億ドルを超えるまでに大幅な発展を遂げてきた事実をみるとき、我々は、その取引が相互に補完的であるということを再認識するのであります。

貴誌が、今後共日本国民にソ連邦および日ソ両国間の諸関係に関するさまざまな情報を広く紹介することにより、日ソ両国民間の相互理解が深められ、友好関係が一層促進されるよう念願しお祝いの言葉と致します。



日ソ貿易協会会長
横川正市氏

このたびは創刊二五周年おめでとうございます。

ソ連紹介のPR誌として「今日のソ連邦」はその役割を十分果たしてきたと思います。特に今の週刊誌型になってから、ひじょうに読み易くなってきました。二五年という長い年月の苦労が、最近実ってきたといえるのではないでしょうか。

ただソ連の人が編集する関係上、同じことを訴えるのでも、こうした方がよりベターではないかと思うことがしばしばあります。国民感情の相違からくる編集技術の問題ですので、その点が工夫されればより大きな使命を果たせるのではないかと思います。

私は今度の大型経済貿易代表団の一人として訪ソしましたが、経済関係の記事が近頃多いのもうれしいことです。なおAPNニュース、モスクワ日本語放送などにも共通していえることなのですが、日本人の対ソ連観に対して真実で答え、日本人の感覚を変える工夫がもっと必要だと思います。例えば出力四〇〇万kWの水力発電所のニュースにしても、六〇万kWの水力発電所しか知らない日本人にとって四〇〇万kWといわれても、そのパワーは想像がつきません。そういう時は、その発電所の電力で恩恵をこうむっている社会環境を立体的に紹介した方が印象的です。つまり、真実性が疑わしいととられるものを、実証的な記事で答えていくということが大切だと思います。

また私はキリスト教徒なのですが、「ソ連には信仰の自由はない」という印象を日本人は持っています。しかし実際には七〇〇〇万人以上がソ連で信仰生活をしています。こうしたことも「今日のソ連邦」誌の写真と記事でもっと伝えていただきたいと思います。



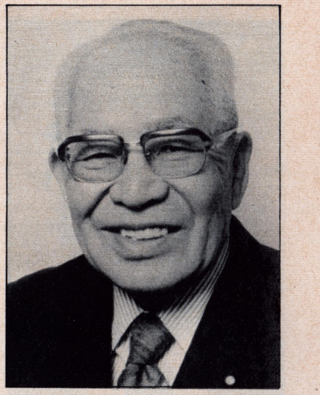
日ソ協会会長
石黒武重氏

このたびグラフ雑誌「今日のソ連邦」が、めでたく創刊二十五周年をお迎えになりましたことを心からお祝いし、今後のご発展をお祈りいたします。

「今日のソ連邦」は、在日ソ連大使館広報部が編集される広報誌として、ソ連邦およびソ連の国民生活の実情が豊富な写真と文によってわかりやすく、また興味深く紹介されております。日ソ協会ではこの雑誌が創刊された当時から会員に広く紹介し、会員および各界の方がたにソ連の実情を知り、日ソ両国民相互の理解をすすめるうえで役立てていただくようにしてまいりました。創刊当時にはまだソ連を訪れる人も今日ほど多くない時期で、それだけに「今日のソ連邦」に掲載された、ソ連各界の実際の姿とそこで生活しているソ連国民のさまざまな暮しぶりを毎月伝えてくれる豊富な写真、グラフは多くの人びとに大変喜ばれたと聞いております。

日ソ図書館には創刊以来今日までの「今日のソ連邦」が全部所蔵してあります。この二十五年の間に発行された六百冊ちかい雑誌のファイルを見ますと、ソ連邦のあゆみとそのときどきの日ソ交流のあとが織りなす歴史の重みといったものを感じます。また編集内容や印刷技術の面でも年を逐って改善され、いまでは日本で発行されているグラフ雑誌に比べても遜色のない、美麗で読みやすいものになりました。とくに数年前にそれまでの大判から週刊誌型にサイズを切りかえたことは、この雑誌をいっそうハンディな、身近な存在にし、多くの読者に歓迎されております。

四半世紀の長きにわたり「今日のソ連邦」の編集を継続し、雑誌の充実、成長に大きく貢献されたソ連大使館広報部のご努力に深い敬意を表するとともに、今後いっそうのご発展を重ねてお祈りいたします。



日ソ親善協会会長
衆議院議員
赤城　宗徳　氏

「今日のソ連邦」が発刊されて二五周年を迎え、心から尊敬と敬意をもってお祝いを申し上げる。

隣国と仲良くするということは、平和のために大切なことでありながら、隣国をよく知らないために、いろいろな問題がおこっているのが現状である。

ソ連に対して日本の世論は余りよくない。大いに悪いと云ってよいでしょう。ソ連についての無責任な情報が流され、真否も確かめずにそれに便乗するような傾向があるからだと思う。

そのことは、ソ連についての情報が少なく、一般の人々の中にソ連のことが知らされていないことが大きな原因になっていると思う。

私はよく「馬には乗ってみろ、人にはそってみろ」という。ソ連に接し、そしてまたソ連をまず知らせること、そこから友好が生じるのだから、私たちも一層「今日のソ連邦」をひろめる活動をしなければならない。

私の協会は日ソ両国民の相互理解を深める活動を通して、世界の平和に寄与することを目的として活動している団体ですが、体制のちがいをこえてお互いに知りあうための努力がなくては日ソ間にある大きな溝をうめることはできないと思う。

「今日のソ連邦」は世界各国で出されていると思うが、それぞれの国民にソ連を理解してもらうための平和の使者として二十五年にわたって活動してきたこと、日本の「今日のソ連邦」が常にいろいろな努力をして今日に至っていることに敬意を表したい。

「今日のソ連邦」の関係者の一層の御発展を期待いたします。



日ソ交流協会会長
加藤　琢治　氏

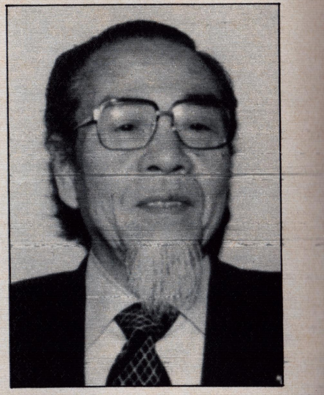
「今日のソ連邦」創刊25周年を心からお祝い申し上げます。

「光陰矢の如し」といわれますように、「今日のソ連邦」が一九五八年に発刊されてから四分の一世紀を迎えることになりました。昨年12月にソ連邦結成60周年の祝賀が、全ソ・全人民挙げて取り行われました。この半世紀余におけるソ連人民の不撓不屈の努力が結実して、今日の世界最大の国の一つにまで発展し、今後ますます大きなポテンシャリティをもって21世紀に立向うその姿勢には驚くばかりであります。

かつては「鉄のカーテンの国」として一種の神秘的な目で世界中から見られていた同国が、時代の経過とともに現実のソ連邦を紹介するという目的で、「今日のソ連邦」が写真、色彩ともに豊かな週刊誌版として日本人向けに発刊されましたことは喜ばしいことであります。15の共和国と多民族からなる世界第一の広大なソ連邦の諸地域についての政治、経済、産業、科学・技術、文化、スポーツなどの多分野について興味ある記事を可能な限り掲載すべく努力している本誌編集関係者に対して敬意を表する次第です。

なおこの際少し意見を述べさせていただくとすれば、編集がいささかソフトさを欠き、しかも文章の表現が日本人にはなじみにくい点があり、また掲載記事のなかには内容的に多少誇張しすぎる点が散見されることであります。正確な報道は読者の信頼を高め、ひいては相手国に対して新たな関心を呼び起します。

過去25年間、日ソ両国民の相互理解と相互国情の認識の上で果してきた「今日のソ連邦」の功績は、非常に大きいものがあります。今後さらに充実した情報活動を展開され、日ソ親善の気運を一層高める礎石の役割を果されるよう切望いたします。



北海道日ソ友好文化会館
理事長
柴野　安三郎　氏

「今日のソ連邦」創刊25周年を心からおよろこび申し上げます。「今日のソ連邦」は27年前の日ソ国交回復を契機として創刊されたものとうかがっておりますが、まず最初に、この25年間、1号も欠かさず、月2回刊行のペースを守り、困難な編集、出版事業にたずさわってこられた在日ソ連大使館広報部をはじめ、歴代の編集長、スタッフの皆さんのご努力と情熱に対し、衷心より敬意を表したいと思います。

私はいつも「今日のソ連邦」が届くのを心待ちにしている愛読者の一人ですが、本誌の特色は、何よりもまず、グラビヤや写真が豊富で、目で見て楽しく、容易に理解でき、それでいて深い内容が盛りこまれていることであります。

また個々の記事についても、日本人に親しみやすいように、という配慮と努力のあとが十分うかがえる編集内容であると言えましょう。

たとえば、今年の第6号（3月15日付）に載った記事「ソ連人は日本をどう思っているか？」とか、ソ連の青年80人へのアンケート調査の結果をまとめた「いわゆる〝出世〟について」などは面白く読ませて頂きました。

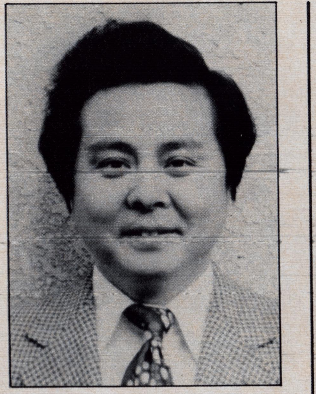
こういう記事は、私だけではなく、多くの日本人読者の興味を惹き、関心をよびおこすことでしょう。

なぜならば、ソ連のごく一般的な市民の喜怒哀楽の気持とか生活感情、人情などは、日本の庶民のそれと何ら変わるものではなく、むしろ、日本人の共感を呼び、親近感を抱かせるからであります。こういう親近感こそが相互理解を促し、友好を深めるのに役立つのではないでしょうか。

さらに、本誌はソ連の政治、経済、文化、芸術、科学、スポーツ等あらゆる分野にわたる紹介記事が豊富に掲載されており、ソ連の現状を知る上では第一級の資料と言っても過言ではありません。

私は隣人同士である日ソ両国民の親近感を強め、友好の気運を醸成してゆくうえで、「今日のソ連邦」の果たす役割は決して小さくないと確信しております。

「今日のソ連邦」のますますのご発展をお祈り申し上げます。



日本社会主義青年同盟
中央委員会委員長
善明　建一　氏

「今日のソ連邦」が創刊二五周年を迎えられたことに対して、心からお祝いを申しあげます。本誌はこの二五年にわたって日ソ青年の親善と友好を促進させる上で大きな役割を果してきたと確信しています。

本誌を通じて、日本の多くの青年が社会主義ソビエトの政治、経済、文化とソビエト国民の生活を知ることによって、社会主義の優位性を学んでいます。

私自身、ソ連共産党とソビエト国民の平和に対する政策、取り組みをいつも注意深く読んでおり、ソ連共産党とソビエト国民が誰よりも戦争を憎み、平和を愛し、闘っていることを知っています。

しかし、日本ではまだまだ社会主義ソビエトが正しく理解されているとはいえません。

それは資本の反ソ・反社会主義の思想攻撃があるからです。

こうした資本のウソを暴露する上で、もっともっと本書が日本の青年のなかに広げられていくとともに、日ソ青年の交換が活発化されなければなりません。

私も、こうした立場から社青同とレーニン・コムソモールとの組織の関係を強め、日ソ青年の親善と友好運動を促進させるために奮闘したいと思います。

「今日のソ連邦」創刊二五周年を契機にして、本誌の一層の発展を祈念します。

――ご紹介します――

本誌モスクワ編集部のスタッフ

モスクワで本誌の編集にたずさわっているスタッフ一同を紹介します。アンドレイ・ポポフ編集長については72ページをごらん下さい。



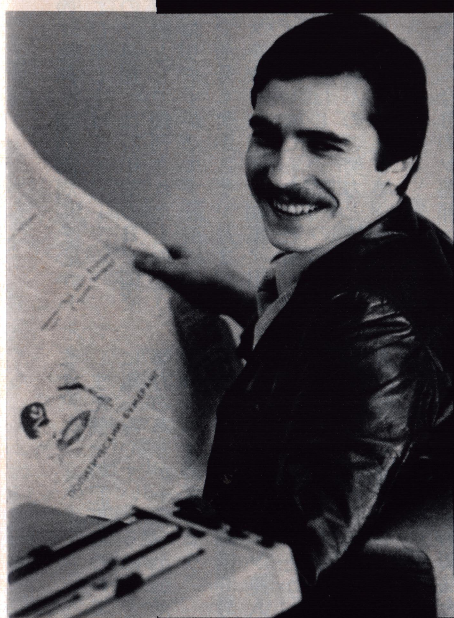
エレーナ・カザノワ（編集庶務）

「モスクワの編集部でいちばん大事な人間はだれだと思いますか？　実は私なんです……」



マリナ・ルイクリナ（編集員）

「地質学者、ガリーナとオルロフについての私のルポが皆さんの気に入ってもらえれば幸いです」



ビクトル・シリチェンコ（編集員）

「編集部に来てまだ日は浅いけど、日本向けの雑誌の仕事には大いに満足しています」



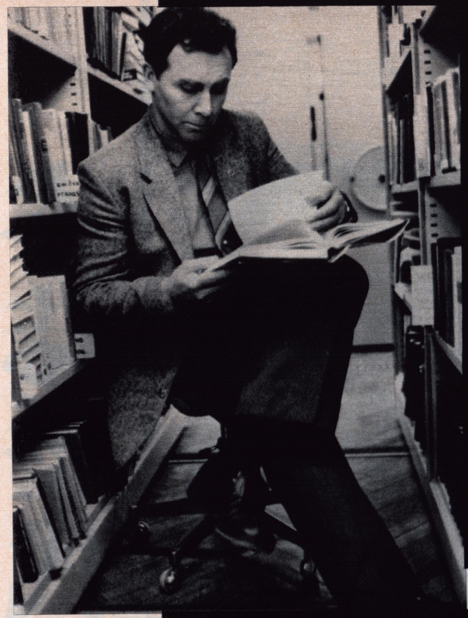
リュドミラ・ゲラシムク（レイアウト係）

「この号の割付けは私が担当したけど、どうかしら？　日本で本誌が作られるところを見たいわ」



リュドミラ・ルブツォワ（写真編集員）

「日本の読者に気に入ってもらえる写真を探すためなら、スライドを一〇〇〇枚でも見直します」



フェリクス・プラテ（本誌評論員）

「紀元二〇〇〇年には、必要な資料や注釈を探し出して来るのはロボットの仕事になるだろう……」



ナタリア・フィリポワ（レイアウト係）

「日本で過ごした楽しかった日々のことを、いまでもまだ、とても懐かしく思い出します」



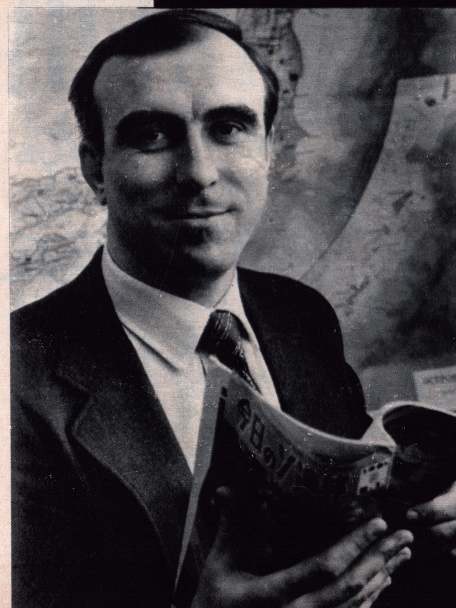
エリビラ・アレクセーエワ（写真編集員）

「私は　今日のソ連邦」誌を初めて見たときからすっかり好きになってしまいました……」



オリガ・ベドニャコワ（主任編集員）

「昔の恋人のところへは戻るんじゃない、と詩人は言うけれど、私は7年まえ本誌に戻りました」



ウラジーミル・デウリン（編集員）

「刷り上がって来る　今日のソ連邦」は、私たちがモスクワで作る原案よりはるかに素晴らしい」

本誌歴代編集長、思い出を語る

ヒロシマの折り鶴

本誌モスクワ編集長
アンドレイ・ポポフ



私が広島に行ったのは一九六五年12月も押し詰まって正月に近いある日の早朝だった。広島駅まで出迎えてくれた日ソ協会の人たちに連れられて、直ぐ原爆記念碑へ出かけた。

記念碑が望めるところまでくると、色とりどりの花輪がたくさん記念碑に結わえ付けてあるように見えた。近寄ってみたら、それはたくさんの紙の折り鶴を糸に通したものをかけてあるのだった。それはちょうどその頃、原爆後遺症で危篤状態だった広島の少女サダコさんの回復を祈って、日本全国の子供たちが折った千羽鶴だった。

折り鶴の一つに何か大きな漢字らしいものが見える。よく見ると、「今日のソ連邦」と読める。あの雑誌の表紙で折ったのだとわかった。

千羽鶴を折った人たちが原爆の非人間性に抗議し、原爆繰り返すまじという気持ちを表すために、またその気持ちを支えるためにソ連邦の名のついた紙を材料に選んだのは、少しも偶然ではないという気がした。ソ連こそ平和と核戦争防止のためにもっとも妥協しない闘いをうまずたゆまず行っている国なのだ。こう思った私は、折り鶴の作者が「今日のソ連邦」を読んでソ連の生活と政策をまちがいなくわかってくれたと考えて、嬉しい気持ちになった。

日本で「今日のソ連邦」を刊行しようという考えが生まれたのは、一九五六年10月19日に日ソ両国の国交回復にかんする共同宣言が調印されてから間もないときだった。それは日本の世論の広い層の要望に触発された考えでもあった。翌一九五七年の年頭「ソビエト情報局」（一九六一年以降はノーボスチ通信社にその機能が移管された）内に「今日のソ連邦」誌モスクワ編集部が置かれ、私は招かれてそこで働くことになった。

いまでもはっきり覚えているが、一九五七年11月の10月革命40周年記念日にちなんで「今日のソ連邦」日本版のテスト版が出たときは、本当に感慨無量だった。記事の翻訳はうまくいったか、グラフの刷り上がりはどうか、日本での評判はどうか、などなどを考えると、胸が躍った。

そして一九五八年4月、遂に本刷りの第1号が出た。それを手にしたモスクワ編集部のスタッフはまるで祭日のような浮き浮きした気持ちになった。

一九六五年1月、私は駐日ソ連大使館広報課で「今日のソ連邦」東京編集部の編集長を勤めるため、東京に着任した。私が手がけた最初の号は日ソ国交樹立40周年記念の特集号だった。

3年間の東京在任中「今日のソ連邦」誌に取り上げた出来事を順々にたどって行くと、ソ日関係があらゆる面で見る見るうちに速度を上げて発展して行く様子がまざまざと感得できた。

読者からの投書や反響、あるいは読者とのインタビューや話し合いなどを通じて、編集部は本誌で取り上げた記事が両国民の利益に合致しているという確信を抱いた。また、「今日のソ連邦」はソ連の生活と政策を物語り、ソ日関係の全面的発展を極力宣伝することによって、相互理解を深め、両国民の善隣、友好、協力を築くのに役立ったとの印象も受けた。

一九七七年4月、私は「今日のソ連邦」モスクワ編集部の編集長になった。この頃にはモスクワ編集部の多くのベテランが他の仕事に転じてしまったので、実質的にはまったく新しい編集スタッフをつくることになった。そのとき出来た編集スタッフが今日まで続いている顔ぶれなのである（70ページ参照）。

その名前を順々に紹介しよう。フェリクス・プラテ、オリガ・ベドニャコワ、マリナ・ルイクリナ、ウラジーミル・デウリン、ビクトル・シリチェンコが記事編集、リュドミラ・ルブツォワ、エリビラ・アレクセーエワが写真編集、ナタリア・フィリポワ、リュドミラ・ゲラシムクがレイアウト、エレーナ・カザノワが編集庶務、以上が直接記事と写真の編集、雑誌の割り付け原案（台紙）の作成にあたるスタッフだ。

無知の雲は早く吹き払ってほしい

ソビエト・ラジオ・テレビ東京支局長
ウラジーミル・ツベトフ



都電が銀座を走り、ザ・ピーナッツがテレビのアイドルで、3人家族が二万円の給料で暮らせたころ、モスクワでは新幹線の駅のように目立った個性のない「ソビエト情報局」に代わって、ノーボスチ通信社が設立され、世界中に広く生気のある社会思想を報道しはじめた。

変革の波は、壁に「今日のソ連邦」の最初の数号の表紙にまざって山本富士子と力道山の写真が張られた部屋にも音を立てて流れ込んだ。風がちょっと収まり、波が引いたあとの編集部には、日本国民に向けて今すぐ、徹底的にソ連の窓を開こうと意気込む若い日本研究者のグループが残っていた。私は27歳で、大体その年のころなら誰でもそうだが、心がはやるものだ。私の場合ノーボスチ通信社の指導部から、「思い切ってやるんだ」と言われ、「今日のソ連邦」の編集長に任命されたので、とくに心がはやっていた。

自分は終極の真理をすでにつかんでいて、あとはただその真理をさとらない世界の人々に伝えるだけだという絶対的な信念も、若さに付きものである。そして私が雑誌に書いた最初の記事は、ソ連で当時発売されたばかりのインスタント・コーヒーの話であった。私はロビンソンがフライデーに話すように、せいぜいわかりやすく書いた。ところがまもなく日本へ行って、日本ではインスタント・コーヒーがずっと前から、日本人の日常生活に定着していることがわかった時、私の落胆たるや実に大きかった。そして日本人たちがこのインスタント・コーヒーを私と飲みながら、ソ連に鉄道があるかとか、ロシア人は歯ぶらしを使っているかとか、ソ連でおんなが共有されているのは本当かなどという質問をぶつけてきたとき、私の落胆はパニックに変わった。

こうした教訓はためになった。私は、人々にわかってもらい、自分の言いたいことを人々に信じてもらいたいなら、まず人々を知らねばならないという教訓を身につけた。こうした若い日本研究者グループが、日本と日本人を研究しながら仕事を進め、やがて「今日のソ連邦」の発行部数を五万部に増やし、ノーボスチ通信の記事を定期的に使う日本の新聞の数を一〇〇に引き上げ、東京の五反田の自分たちの地所に3階建ての建物を建てたのである。

「今日のソ連邦」は創刊25周年を迎え、編集部には日本研究者の新しい世代が入ってきた。私は彼らの中にかつての自分の姿を見る。ソビエト人の生活は、日本人の生活と根本的に違うので、なかなか説明しにくいし、わかりにくい。かつてそのソビエト人の生活の紹介記事を苦労しながら書き始めた私たちと同じく、彼らも日本が大好きである。

PR技術に関する文献には、「宣伝戦」、「人々の知能への攻撃」、「マスコミによる打撃」など特殊な用語が多い。「今日のソ連邦」編集部で働いている人々とこれらの用語は相いれない。つまり彼らは日本を愛し、日本人を尊敬し、日本の文化に引かれているので、〝戦争〟をやるとか、〝攻撃〟をするとか、〝打撃〟を与えるなどということによってではなく、われわれの生活についての知識を広めることを通じて、日本人にできるだけソ連人に親近感を持ってもらおうとつよく念願しながら仕事をやっているからである。それはちょうど、仕事柄日本と絶えず接しているわれわれが、日本国民に親近感を抱くようになったのと同じことだ。

ソ連には戦争や人間憎悪、諸国民間の敵意の宣伝を禁じた法律がある。しかし人はある行為をやるさい、ふつう自分の気持ちにのっとり、そのあとで初めて刑法典にのっとる。それも刑法典を思い出した場合には、の話である。私が述べたような法律が、たとえソ連になくても、本誌の内容はやはり以前のままであろう。本誌に反映された社会思

れわれをきょとんとさせるような質問を出している。「今日のソ連邦」編集部は「無知があればこそ、知識もある」といった気休め的な考えに安んじてはいない。現在の編集部が指針としているのは「無知の雲を吹き払うことは決して遅すぎるということはないが、やはり早くやるに越したことはない」という本誌の創刊者の世代のスローガンである。



日本の人々にソ連人を分かってもらいたかった

ノーボスチ通信社副理事長・ノーボスチ通信社出版所長
アレクセイ・プシコフ

「今日のソ連邦」の最初の号（テスト版）が出たのは一九五七年10月末で、ソ日両国間の戦争状態を終結させ、外交関係を回復する共同宣言が調印されてわずか1年後のことだった。しかし定期刊行は若干の手続きのため遅れ、一九五八年4月にやっと発足し、これが本誌の正式の誕生ということになった。

私は最初からその編集部で働くことになり、それから6年近く東京とモスクワで「今日のソ連邦」の編集にたずさわった。

少し前モスクワ東洋学大学を出たわれわれにとって、その時期は緊張の連続と興味深い発見の時期だった。国家関係の長い期間の緊張状態、反共条約と三国条約への日本の参加、国境紛争事件、そしてついには反ナチ連合のソ連の同盟諸国に対する戦争によって、ソ日両国間の経済・文化交流は完全にストップした。芥川竜之介、徳永直の二、三の本、日本のいくつかの古典的詩歌、大学で教えていたN・コンラド・アカデミー会員、K・ポポフ教授、N・フェドマン教授、その他の有名な日本研究家たちの講義から、われわれはかなりアカデミックな知識を学んだ。日本からのニュースはほとんど入ってこなかった。共同宣言が調印された年にソ連を訪問した日本人はわずか22人（！）だったことを思い起こせば、よく分かってもらえよう。

われわれは、理論的知識を身につけるとともに、日本研究の実際の経験を積んだ結果、日本海の対岸の人々がわれわれの生活を知っているのとほぼ同じ位、隣の国民生活を余り知らないことが、よくわかった。

日本人側の理解のほどは、東京に着任してから、特にはっきり分かった。それこそ一歩あるくごとに、人々がソ連について全く何も知らないことを思い知らされた。ソ連をけなすのがふつうで、まれにものすごく持ち上げる人がいたが、いずれもこれまで強制されてきた無知の結果だった。

しかし当時すでに、現状を客観的に評価でき、戦後に宣言された日本の非武装化・民主化の諸原則の実現に信念をもって、熱心に取りかかった人々が、どんどん増えていた。

人々は、他国民の平和で自由な発達は、自分たちの幸せと繁栄の唯一の保証であることを理解するようになった。こういう結論に最初に到達したのが、ソ連で捕虜生活をして帰国した元兵士たちだったことは、時にはわれわれに意外だったし、逆説的にさえ思われた。彼らの多くは日ソ協会の活動家や、ソ連の歌と踊りの芸術、ソビエト文化の宣伝・普及者になった。いま東京のタクシー運転手と交わした会話が頭に浮かんでくる。その運転手の話によると、捕虜のとき一番感動した発見は、敗者と勝者が働いていた条件で、条件は同じくひどかったのだが、労働時間も、食事も平等だったことだという。

ソ日両国間に相互理解と友好の関係を確立することができるし、またそれが必要だという信念は、「今日のソ連邦」の創刊当初からの編集計画の基本だった。日本語ができて、ジャーナリストだったおかげで、編集部員たちは、ソ日関係の発展に貢献した日本の多くの著名人とおつき合いができた。たとえば、日本のうたごえの組織者・指導者の関鑑子さん、総評事務局長だった岩井　章さん、世界的に有名な学者で、核兵器の廃絶をめざして倦むことなく闘った安井　郁さん、シベリアの半分をまわり、日本の実業界にシベリアの資源開発に参加する道を開いた、最初の日本の経済・財界代表団の団長だった河合良成さんたちである。

この人たちは幾十、幾百人の日本人とともに、戦後の日ソ関係という建物の建設に大きな足跡を残したが、「今日のソ連邦」は、そうした足跡を必ず取り上げてきた。

そのほか、本誌はソ連国民の日常生活、ソ連を構成する連邦構成共和国、わが国に住む多くの大小民族を系統的に紹介してきた。日本の人たちはボリショイ劇場のバレエの魅力やソビエト・サーカスの妙技、世界最強の女子体操選手たちの優美な演技を、まず本誌で読み、次に実際にそれらを見たのである。

それは、どん欲にお互いを知り、科学・経済・技術・文化活動のさまざまな分野でパートナーの新しい能力をたえず発見する時代だったし、希望と明るい展望の時代であった。そしてその多くのものが実現できたのである。

しかし当時と同じく、現在も世界平和、諸国民間の平和を維持し、強化することが最重要課題になっている。ソ日両国民を近付けたものは、戦争で両国がひどい犠牲と重荷を背負わされた結果生まれた、戦争を本能的に拒否する気持

ちである。ソ連の人々は、日本国民が国の生活から戦争を取り除く条文を憲法に明記したことを熱烈に歓迎したし、日本の世論も一九六一年のソ連共産党第22回大会で採択されたソ連共産党綱領の「社会主義諸国と資本主義諸国の平和共存は、人間社会の発展の客観的な必要性である。戦争は国際紛争を解決する方法になりえないし、そうなってはならない」という言葉を歓迎した。

四半世紀の間「今日のソ連邦」誌はその務めを遂行している。この期間に約三〇〇〇万部の本誌が日本国中に配布された。その一冊一冊の中から読者は、隣人であるソ連国民の平和・友好の意思を知ってもらおうという編集者たちの心からの願いを汲み取ることができる。



本誌の発行に関われてうれしい

ノーボスチ通信社アジア総局編集長
アレクセイ・パンテレーエフ

一九五八年、大学の1年生だった私は「今日のソ連邦」の最初の号の一冊を手にして、正直のところ、やや敬けんな気持ちで主に写真とキャプションに見入りながらページを繰った。日本語の文章を深く理解するには漢字の語いがまだ明らかに不十分だった。その時はもちろん、それからさして年月も経ないうちに、私自身がこの雑誌の準備過程を詳しく知ることになり、何年にもわたって本誌の発行に従事するようになろうとは考えもしなかった。そして刷り上がったばかりの、独特のにおいがする本誌を、今度はもうはるかに注意深く検討するようになろうとは。本誌の配布システムの改善と質の向上にある程度関与できたことは大変うれしい。私の在任中に雑誌の大きさが変わり、カラーのページが入るようになった。私はこの雑誌がより良いものになり、分かりやすく、読者に親しみやすいものになることをいつも望んでいる。

本誌は、ソ日関係に何が起こっているか、隣国の国民がいかに生活し、何を考え、何を目ざし、世界の出来事にどう反応しているか、といった読者が知りたいと思う事柄にいつも答えることができる友人であるべきだ——これが私や、私の前任者、後任者が描いているこの雑誌の理想像だろう。「今日のソ連邦」はこの理想の姿に徐々に近づいており、発刊以来25年の道のりの中で年ごとに良くなってきたように私には思える。この方針は完全にその正しさを証明し、モスクワと東京の編集部の努力は無駄にはならず、北海道から沖縄まで日本国中の大勢の友人を本誌に引き寄せた。

どの刊行物でも、それを一層完全なものにする最も効果のある手段の一つは、読者との対話、読者の意見と要望を考慮することであると私は考えてきたし、いまもそう考えている。だから私たちは読者の手紙の処理、〝読者の質問に答える〟欄に掲載する回答づくり、読者会の組織と開催にいつも最大の注意を払って来た。

本誌創刊20周年にちなんだある読者会が思い出される。金沢の日ソ協会石川県連のホールに定期購読者約50人が集まった。どれほど熱っぽく、関心をもって、実務的に、みんなが本誌の持つ問題——刷り上がりの質、素材、カラー写真、モノクロ写真の質について議論を戦わせたことか！　取り上げるテーマの拡大、ジャンルの多様化についてどれほど提案がなされたことか！　討論の締めくくりをしながら私は述べた——多様なご意見を考慮すれば、一種類ではなく、ご出席の皆さん一人ひとりに一冊ずつ、本誌の50のバリエーションを、さらに、ほかの読者の皆さんのために数千のバリエーションを出さなくてはならないでしょう、と。冗談でこう言ったのだが、後になってしみじみ考えると、実際、本誌が人々の心に通じる道を見つけ、政治家や労組活動家、サラリーマンや看護婦、労働者や学生を同時にこの雑誌に引きつけるようにするには、まだまだ多くのことをしなければならない、という結論に至った。

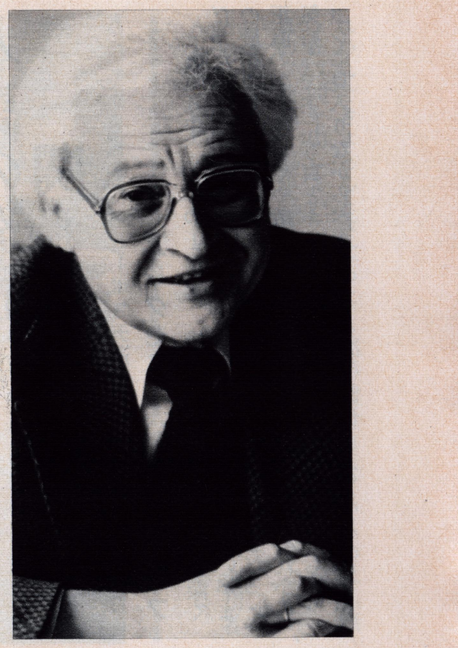
25年というのは一つの機関、人間、出版物の一生にとって重要な一段階だ。「今日のソ連邦」がこれからもソ日両国民の相互理解の深化と両国の善隣・協力関係の強化に立派な貢献をされるよう期待したい。ソ連へのこの独特の〝窓〟が常に広く開け放たれ、日本の読者を隣国の生活の鼓動と確実に結びつけるように。

今も気にかかる愛する雑誌

ノーボスチ通信社新聞・雑誌編集部副編集長
アレクサンドル・フラトキン

私と日本とのかかわりを数字で示すと——私の人生の1/3、つまり約20年間は「今日のソ連邦」と結びついており、日本語を学び始めた時から勘定すると、日本とのかかわりはその2倍以上になる。

もう何年もたって、当然慣



れてもいい頃なのに、日本から毎号届けられる真新しい、まだ印刷のインクのにおいのする本誌を開ける時は、今もって胸が高鳴る。何だかんだといいながらめくって、ある時はうれしくてほほえみ、ある時はため息をついたり、驚いたりしながら読む。

これが、あわただしくも楽しい雑誌編集の仕事だ。

こんにち、創刊25周年を迎えて思い出すのは、日本版編集部がモスクワで本誌創刊10周年を祝った時のことだ。まだプーシキン広場にあったノーボスチ通信社本社の会議室に日本大使館員、モスクワ駐在日本人記者、社会団体代表、ノーボスチ通信社職員、本誌のソ連人執筆者および友人たちなど、大勢が集まった。壁には日本版編集部の編集風景を描いた、一風変わった、おかしな本誌の模型（レイアウト原案の台紙）が数枚かかっていた。入口のドアの前にはキモノを着た編集部の女性職員が立ち、日本風に低くおじぎをして、この記念日のために作ったバッジと花をお客さんに手渡した。

にぎやかな、打ち解けた雰囲気の中で、本誌に温かな祝辞が贈られた。日本大使館の代表からも祝辞を頂いた。

「今日のソ連邦」の編集部員が、大きな漢字やひらがなを自分の紙に一字ずつ、一生懸命書いたことがあった。各自がその紙を頭上に掲げると、「新年おめでとうございます」という文章になった。これをカメラに収め、できた写真で「今日のソ連邦」の新年号を飾ったのである。

自信を持っていえるが、われわれはうまくいった時も、そうでなかった時もあるが、ぞんざいにやったことはなかった。材料の一つ一つ、写真の一枚一枚を、読者に面白いだろうか？ 分かるだろうか？ と厳しくチェックしてきた。もちろん重要な仕事、重要な課題は、個々の材料はもちろん、その号全体を、一層の相互理解に役立ち、ソ日両国民間に友好感情を呼び起こすようなものにすることだ。

私は運良く、一九七三年から一九七六年までの足かけ4年、本誌編集長として東京で働いた。今でも、当時のことが楽しく、懐かしく思い出される。仲の良い、熟練した日本人スタッフとの仕事には、心から満足している。スタッフ全員と、一人一人の顔を思い出す。本誌創刊25周年にあたり、日本人スタッフが注いできたエネルギーと努力に対し、私からのお祝いを申し上げたい。

日本から戻ると私は、世界各国向けの新聞・雑誌の発行に責任を負うノーボスチ通信社新聞・雑誌編集部副編集長の任についた。「今日のソ連邦」は私が携わる出版物の一つにすぎなくなったわけだが、それでも私と「今日のソ連邦」誌とは、依然として固く結びついている。

本誌の定期読者の皆さんには、私と同名の主人公――モスクワの工作機械工場の労働者アレクサンドル・イワノフの生活を描いたシリーズを思い出していただけるだろうか。この大切な、必要な雑誌の創刊25周年にあたり、あのアレクサンドル・イワノフと共に、本誌のすべての読者の皆さん、かつて本誌の出版に携わっていた皆さん、今もこの有益な仕事を続けておられる皆さんのご成功とご幸福をお祈りしたい。

元編集部員たちから一言

リュドミラ・クロット（美術家、ジャーナリスト中央会館付属ジャーナリスト研修所レイアウト学部長）――一九五八年の春、「今日のソ連邦」の初期の号の製作スタッフの一員だったことを誇りに思っています。慣れたヨーロッパ・システムの割り付けから離れなければならなかったので、なかなか大変でした。日本の方々にとっておもしろい雑誌になるように頑張ったつもりです。私たちの努力が報いられたかどうか、それは多分、読者の方々が判断して下さるでしょう……

ユーリー・ゲオルギエフ（歴史学博士候補、マルクス・レーニン主義研究所研究員、元本誌編集部庶務主任）――本誌の仕事をしたのは私にとって幸福でした。いまではもう切っても切れないソ日関係のきずなに自分の生活を結びつけているさまざまな人々と知り合うことができたのですから。

ウラジーミル・ダビジェンコ（ノーボスチ通信庶務総局編集員）――いまだに私は次の号が出るのを首を長くして待ち、毎号おもしろく読んでいます。ただいく分寂しいのは、私が本誌の庶務主任をやっていた（一九七三―七六年）時よりも、今ははるかにいい雑誌になってしまったということでしょうか……

タチヤナ・グレブイフ（「ソビエツコエ・フォト」誌編集長、元本誌写真編集員）――私は「今日のソ連邦」誌で13年間働きました。この13年間は私にとってさながら運命の贈り物のようでした。日本の方々（短期間モスクワを訪れた人や、反対にモスクワで働いている人たち）とも仲良くなりました。一緒にロシアの歌をうたった日本の人たちみんなにご挨拶を送ります。

アレクサンドル・ラザレフ（ノーボスチ通信アジア総局編集員、元本誌庶務主任）――「今日のソ連邦」はまるで磁石のようになったという点で私には大変貴重です。本誌誌上で発言しなかった人がいるでしょうか――歴史家、エコノミスト、文学者、社会学者……本誌は日本に関心を持つ人々を結ぶ独特のクラブのようなものです。

アレクサンドル・ゾーリン（ノーボスチ通信アジア総局編集員）――あるとき、秋田県の横手市でたまたまある一軒の農家に立ち寄りましたが、その家で見た「今日のソ連邦」の一年ごとのとじ込みに拭いがたい印象を受けました。その日本の農家で私は、本誌が読まれ、関心を持たれ、しかも愛されているのを知ったのです。

われわれの仕事

ノーボスチ通信社東京支局長
ミハイル・エフィーモフ



正直言って、いつ自分が「今日のソ連邦」に初めて記事を書いたか、覚えていない。もう20年以上も前のことだ。当時編集部にいた友人のV・ツベトフに言われた次の言葉だけを覚えている――「日本の読者はとてもうるさいよ。このことだけは忘れちゃだめだ。読者は言葉の美しさなど二の次で、数字や事実、完璧な情報の方を好む。簡潔に、平明に、分かりやすく書くことが肝心だ」

その後一九六一年8月にノーボスチ通信社が設立され、私はこの仕事に就いた。以来、直接、間接に私の生活はこの雑誌にかかわってきた。かけ出しの編集者から編集長まで、編集の仕事の〝階段〟を一段一段残らず踏んできたし、モスクワと東京で本誌の発行に携わった。今、自分の歩んだ道を振り返ってみると、この〝25周年記念を迎える雑誌〟のおかげで、自分が実に多くのものを見る機会に恵まれたことが分かる。ソ連の最高レベルの政府指導者や社会活動家、学者、宇宙飛行士、労働者、音楽家、スポーツマン、ファッションモデルに会う機会があったし、ソ連国内もよく旅行した。ハバロフスクのソ日労働組合集会やバイカル湖畔のソ日青年友好祭に参加し、〝北村ミッション〟（一九六三年第2次訪ソ経済使節団）に同行し、すでに歴史となった他の多くの出来事の証人となることができた。

私はこの一文を、ひじょうに静かな住宅地である東京の東五反田で書いている。ここに、私がすでに2年余り働いているノーボスチ通信社東京支局とソ連大使館広報部の建物があり、まさにここから読者の皆さんに「今日のソ連邦」が月に2回、発送担当者たちの手で送り出されているのである。

本誌がどうやって作られるのかとよく聞かれる。この質問に答えよう。ノーボスチ通信社提供の資料によるわが国の紹介誌は、世界の約40カ国で出版されている。これらは全部、ページ数、部数、発行回数がそれぞれ違い、例えば米国ではカラーの月刊誌「ソビエト・ライフ」を、インドでは12の現地語で月2回刊の「ソビエト・ランド」（発行部数約六〇万部で、現地のどの出版物よりも多い）を出している。創刊40年以上になる英国の「ソビエト・ウィークリー」は海外でソ連が出している最も古い定期刊行物の一つである。これらすべての出版物に掲載されるソ連紹介の多くの材料は皆同じものだが、各編集部はそれぞれ現地の読者に向くよう最大限に手を入れるようにしている。モスクワの「今日のソ連邦」編集部も、本誌をできるだけ〝日本的〟なものにしようと、努力している。A・ポポフ・モスクワ編集長の文の中でモスクワ編集部のスタッフは紹介ずみだ。だから私がつけ加えることができるのは、このスタッフが、自分の仕事の真のプロであり、多くの労力とエネルギーを、日本および日本文化、伝統、現代生活の研究に費やしているということだけである。編集スタッフの何人かは日本をたびたび訪れ、日本語を知っている。

モスクワでは、本誌編集の基本材料――割り付け原案の台紙、写真、大半のテキスト（ロシア語のまま）を用意する。

これらすべての材料は、本誌の公式編集者であるソ連大使館の広報部に届けられ、ここからがわれわれ日本編集部の仕事になる。一番〝頭の痛い〟のが、本誌の発行に直接責任を負うソ連大使館のV・ネチポレンコ三等書記官である。彼は日本人の翻訳者たち（6人）やレイアウト担当者とともに、各号の内容を最終的に決定する。われわれは、ソ連人だけでなく、現地の人にも執筆してもらって内容をより豊富にしようと努めている。その方がずっと誌面を生き生きさせ、面白くすると思う。「今日のソ連邦」のために執筆する希望と時間を見付けて下さった方々に、われわれは限りなく感謝している。読者の皆さんからは沢山の手紙をいただくが、できればもっと多くのおたよりをいただきたい。

本誌の発行に携わってきた日本人スタッフの中から、特に高橋宣彦氏に触れておきたい。高橋氏は創刊以来約20年間にわたり、われわれの仕事に無尽蔵のエネルギーと深い知識を捧げて下さった。残念ながら、すでに引退されたが、今でもわれわれは以前と同様、氏の援助を肌身に感じている。

また25周年記念日にあたり、本誌の印刷・発行業務と配布に多大の関心を払って下さっている新時代社および東京印書館の指導部にも、感謝の言葉を申し上げたい。

今後の本誌の編集方針について。全体的に言うならば（恐らく日本の読者はこうした言い方を好まないと思うが）現在、共産主義建設の壮大な課題を解決しつつあるソ連の生活や、その主な目的が世界平和であるソ連の一般勤労者の日常について、またソ日関係の前向きの動きに関する興味深い記事を、もっと沢山紹介したいと思っている。

最後にもう一度くり返し申し上げたい。親愛な読者の皆さん、われわれは皆さんのご協力を大いに期待している。毎号毎号が、何か少しでも新しいこと、興味深いことを皆さんにお届けできるようにと願っている。われわれが望むことはほかにない。

創刊号の主人公はいま……

シベリアで地質調査の陣頭指揮

本誌記者　マリナ・ルイクリナ
カメラ　Y・プロスチャコフ



シベリア総合地質調査隊調査主任ガリーナ・ゴロドニャク。20年まえ、モスクワ大学を卒業してノボシビルスクへやって来た。

本誌創刊号の表紙（18ページ参照）に載っていたモスクワ大学の1年生たちは、その後どのような人生をたどったのか？　本号で取り上げた当時の学生たちの一人、ガリーナ・ゴロドニャクの現在の生活を紹介しよう（もう一人のミハイル・オルロフについては、20ページに掲載）。

私はミハイル・オルロフから、かつての同級生ガリーナ・ゴロドニャクの住所を教えてもらった。ガリーナはノボシビルスク市でシベリア総合地質調査隊の調査主任をやっているとのことだった。

「他の都市で暮らしたり仕事をしたりしている同級生とは、去年初めて再会しました」とオルロフは言った。「去年、学部卒業20周年の行事が行われ、全国各地から予期しなかったほど大勢の卒業生が集まってきたのです。私の同級生一三〇人のうち、66人が博士候補、6人が博士になっていることが分かりました。彼らによって14の鉱床が発見され、彼らの二一二人の息子たちが親と同じ道を歩んでいます。ガリーナは相変わらず陽気で、楽天的で、娘さんがいるとのこと。話題といえば、好きな地質学の話と娘さんのことだけです」

ガリーナ・ゴロドニャクは45歳。私のためにこんな遠くまで、と驚いたような表情で記者を迎えてくれた。私には時間など少しも惜しくなかった。ノボシビルスクで過ごした日々は非常に興味深く、充実したものだった。ガリーナは不思議な魅力を持っていた。毎日毎日、一刻一刻を、生活を味わいながら、喜々として生きている、という感じだった。家事をする姿までが楽しそうだった。食事を作り、部屋を片づけ、縫い物や編み物をして、次の日にはどこかへ出張に出かけて行くのだ。

ガリーナの仕事は過密で複雑だ。ふつう、このようなポストは男性が占めている。シベリア総合地質調査隊は地元の（鉱床に近い）建設資材工場のために有用地下資源を探している。活動範囲は西シベリアと東シベリアのほぼ全域――アルタイ地方、クラスノヤルスク地方、チタ州、ケメロボ州、トムスク州、ノボシビルスク州である。調査主任は探査作業と試掘作業を調整し、実験室での作業の遂行を監督し、新鉱床の経済的メリットを証明し、埋蔵量を予測しなければならない。

一九八二年だけでも、シベリア総合地質調査隊は27のさまざまなプロジェクト――建設用の砂、花崗岩、大理石、耐火粘土、石材、珪砂その他の鉱床で仕事をした。

「この職業を選んだ動機は？」と私はガリーナに聞いた。

「私はキエフ（ウクライナ共和国首都）から遠くないドニエプル河畔のカーネフ市で育ちました。当時、そこには崖が多く、青味がかった灰色の粘土の地層が露出していました。キエフ大学の地質学部の学生たちが、よくそこで実習をしていました。それを見て、自分が歩いている地面の構造を調べるのは面白いだろうな、と考えたものです。とてもロマンチックな仕事だと思われました。全国を旅行して、自然の多様な美しさを知るのも、あこがれでした」

「どうしてノボシビルスクへ来たのですか？」

「六〇年代には、ウクライナには地質学者のための仕事がなかったのです。すっかり開発されていましたから。ノボシビルスクはまだ若いまちだったので（一九八三年で創建90年になる）、できるだけ大勢の専門家を必要としていました。そこで私は決心しました。卒業後3年間の義務配属期間はここで働こうと。ところが、ごらんのように、私はここに残りました……」

「故郷からこんなに離れたところへ一人でやって来るのは不安ではありませんでしたか？」

「不安でした。その一方、とても誘惑的でした。当時の私にとっては、それは新しい旅、幼いころからの夢の実現だったのです」

私たちが話しているあいだに、ガリーナの娘ユーリャが台所で食卓の用意をしていた。ユーリャは8年生で、14歳。学校での勉強のかたわら、モスクワ大学付属の通信制全ソ数学学校の勉強もしている。彼女の夢は、生物学の分野を専門とする数学者になることだ。驚くほど自主性が強く、しっかりしている。

「あの子は気の毒です」とガリーナは溜め息をついた。「私は月に2、3回は出張しなければならないし、おばあちゃんが一緒にいるわけでもないので、あの子一人のことが多いのです。夫とはずっと以前に別れました。彼も地質学者です。仕事に次ぐ仕事、出張に次ぐ出張では、私には家庭は維持できなかったでしょう……」

夕方の短い時間に、ユーリャはギターとピアノを演奏し、かなりたくさんのサボテンのコレクションを見せ、ペットの犬とオウムを紹介してくれた。そのうえ彼女は、ママのところへモスクワから記者がやって来たというので、とても満足だった。つまり、ママはふつうの人間ではない、みんなに一目置かれているのだから。



同僚の地質学者たちと

次の日、ガリーナはアカデムゴロドクの地質学研究所の会合に出ることになっていた。ノボシビルスクから40kmほど離れたところにソ連科学アカデミー・シベリア部がある。ここがアカデムゴロドク（科学者の町）だ。ここには30以上の研究所があり、隣接するアパートや一戸建て住居に研究者たちが住んでいる。

「このような会合は、しょっちゅうあるわけではないのです」とガリーナが言った。「でも、こういう会合は私にとって、非常に大事です。ここで地質学のさまざまな成果、新しい設備、新しい仕事のやり方を知ることができる

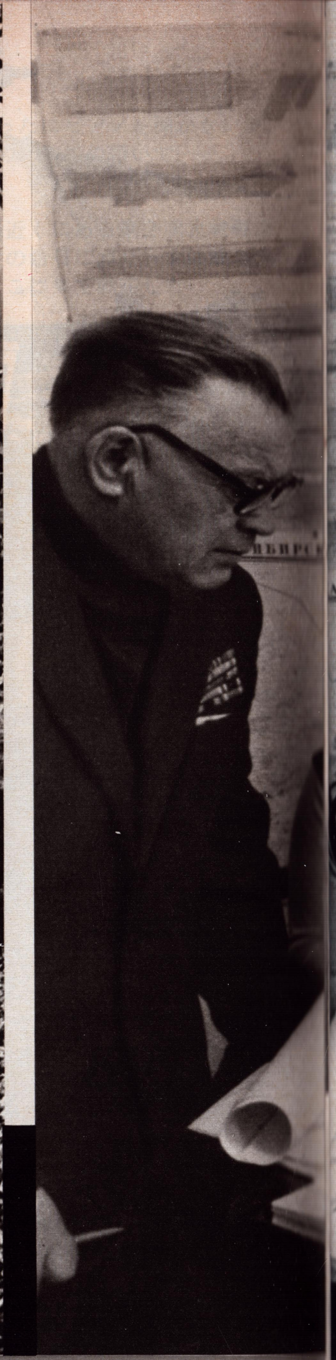
定例の朝の打ち合わせ会議で仕事の段取りを説明するガリーナ（右から２人目）。



のですから。
　私と一緒に行ってみませんか？　ノボシビルスクまで来てシベリアの科学の中心部を見ずに帰るのでは、悔いが残るでしょう」
　私は喜んで同意した。ガリーナ・ゴロドニャクが研究所で用件を全部すませると、私たちはアカデムゴロドクの雪に埋まった並木道をぶらついた。この美しい並木道は〝黄金の溪谷〟と呼ばれており、下方の森までつづいている。残念ながら、スキーを持って来なかったので、雪の深い森の中を長靴で歩くのは、とてもむりだった。引き返して、まちへもどった。ガリーナは歩くのが速く、私はついて行くのがやっとだった。
「仕事柄、大股で歩く癖が抜けなくて」と言って彼女は笑った。「でも、以前ほどは歩かなくなってしまいました。いまでは車で行くことが多いんです。車でいきなり現場について、地層の露出部を見ても、まわりで起きていることは分かりません。だから私はときどき、現場よりずっと手前で降りて、美しい景色を楽しみながら、歩いて行きます。シベリアの自然はとても美しいから、そのあと仕事をするのが楽になります」
「故郷のウクライナへ帰りたいとは思いませんか？」
「何度も帰るよう声がかかり、面白い仕事の誘いもありました。その気にもなりましたが、やりかけた仕事を投げ出すことはできません。友人？　どこへ行っても同じです。ノボシビルスクでは、私は恵まれています。心からの友人が大勢できたのですから。ユーリャも、もう自分をシベリアっ子だと思っています。学校の休みごとにキエフ

クラスノヤルスク地方はこの20年間で東シベリアで最も工業が発達した地域に変わった。ここの約30の建設資材工場がガリーナの仕事に直接関係している。





のおばあちゃんのところへ行きますが、キエフに住もうとは言いません」
　翌朝、私はガリーナの職場を訪ねた。職場で仕事のことについて聞きたかったからだ。彼女の仕事仲間のことについても知りたいという私の願いは、むだに終わった。みんなとても忙しかったからだ。
「私の仕事はとても大変です」とガリーナは言った。「何しろ、決定が正しかったかどうか、仕事のすべての環（フィールド・ワーク、調査隊、モスクワの建設資材工業省）の活動が正確で迅速かどうかによって、赤レンガ、珪石レンガ、ガラス、板石、衛生陶器、タイルなど、さまざまな建設資材を生産する約30の工場の仕事が左右されるからです。そのほか、地元の鉱床で採掘され、骨材や道路建設に使われる石、バラス、砂もあります。たとえば外装や内装、建物の装飾に使われる花崗岩や大理石もそうです。シベリア産の石灰岩は、農業にも広範に使われています。酸性土壌を中和するのに欠かせない石灰を作ったり、養鶏飼料のミネラル添加材にするためです。
　でも、いちばん大変なのは、現場が移動することです。資材を採掘しつく



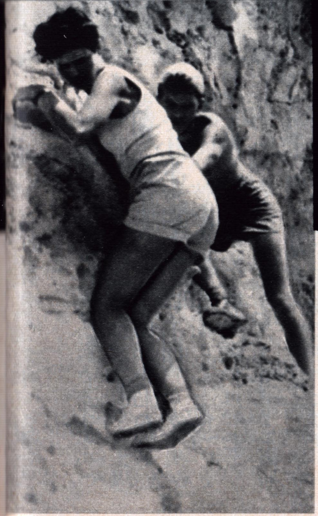
きょうもまた出張に出かける。



◀カンスク・アチンスク燃料エネルギー・コンプレクスの石炭採掘現場。

仕事も好きだけど、家事も嫌いじゃない。











◀ユーリャはめったにピアノを弾かないが、きょうはママのたっての願いで……

ガリーナの家の近くにある第2次大戦戦没者の記念碑。父の命日にガリーナは娘ユーリャと一緒にここに来て献花した。

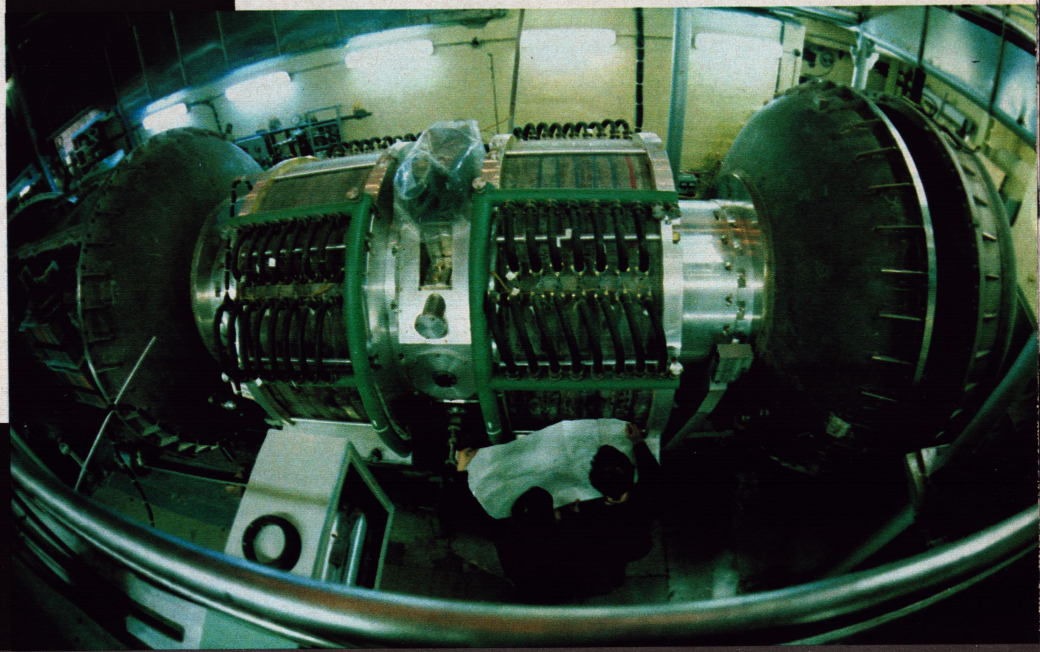


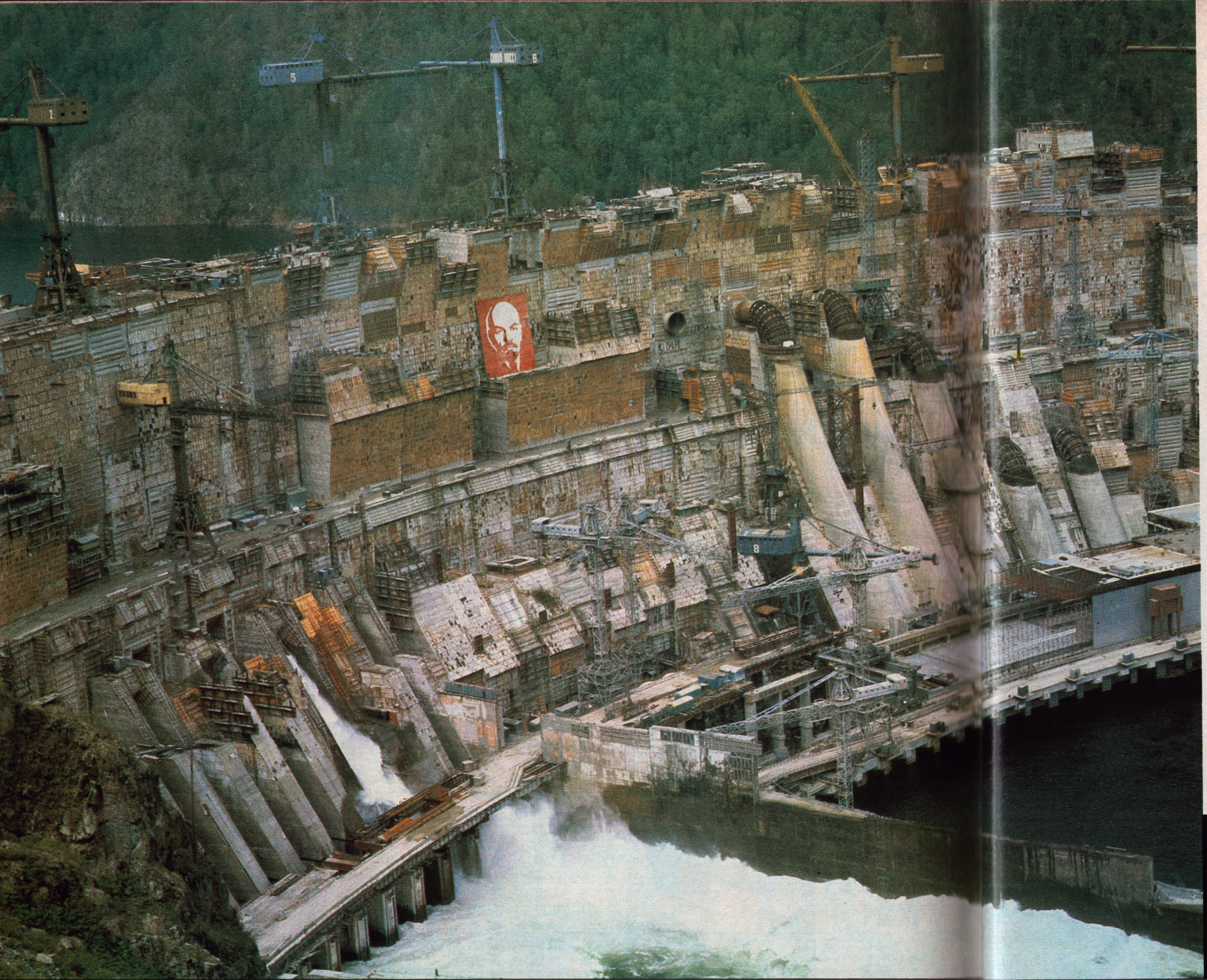
右の写真5点は学生時代のガリーナ（クリミアとカフカズでの実習の時のもの）











右上　サヤン・シューシェンスコエ水力発電所建設者のまちチェリョームシキ。ガリーナはこの発電所のための資材の探鉱を手がけたこともある。

右下　ノボシビルスク近郊のソ連科学アカデミー・シベリア部の核物理学研究所にあるユニークなプラズマ発電装置。

上左　クラスノヤルスク地方の新しいエネルギー・センターになるサヤン・シューシェンスコエ水力発電所（計画出力640万KW）。10基の発電機のうち、すでに6基が稼働している。

すと、新しい鉱床の開発が始まりますが、そこには何が待ち受けているか分かりません。それでも、工場を遊休させるわけには行かないのです！」

私はガリーナの事務室に座って、その仕事ぶりを観察した。彼女はてきぱきしており、厳密で、ねばり強い。人々と手ぎわよく話し、すべての人に正確さを要求する。控え目で、むだなことを言わない。

と、とつぜん書類をわきへ置いて、娘に電話をした。

「ユーリャ！　きょう音楽院へ行かない？」

そして私に向かって、笑って言った。

「私は音楽なしでは暮らせないのです。私の1日は目一杯仕事が詰まっていま

す。でも、人間は緊張の連続ではやって行けません。音楽は心を落ちつかせ、ゆっくり思いをめぐらせ、自分のことを考えさせてくれます。音楽を聴いていると、生活の中で何が大切で、何が二義的なものか、とてもよく分かるのです」

私は最後に、ミハイル・オルロフにしたのと同じ質問をガリーナにもしてみた。

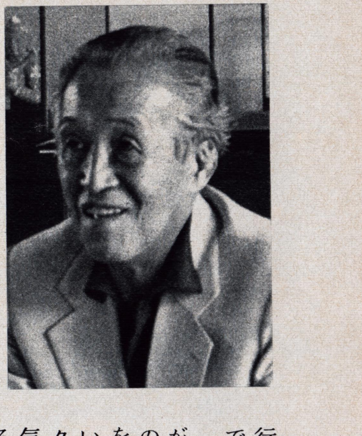
「ご自分の生活でいちばん大事だと考えていることは何ですか？」

「いちばん大事なことは、むだな存在であってはならないということです。私の喜びは、作り出すことです。だって、私は家を建て、まちを作っているのですから」

ノボシビルスク州内の出張には、ふつう、車で行く。でも本人は歩く方が好きなのだ。



「今日のソ連邦」創刊25周年に寄せて



作家 **井上　靖　氏**

「今日のソ連邦」が創刊二十五周年を迎えると聞く。おめでたいことでもあり、嬉しいことでもある。この雑誌が日ソ両国の親善、文化交流の上に果した役割は極めて大きいものである。この二十五年の間に、私は二回、ソ連を訪ねている。一九六八年の西トルキスタンとシベリヤの旅の折は、その紀行を「今日のソ連邦」に載せて頂き、ウズベク共和国における旅の団欒のスナップを表紙に取り扱って頂いている。



女優 **黒柳　徹子　さん**

「今日のソ連邦」創刊二十五周年、おめでとうございます。

私が、世界的なソ連の魔術師キオと、テレビの特別番組を作るためにソ連に行ったのは、六年くらい前の秋のことでした。

初めは、インタビューの予定でしたが、キオさんは、私を見るなり、「私のサーカスで最も評判のいいマジックを、貴女に、やって頂きます」と、いいました。そして、実際、私は、モスクワから一時間くらい南に下った、空気の聖地と呼ばれるキスロボックにある大きなサーカスで、しかも、二千人のお客さまの前で、「美女ライオンに姿を変える」「美女、火中に消える」「美女、屏風から現れる」、といった、夢のような美女をやる事になってしまったのです。本番は、とても、うまくいきました。ソ連のお客さまは、振袖の私に、惜しみなく拍手を送って下さいました。モスクワ・テレビのスタッフの皆さんは、想像をはるかに上まわる、驚くほどの技術の持ち主で、しかもハンサムが多かったです。サーカスの方達は、二週間後に別れるとき、みんなで、私をつかまえて、口々に、「セロテープ、セロテープ!!」と叫びました。私を日本に帰したくないので、セロテープで、サーカスに、とめてしまおう……というのです。私は、そのやさしさに泣きました。キオさんのすべての魔術のトリックを知っているのは、日本人では私だけと思いますが、キオさんとの約束通り、絶対、誰にも、話していません。ロケのとき、コンクリートの低い塀に腰かけた私は、赤いネッカチーフをかぶったお婆さんから、叱られました。「若い娘が、そんな冷たいとこに、すわって! 赤ん坊が出来なくなったら、どうするの! 立ちなさい!!」

本当に、温かい思い出を、私はソ連に持っていて、今も大切にしています。



女優 **栗原　小巻　さん**

ソビエトと日本の掛け橋として、25年。今日のソ連邦のはたしている、素晴らしい功績に、心からお祝い申し上げます。クラシック・バレエに、青春をかけた私にとって、モスクワは、第二のふるさと。毎月届く「今日のソ連邦」を手にすると、ふるさとからの便りのような、懐かしさを感じさせてくれます。

貴誌のますますの発展と、両国の友好、世界の平和を、心より、願っております。

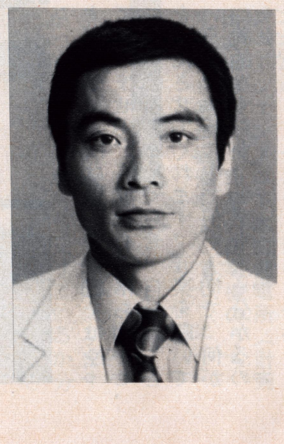


東京芸大講師
チャイコフスキー国際音楽コンクール声楽部門審査員

小野　光子　さん

発刊25周年おめでとうございます。

創刊号に登場させていただいた私は、まだモスクワ留学中の乙女でしたが、その日から今日まで、ソビエト楽壇の温かい友情は、一つも変わらず、私の心も今も同じです。ソ連人の熱い血潮と日本人の純粋さ—— 私たちはとても気が合うのではないでしょうか。これからも両国の友好と世界の平和のために、御誌のご発展を心からお祈りします。



朝日生命体操教室校長

塚原　光男　氏

「今日のソ連邦」創刊二十五周年、おめでとうございます。

世界の男子体操界を長年リードしてきたのは、日本とソ連の選手の激しい闘いでした。日本の体操の技術とソ連の体操の技術が交流し合い、互いのレベルがアップすることを望んでいます。また、日ソ対抗体操競技会の再開に努力したいと思っております。

女子体操については、日本の選手をソ連に派遣し、ソ連の選手の練習を見たり、一緒に練習ができれば、日本の女子体操界のレベル向上に役立つと思います。

「今日のソ連邦」が今後とも一層の発展をとげることを望みます。貴誌が日ソ間のスポーツ交流において大きな役割を果たすことをお祈りします。



明坂　尚子　さん

一九五七年秋に発行された本誌創刊号テスト版には、被爆者としてモスクワの世界青年学生平和友好祭で平和を訴える明坂（旧姓永田）さんの写真が掲載されている。現在はテキスタイル・デザイナーで横浜市に住む明坂さんに、当時の思い出を寄せていただいた。

一九五七年8月6日、マネージナヤ広場を埋めつくした60万人近い世界の青年代表を前にして、原爆の悲惨さ、そして平和を守る願いを懸命に訴え終ったとき、そっと暖かい腕でしっかりと抱きしめて下さり、大きなショールをかけて下さった老婦人がありました。対独戦争で命を落したふたりの英雄、ゾーヤとシューラのお母さんでした。

戦争で子供をなくした母と、原爆で母を失った娘は、言葉が通じなくても心はひとつでした。

あれから26年の歳月が流れました。いま、東京とモスクワは約10時間、毎週どれだけたくさんの人達が行き来しているでしょう。あの時、日本の政府は第6回世界青年学生平和友好祭代表へのパスポートの発給をよしとせず、私達の出発はずい分とおくれました。しかも当時、日ソ間には空の直行便どころか、横浜・ナホトカ定期航路さえありませんでした。

新潟から迎えの船にのった代表団は、ついに開会式に間にあうことが出来ず、選ばれた各界の代表数人だけがハバロフスクからプロペラ機でモスクワへ先行しました。20人ばかりのれる小さな飛行機で、広いシベリアの各地に飛び石のように舞いおり、給油しつづけての飛行でした。

このシベリアの各地でのこころ暖まる出迎え、いろ鮮やかな野の花でこしらえたブーケを抱えて歓迎してくれたピオネールの子供達、素朴で、活き活きとした人々の表情、草原のような緑の飛行場……何年たっても忘れられない美しい絵のような想い出です。

あんなに細く困難だった日ソ間の渡航が、こんなに広々とたくさんの人の足でふみ固められ立派な道が出来ました。時間の流れと共に戦争の記憶が遠のいていく今、この道がふたたびぬかるみにならないためにも、私達はしっかりと平和を守っていかなければならないと思います。

兼子　隆　氏

兼子さんも本誌創刊号テスト版に写真が載っている訪ソ日本レスリング選手団のメンバーの一人で、現在は中央大学職員。当時の思い出を次のように語った。

何しろ古いことなので、もう細かいことは思い出せませんが、ソ連遠征は懐かしい思い出です。当時、私はまだ20代の初めで、ウェルター級（フリースタイル）の選手でした。ソ連へは日本代表チームの一員として合計6回行きました。ですから、「今日のソ連邦」に載っている写真がいつの時のものか、私にもはっきりしません。

一回目は、日本から初めてレスリング・チームが訪ソした時で、南回りでチェコスロバキアを経由してソ連に入りましたが、国賓なみの大歓迎を受けました。当時は真冬だったと思いますが、選手団の一人ひとりを小さな花束で歓迎して下さったのが印象に残っています。モスクワとトビリシとバクーで試合をしましたが、グルジアの選手などが強かったように思います。

この10年ほど私はレスリングからすっかり足が遠のいてしまいましたが、日ソのレスリング界の交流がこれからも盛んになってほしいと思いますね。



早瀬　演　氏

早瀬さんは一九六五年に行われた本誌第一回愛読者クイズで一位になり、ソ連旅行に招待された。モスクワの赤の広場でソ連の子どもたちと交歓する光景が、本誌一九六五年15号の表紙になっている。群馬県伊勢崎市在住。近況を寄せていただいた。

「今日のソ連邦」誌、創刊二十五周年、おめでとうございます。

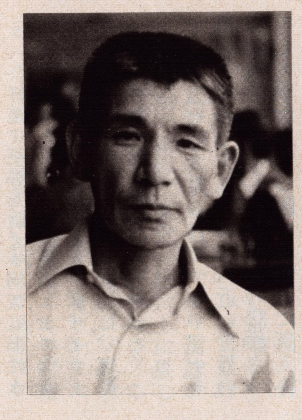
創刊号より読み始めて、はや二十五年、私が表紙絵になった第一回クイズ招待旅行から十八年、日ソ親善資料センターを自宅に開設してから十七年、オストロフスキイの「鋼鉄は如何にして鍛えられたか」を読み、ソ連邦を、あらゆる面から学ばなければならないことを知った中学三年生の時から数えて三十三年、そして今、毎日読む新聞のソ連邦関係記事に一喜一憂の毎日です。月に二度の「今日のソ連邦」誌も、多彩な記事を楽しく、深い関心を持って読ませて頂いております。

今年に入ってから、ロシア・ソビエト関係資料の目録カードの作成を始めました。それと平行して「今日のソ連邦」索引辞典なるものの企画を夢みて準備し始めております。

資料センターの在庫の一端を紹介させて頂き、みなさまのご利用をお待ちしております。

「今日のソ連邦」創刊号より通巻五八〇号、修道社「ロシア文学全集」三五巻、講談社「エルミタージュ美術館」五巻ほか日本語図書千四百冊、「ソビエト大百科辞典」三十巻、「チェーホフ全集」既刊二七巻ほか露語図書六十冊、レコード百五十枚、「クレムリン」「シベリア物語」等L500ビデオテ

ープ九十本、サモワール十三個、バラライカ、イコン、チェカンカ、絵画、民芸品（マトリョーシカ、パレフ、ムスチョーラ、フェドスキノ、ドウイムコボ等）、紙幣、コイン、切手、人形、琥珀の装身具等百数十点、これ等の資料を通して、ソ連邦を良く知って頂き、日ソ友好の輪を広げて行く一助にしたいと思っております。



本間　信治　氏

本間さんは新潟県佐渡郡相川町に住む青果卸販売業者。一九七五年、イカ釣りに出て遭難した際、ソ連船に救助された。礼状を出したいという本間さんのために、その船の船長の住所を捜し出すのに本誌も一役買った。そのいきさつは本誌一九八一年20号に詳しい。

私は今から八年前の昭和五十年六月十八日の末明、持ち船（〇・九トン）でイカ釣りに出て暴風雨に遭い、日本海を一昼夜漂流しました。もう助からないものと覚悟しましたが、翌十九日の午前七時半ごろ、外国船が近づいてきて救助されました。これはあとで分かったのですが、ソ連の気象観測船「プリリフ」号でした。船内ではシーモノフ船長をはじめ乗組員の皆さんから大変親切なもてなしを受け、新潟港まで送り届けていただきました。

言葉も出来ず、九死に一生を得た私の感謝の気持ちがそのとき船長さんに十分に伝えられなかったものですから、もう一度、船長さんに何とかして、礼状を出したいと思いましたが、船長さんのお名前は分かっているものの、住所が分からず、残念に思っていました。

たまたま、昭和五十四年の夏、海や山で遭難した時の人間の心理を研究している日本大学文理学部の村井健祐先生が私を訪ねられ、私の願いを聞いて、船長さんあての礼状をあずかって下さいました。その後、いろいろな方のご好意により、この礼状が御誌編集部のほうへ回り、シーモノフ船長のウラジオストクの住所を捜しあてていただきました。その節は本当にありがとうございました。

2年前、シーモノフ船長さんからのお返事とお写真を受けとった時には、思いがかなって感激しました。日ソ間が一日も早く平静になり、平和に交際できることを切望してやみません。そしてシーモノフ船長さんに直接お目にかかって御礼を申し上げられる日が、一日も早く来ることを念願しております。

日ソ親善協会第19回定期総会

3月12日、東京・千代田区の番町共済会館で、「日ソ友好でアジアと世界の平和を！」「日ソ親善運動の輪を強く大きく！」をスローガンに、日ソ親善協会の第19回定期総会が開かれ、日本各地の約50以上の支部から一〇〇名近くの代議員が参加した。

来賓として出席したパブロフ駐日ソ連大使はあいさつの中で、アンドロポフ・ソ連共産党中央委員会書記長をはじめとするソ連の指導部、並びにソ連国民は、一貫して世界平和の擁護のために闘っていること、日ソ両国間の交流の改善・増進を心から願っていることを、繰り返し強調した。

また、公明党の矢追秀彦・宣伝局長、民社党の小平忠・副委員長、日本対外文化協会の辻原弘市・理事長があいさつした。

総会ではまず一九八二年度の活動報告が承認され、次いで一九八三年度の運動方針が討議された。一九八三年度運動方針では、日ソ関係の現状と展望が分析され、日ソ親善協会の任務と主要な目標が確認された。そのさい特に、今年の日ソ関係をとりまく国際情勢は戦争と平和という基本的命題の中で複雑多岐な流れが考えられ、常に正しい認識をし、平和のためにどうすべきかという立場を堅持しなければならないことが強調された。具体的には、日ソ両国民間の友好親善の中核になること、相互理解と隔意のない話し合いを行っていくことが協会の任務として掲げられた。

総会で承認された一九八三年度運動方針には、「不戦の誓い」「アンサンブルの公演」など、多彩な交流計画が盛り込まれている。

なお、総会にはソ連対文連、ソ日協会からザベーリン・ソ連重工業企業建設次官、コロマク・ソ日協会事務局長が親善使節として出席した。総会の席上、赤城宗徳・日ソ親善協会会長とザベーリン次官が一九八三年度親善協力計画に調印した。



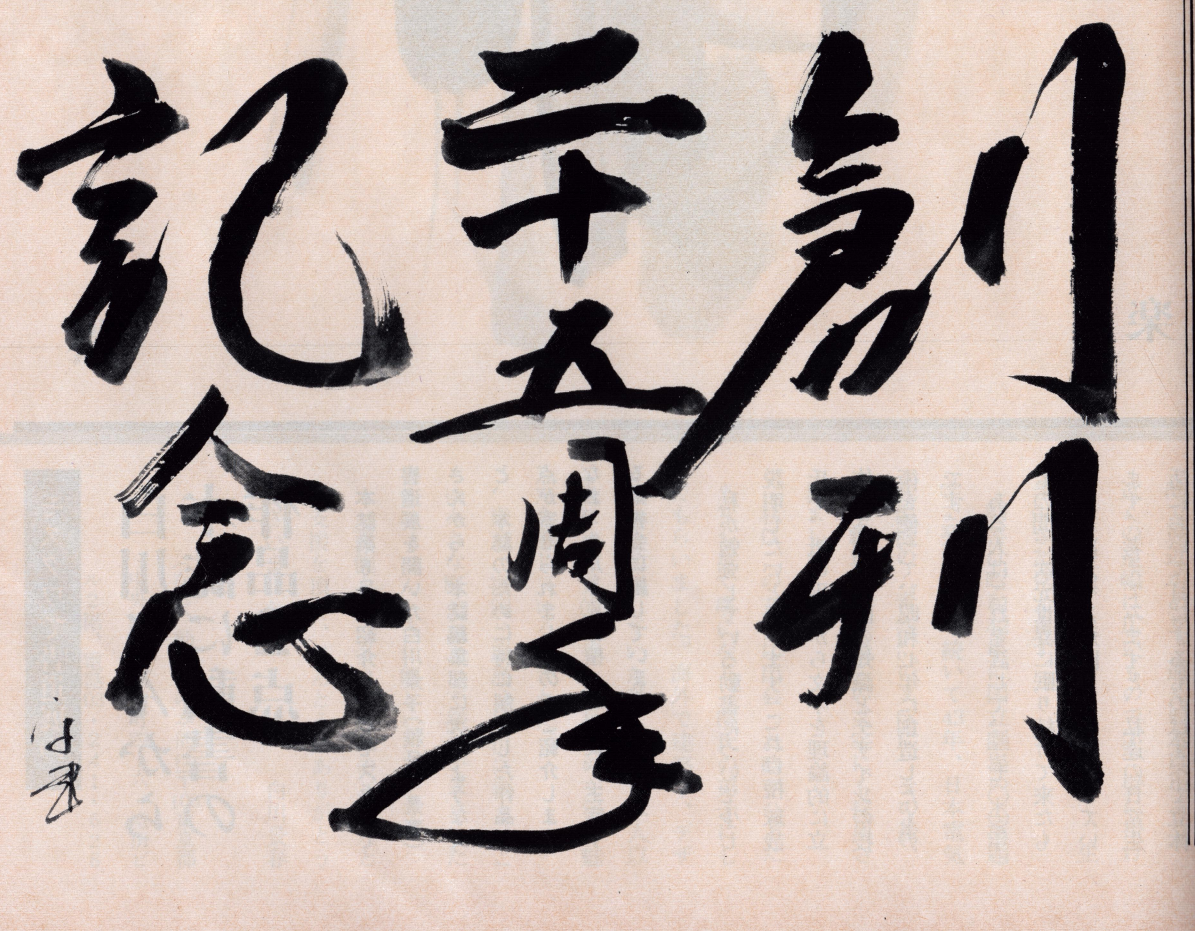
調印した一九八三年度親善協力計画を交換する赤城宗徳・日ソ親善協会会長とザベーリン・ソ連対文連・ソ日協会代表団長（写真提供＝日ソ親善協会）

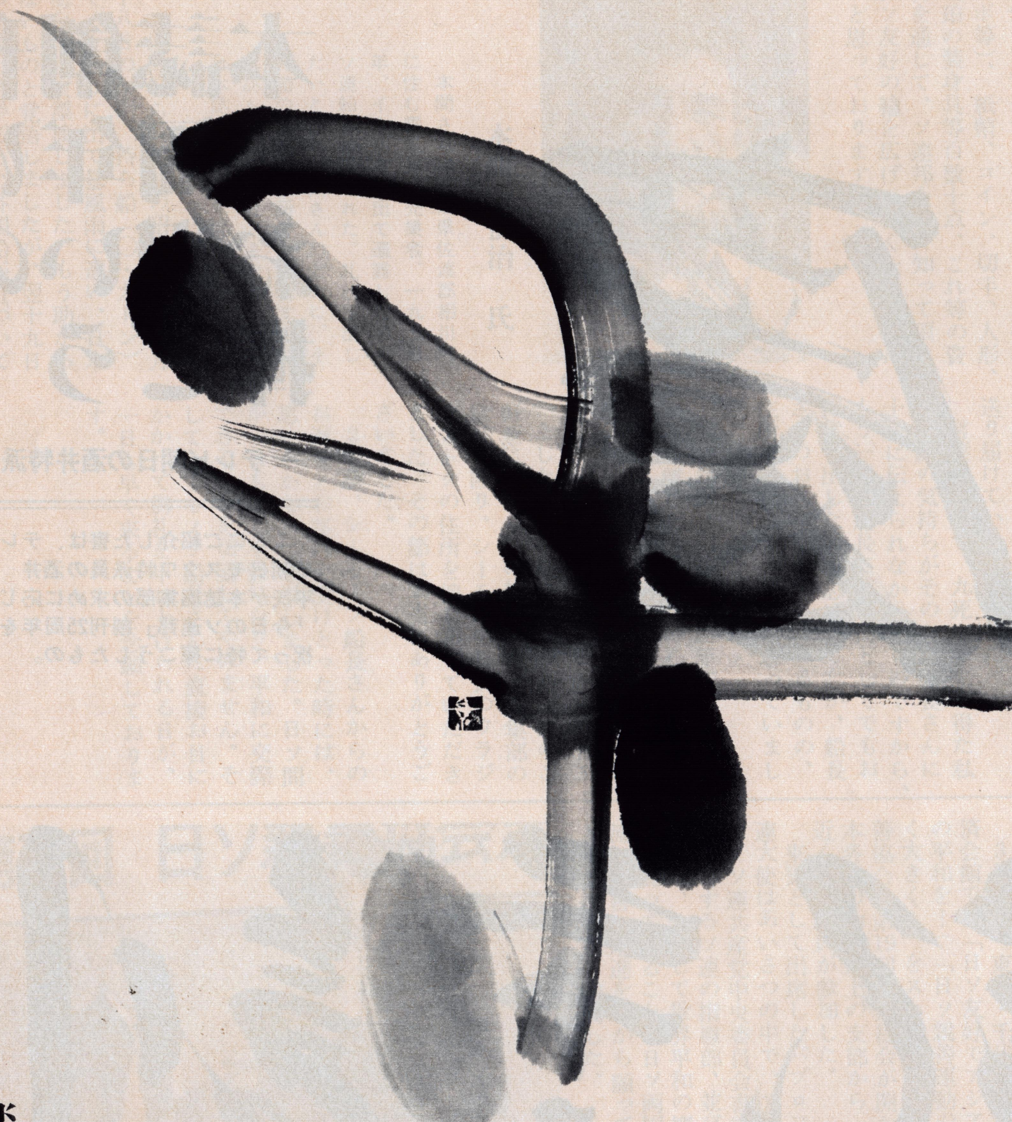
本誌創刊25周年にお祝いの揮ごう

――テレビ朝日の酒井特派員

ここにご紹介した書は、テレビ朝日モスクワ特派員の酒井平氏が本誌編集部の求めに応じ、「今日のソ連邦」創刊25周年を祝って特に揮ごうしたもの。







楽

モスクワで書道展の

白川さんから本誌に動書の作品2点

本誌第6号で紹介した、モスクワで書道展を開いた白川景子（雅号　景春）さんから、本誌編集部に次のような文と、本誌のために特に制作した作品2点が寄せられましたのでご紹介します。なお、白川さんは檀　琢哉氏が主宰する動書会に属しています。

私が勉強している動書について少し説明したいと思います。これは檀　琢哉氏が、紙の平面から文字を理論的に立体化させ、絵画の知識とデザインの技術を使って、昭和42年に創造したものです。

ある人はこれを評して、一七〇〇年もの間二次元世界に眠り続けて来たものを三次元へと飛躍させたと言っています。考えてみますと、私達の日常生活において目にするものはすべて立体的で遠近があり、遠くの木は小さく、近くの道幅は広いものです。壁に掛けた一枚の絵も、その表現があって、生き生きと見えます。



猫

動書は昭和42年に国立劇場の上演題字で発表され、続いて43年、日本電気洗濯機の〝青空〟の文字に、その後、日本料理店〝弁慶〟の文字にも採用されました。

私はこの文字に出会った時、ひとたまりもなく虜になり、檀氏の弟子にしてもらいました。海外で建築学、デザインを勉強していた私には、日本人以上に、視覚的に美しい日本の文字に魅力を感じている時でした。

東京、福岡、広島、秋田に続き、この大きな町モスクワで発表できましたのは、ほんとうに嬉しいことです。ソ連側より、多くの方々のご協力とご支援を頂き、ほんとうにありがとうございました。

白川景春

（なお、動書会の本部は〒103東京都中央区日本橋室町四—六・増田ビル2階、電話03・241・6281にある）

“日本のお友だちをつくりたい…”

——第2回カナガワビエンナーレ国際児童画展でソ連の少女に大賞



上　3月6日、神奈川県民ホールで表彰を受けた3人のグランプリ受賞者。右から佐藤慎祐君、（一人置いて）レーナ・オブラスツォワ、デーピカ・プリャンガニエさん（スリランカ）〔写真提供＝神奈川県庁〕

3月6日から20日まで、横浜市の神奈川県民ホールで第2回カナガワビエンナーレ国際児童画展（主催＝神奈川県）が開かれた。内外から送られた約三万点の児童画の中から、国際審査委員会は一〇五六点（そのうち外国作品五六三点）の入賞作品を選んだ。グランプリを獲得した三人のうちの一人は、ソ連の8歳の少女レーナ・オブラスツォワだった。児童画展オープニングの日、P・ロマノフ本誌記者がレーナ・オブラスツォワにインタビューした。

記者　レーナ、君はたった一人で日本に来たわけだけど、もう大人だってことかな？

レーナ　ぜんぜん。だってまだ2年生なんだもの。2年A組なの。

記者　君の学校には、2年B組もあるの？

レーナ　ええ。私の住むモスクワ州エレクトロスターリ市には子どもが沢山いて、学校の数も多いの。1年生も2年生もいくつかクラスがあるわ。クラスの名前はロシア語のアルファベット順につけるの。

記者　A組はきっと、なんでも一番できるんじゃないかな？

レーナ　わかりません。でも、一番仲が良くて、にぎやかだと思うわ。

記者　君の成績、教えてくれる？

レーナ　〝5〟と〝4〟だけよ。〝5〟の方が多いけど。

記者　図画の成績は？

レーナ　〝5〟です。

記者　レーナはきっと、絵を描くのが何よりも一番好きなんだね？

レーナ　ううん、一番好きなのはママよ。

記者　ママを描くことある？

レーナ　もちろん。でもとっても難しいわ。だってママはすごくきれいなんだもの。それと自然を描くのも好き。絵の題名は『夏休み』とか、『冬の散歩』、『春休み』、『水泳』とかが多いわ。

記者　友だちを描くこともある？

レーナ　ええ。幼稚園の時同じ組で、今も同じ学校の友だちとか、ほかにも、同じ団地に住んでいる友だちとか。私、友だちなん人いるか知ってる？

記者　わからないな。

レーナ　私にもわからないけど、でもとってもたくさんいるのよ。

記者　みんな、いい友だち？

レーナ　もちろん。そうでなきゃ、友だちを描いたりなんかしないわ。

記者　その友だちが、いま展示されている『スケート場で』の絵に描かれているんだね。

レーナ　そう。ただ女の子ばかりだけど。

記者　男の子は、どうして描かなかったの？

レーナ　よく覚えてないわ。だって、あの絵を描いたのは2年前ですもの…文化宮殿の絵画クラブに入ったばかりの時よ。

記者　誰かに手伝ってもらったりしなかった？

レーナ　いいえ。絵のアナトリー・コソフ先生はいろいろ教えてくれます。色の選び方とか、人物の配置のし方とか。粘土やボール紙の切り方なんかも習っています。でも、私たちは全部自分でやります。先生はお行儀なんかもきちんと教えてくれます。

記者　君はお行儀はいいのかな？〝行い〟の成績はどう？

レーナ　〝5〟よ。時どき〝4〟ももらうけど。

記者　どうして？

レーナ　わからない。休み時間にいたずらするからかな…

記者　日本に来てからも、いたずらする？

レーナ　時どきね。でも、そんなに悪いいたずらはしてないわ。スリランカから来たデーピカちゃん（マニエル・ワドゥ・デーピカ・プリヤンガニエ、14歳、同じくグランプリを受賞）と遊んでるの。私たち同じホテルの隣同士だから。

記者　日本はどう？　気に入った？

レーナ　ええ。とくに動物園と自然が好き。あした、シンジちゃん（佐藤慎祐君、6歳、同じくグランプリを受賞）が通っている小学校を訪問するのよ。日本の小学生とお友だちになって、私の学校のことを話したり、どうやって勉強しているか見てきたいわ。男の子でも女の子でもいいから、誰かと仲良くなりたい。

記者　でも、ロシア語じゃ通じないから、どうやって話すの？

レーナ　ロシア語を知らないデーピカちゃんと遊ぶ時と同じよ。ことばは通じなくてもちゃんとわかるの。それと、ソ連に帰ってからも、私は自分の絵を送って、日本からも絵を送ってもらうつもり。絵なら、誰にでもわかるわ。大人の人にもね……



大賞を受けたレーナ・オブラスツォワの作品『スケート場で』

各種ソ連展の主催者に感謝状



松前重義・日本対外文化協会会長（左）に感謝状を手渡すパブロフ駐日ソ連大使

3月11日、東京の在日ソ連大使館で、近年開催されたソ連の科学展や美術展の主催者たちを招いてパーティーが開かれた。

ここ2年間のソ日文化交流では「大マンモス展」、「草原のシルクロード展」、「ネアンデルタールとクロマニョン人展」、「〝芸術と革命〟展」など、ソ連関係の大きな催し物があった。

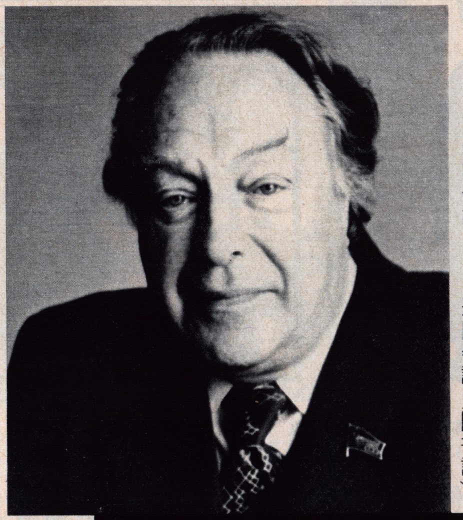
こうした展示には東京、大阪、静岡、広島、名古屋、仙台、福岡、京都その他の都市の二〇〇万以上の人々が訪れた。日本の観客はソ連の科学や芸術の成果に深い関心と尊敬を示した。そのことは来観者ノートに書かれた感想がよく示している。

パーティーであいさつに立ったV・パブロフ駐日ソ連大使は、ソ連関係の催し物の実施に携わったすべての日本の諸団体、とりわけ主導的な役割を果たした日本対外文化協会の協力にたいして、感謝の意を表明した。パブロフ大使は特に、催し物の準備と展示を通じて、ソ日両国民間の相互理解、信頼、善隣の深化という崇高な課題に貢献しているさまざまな諸団体とソ連側との間に実り多い関係ができたことを強調した。

このパーティーでパブロフ大使は、対外文化協会、読売新聞、西武グループ、東京新聞、中日新聞、北海道新聞、東海テレビその他、日本の50以上の会社および団体に感謝状を手渡した。

何よりも大事な平和共存

ウラジーミル・クドリャフツェフ
（イズベスチャ紙政治評論員、ソ連最高会議代議員、ソ連国会議員団書記）



「今日のソ連邦」創刊25周年に当たって私が言いたいと思うことは、本や新聞の受け売りではなくて、私自身の体験から出たことである。私が初めて日本を訪れたのは実に50年も昔のことだ。日本で4年間特派員として働き、その間遂に一度も外へ出たことがなかった。その後、戦後になってからも日本をたびたび訪れた。何しろ国際政局の上で大事件が次から次へとたくさん起こったので、私は新聞記者として、また政治家として日本から遠く離れたいろいろな地域に関わらなければならないことになったが、その間も私は日本と日本の周辺で起こる出来事から目を離さなかった。それはソ日関係が世界の最重要問題の一つであるからだけではなかった。

日本滞在中に私はこの天分に富み、働き好きな民族に対して心底から好意を抱くようになり、両国が隣り合わせていること、もっと正確にいえば、ソ日両国の善隣関係は双方にとって利益以外の何物でもなく、両国を取り巻いている極東地域によい影響を与えるという結論に達したのである。

平和共存には知り合うことが必要であり、それによってお互いへの信頼を生み出すことができる。「今日のソ連邦」誌が目指している方向というのもまさにこれであり、同誌がソ連の生活のあらゆる面を日本の読者に紹介しているのもそのためである。同誌の責任たるや重大にして光栄あるものといわねばならない。そしてこのように相互に知り合うことによって、客観的な人ならば必ずや、ソ連と日本の間では共通する利害の方が相反する利害よりも多いという結論に達するにちがいない。両国の利害が一致しないなどという説はたいがいが日本の国益を損なおうとする者たちのでたらめなのである。その証拠に私はソ連関係の極めて重要な出来事として、永野重雄日本商工会議所会頭を団長とする日本経済界の大型代表団のソ連訪問を挙げたい。この代表団は参加人員の数からいって空前の大型代表団であった。永野団長はソ連側との話し合いの成果について、「日ソ両国は隣人同士であり、経済的にみて相互補完の関係にある」と述べた。ソ連側代表団長もまったくこれと同じ意見を表明したのである。

私が「今日のソ連邦」に希望することは、同誌がソ日両国の善隣関係を発展強化させ、経済面で両国が実際に補い合うようになるよう促進してほしいということである。決して私は「今日のソ連邦」の役割を誇張していない。なぜなら同誌は日本の読者にソ連にかんする真実を伝えており、それが相互の理解に実に役立っているからである。そしてそのソ日共通の利益とは、平和共存、それに平和共存から生じるすべての結果にこそあるのだ。

記憶に永久に刻み込まれた国

ニコライ・フェドレンコ
（文学者、東洋学者、元駐日大使、「外国文学」誌編集長）



時は容赦なく多くのものをぬぐい去ってしまう。人々の顔、名前、出来事が忘れられ、鮮やかな、たぐいないものとして心に刻まれていた歳月が色あせてゆく。きょうの色彩が思い出の中の過ぎ去った日の印象の鮮やかさを曇らせることも珍しくない。しかし、かつて目にしたものが思い出の中でいつまでも生き生きとした絵として残るということもある。

多くのことが私の眼前で起こったが、それはすでに歴史の資産となり、さまざまな出来事の意味と意義を滞りなく明らかにしている。そして今も、過去を振り返り、日本での何回もの〝春秋〟を思い起こすと、それは決して単なる出来事ではなかったということがますますはっきりするのである。日本日記に目を通すたびに、私の記憶の中に出会いと顔がよみがえってくる。それは長いこと記憶にとどめられていたもので、今ではもう完全に別のイメージになっている。そして私には、これはプロセスの単なる一段階ではないように思われる。これこそ、意識から消し去ることのできない生涯の印象なのだ。

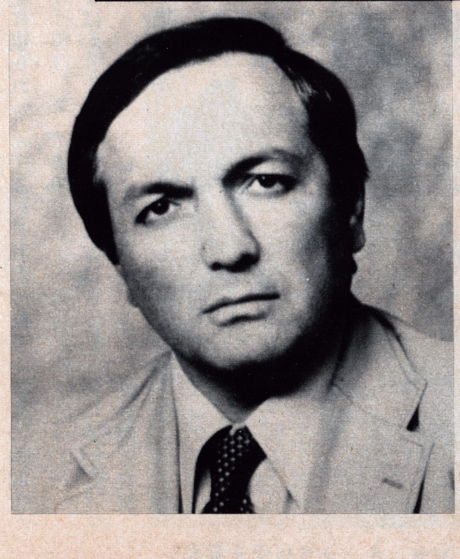
よく日本のことを思い出し、滅多に入れない博物館や庭園、美術展、スタジオ、陶芸家の仕事場に思いを馳せ、それらの持っていた創作的探求、幸運と幻滅の独特の雰囲気、成功の喜びをしのぶ。

思い起こすのは鎌倉の海岸、静穏の中に沈む奈良の旧跡、何層にも重なった時代の厚みの中を突き進む巨大な帆船のような京都の御所や古寺とその天蓋のような屋根。そして、別の文明に属する人間であるわれわれも、これらの、日本民族以外の人々にとってもかけがえのない神聖な史跡を高く評価している。大学都市、大工業都市が目に浮かぶ――大阪、長崎、横浜、福岡、札幌、名古屋、神戸……そしてもちろん、巨大都市東京での歳月も、その人の海、ユニークな本の世界、美術展、学問上の友人たち、都会の騒がしい波間に浮く小舟のような小さなレストラン〝スシヤ〟、〝サシミヤ〟、〝テンプラヤ〟など一緒に思い出される……

日本の地に別れを告げる時、私は多くの漂泊者の思いに極めて近い哀愁の感情を味わった。そして、この国での生活の数年間のうちに私自身の一部がここのどこかに根を張り、私の心臓のある部分がここにとどまったのではないかと思った。しかし、その後、時間がたつにつれて私は、日本で経験した多くのものがいわば私自身の一部になったことを理解するようになった。

語りやすく、語りにくい国

フェリクス・ワルタニャン
（中央医師研修所副所長）



日本へ行って受けた印象は実に多様なので、その話をするのは難しくもあり、易しくもあると言える。話しにくいのは印象が多すぎるからで、話しやすいのは、そのとき受けた感じが異常なほど鮮烈で、二度とは味わえないものだからだ。日本の風景、日本の植物が独特のものであるということは、話を聞いて皆よく知っている。だから、これから日本へ行こうというときには、誰しもそういう日本独特のものに出食わす心がまえをするようだ。しかし、それでもやはり日本という国の美しさにはすっかり驚かされてしまって、それが何年も何年も強烈な思い出になって残ることになる。日本国民が勤勉なことも知れ渡っている。だが、日本の医学者たちが系統的に、また考え深く仕事をしている様子をこの目で眺める、いや、正確にいえば、観察したときには、かれらへの特別な尊敬の気持ちがこみあげてきた。

国際共同研究ということで数年間、私は日本の精神薬理学、神経生物学専攻の多くの同僚たちと楽しく研究生活を送る機会を持った。中でも北海道大学の山下教授、国立精神衛生研究所の加藤教授、長崎大の高橋教授、大阪大学の福田教授などとはしょっちゅう顔を合わせ、議論したり共同研究をしたりしたが、学者としてばかりでなく、人間的にも立派な方ばかりだった。一つだけ、特に言っておきたいことがある。それは、日本の学者は研究対象について深く、独創的な考え方ができるだけでなく、具体的な研究上の行動をとる能力にもすぐれているということだ。まさにこの二つの能力を併せ持つことが、科学思想を新たな高みへ押し上げる力になっているのだ。

感じたことがもう一つある。日本にいたあいだ日本の哲学思想というよりは、「情」とか「誠」とか「福」とか「忍」とかいう象徴的な考え方を知ったが、最初はさっぱり分からなかった。中でも興味をひかれたのは「忍」という考え方だ。ちょっと言葉では説明できないが、「忍」は日本人の特色をなす考えだという気がする。実際にこの目で日本を見た上で日本について考えること、この「忍」という考えにすっかり染まって、共感を覚えるようになり、自分の思想の一部になってしまったような気がした。この感じはまだなくならない。私は「忍」という字の掛け軸を国へ持ち帰り、いまでも部屋の壁に掛けてある。それを見ると、滞在中に親しくなった人たちや、北海道から沖縄まで見物して歩いた日本の美しい自然を思い出す。

いちばん印象深い国

オリガ・ビチェロワ
（一九八一年度世界体操選手権大会女子個人総合優勝、一九八二年度ワールドカップ大会優勝）



日本には一九七九年と一九八一年の2回行きました。七九年の時は滞在期間がとても短く、あまりよく見てまわるチャンスがなかったのですが、一九八一年には北から南まで方々の土地をまわることができ、その印象はいまも鮮やかに残っています。私はこれまでヨーロッパや南北アメリカの多くの国やアジアの国々に行きましたから、各国の印象を比べることができます。今思えば、日本がいちばん印象深かったと断言できます。

日本はとても美しく、人々はとても愛想がよくて、お客を親切にもてなしてくれました。いつも行く先々で、私たちは温かく迎えられましたが、日本で受けた親切ややさしい配慮は、何か特別に心にしみ、忘れることができません。

私の手元には、日本の友人の皆さんから頂いたすてきなプレゼントがいくつかあります。例えば、モスクワのアパートのベッドの横の壁には、私と同じ年頃で、やはり中学生のマコ、マサトさん兄妹が、わざわざ刺しゅうして下さった私のポートレートが飾ってあります。あれだけのものを作るのは、とても大変なことだったでしょうね。またタケジロウさんという青年から、実にいろいろな見事なカラー写真をどっさり頂きました。タケジロウさんは私が日本にいる間にその写真を仕上げてホテルまで届けてくれましたし、後日モスクワにも送ってくれました。

私は日本の着物がとても気に入っています。色とりどりの着物を着た男の人や女の人は、物珍しく見えます。美しくて華やかで…… 私も着物を持っています。自分でも買いましたし、人からも頂きました。この忘れがたい日本での日々に、こんなに私にやさしく親切にして下さった方々に、この誌面を借りて心からお礼を申し上げたいと思います。

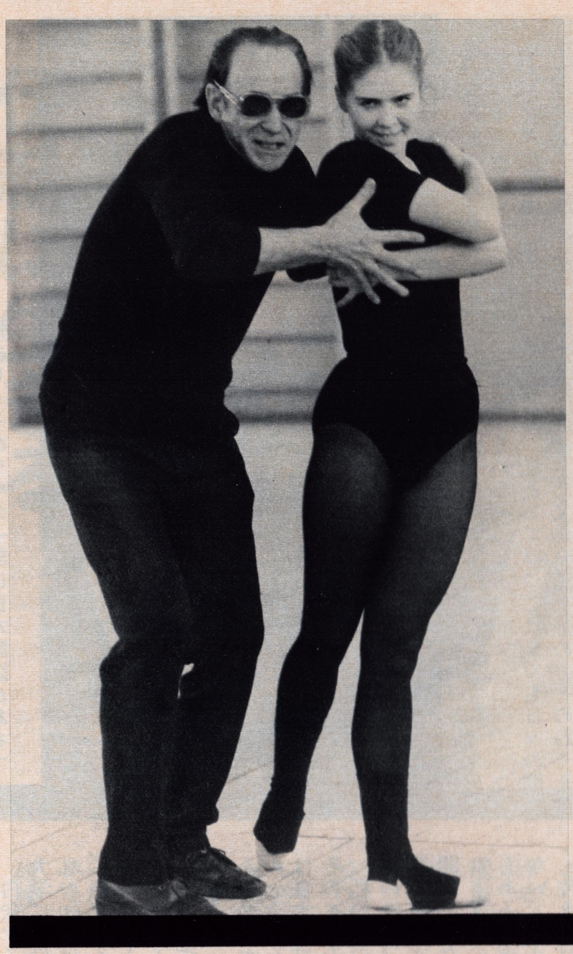
名古屋城で見た展示では、昔の日本人がどのように暮らしていたかがわかってとても面白いものでした。今でも楽しく思い出しています。先端が全部上へ曲がっている色とりどりの瓦をふいた鋭角の端正な形の屋根、家々の軒ばたの漢字の入った沢山の美しい提灯。こういった日本独特の建築物も頭に浮かんできます。

それからもちろん、大都市の中心街の夜の灯と色彩の海――おそらくこんな夜景を見たのは、日本だけだったようです。

ぜひもう一度日本へ行きたいものです。

チャイコフスキーが好きな人たち

アレクセイ・チチナーゼ
（スタニスラフスキー・ネミロビチ＝ダンチェンコ音楽劇場首席バレエ演出家。ロシア共和国人民芸術家）



わがスタニスラフスキー・ネミロビチ＝ダンチェンコ音楽劇場バレエ団は、これまでにもう3回日本で公演したが、そのつどとても熱心なありがたいファンが詰めかけてくれた。それを見てわれわれは、ロシア・ソビエトの芸術が日本のバレエ・ファンを深く感動させたという確信を抱いた。日本人の心を感動させる本当の意味での架け橋になったのは、いうまでもなく、チャイコフスキーの音楽だった。だれもがチャイコフスキーの名を知っていて、その音楽のファンであることは、日本もソ連と少しも変わらない。何度も確信したことだが、チャイコフスキーの音楽は日本人の心に強い感銘を与えている。だから東京バレエ団と同バレエ学校がチャイコフスキーの名を付けているのは、別に不思議な話ではない。

私がとくに言いたいのは、日本のバレエ・ファンはテクニックのすばらしい踊りを理解する鑑賞力があるが、それよりむしろ感情のこもった踊り、劇的要素の強い踊り、情感があふれた踊りの方がわかるということだ。情感のあふれた踊りをすると、必ず観客席から万雷のような拍手喝采がまき起こった。

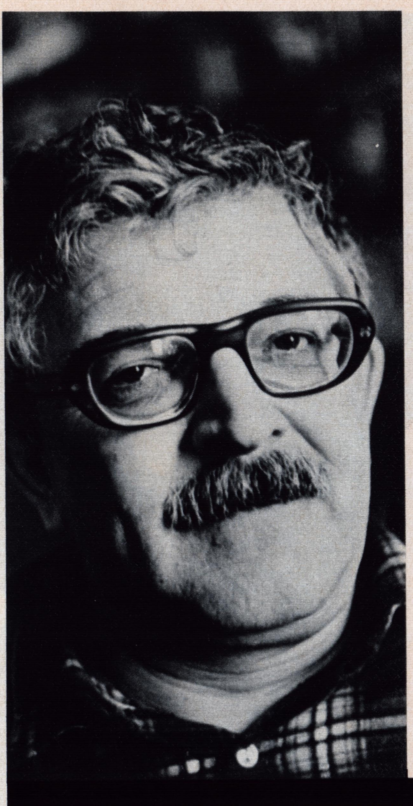
日本公演はいつのときも非常にうまくいったが、これは日本公演のお膳立てをしてくれた人たち、公演の成功を助けてくれた人たちとわれわれの関係が実にむつまじくいったおかげだと、私は言いたい。3回の日本公演にはいつも同じ大道具、小道具、照明などの裏方さんが付いていてくれたが、彼らの友好的な態度、その舞台効果のすばらしさと美しさ、腕のたしかさは思い出すたびに感謝し、驚嘆する気持ちになる。

東京でのリハーサルや稽古には高木淑子さんが自分のバレエ教室のホールを提供してくれた。われわれの第1回日本公演は一九七三年だったが、そのあと高木さんからの依頼に応じてソ連人民芸術家ビオレッタ・ボーフト、ナウム・アザーリン、アルカジー・ニコラエフなどのようなうちの劇場の教師や幹部ダンサーが時々訪日して、日本で生徒を教えたり、相談にのることにするということになった。また、日本の日ソ芸術愛好協会はバレエの天分に恵まれた日本の子供を定期的にモスクワとレニングラードへ送って、ソビエトの一流バレエ教師のレッスンを受けさせている。

日本のクラシック・バレエはロシア・ソビエト・バレエの影響と直接指導で始まったことを日本の関係者は誇りにしているが、わが劇場のダンサーや教師たちもそれに一役買っているのはうれしい限りだ。

私と日本

ユニークな文化に感嘆



アルカジー・ストルガツキー
（有名なSF作家で、日本通。実兄ボリス・ストルガツキーとの共著の中編・短編集が数冊あり、そのうちの一部は日本語訳がある）

私は日本が大好きだ。

わが国の文化人なら誰でもそうだが、日本人が働き好きで、創造の才に富む民族であること、日本文化が真の意味で偉大で、世界でも比類のないユニークな文化であることには、心から感心している。

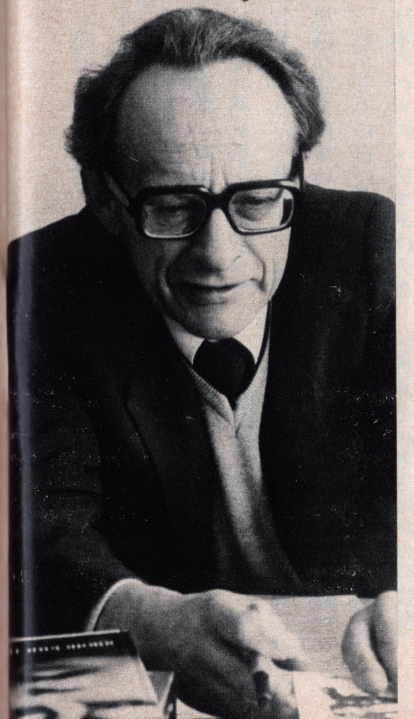
運命のいたずらか、私がソ連の日本研究家の一人になってから、はや30年の歳月がたつ。そのあいだに私は夏目漱石、芥川竜之介、安部公房などという近代、現代日本のすぐれた散文作家の作品の翻訳にもっぱらたずさわってきたが、この頃ではとくに日本の中世文学に興味を寄せている。話は変わるが、私は自分の散文の作品が日本で翻訳、出版されていることを誇りに思っている。

私としては、これまでも日ソの間にあった文化交流を強め、そのわくを広げることは、日本とソ連の文化にとってだけでなく、世界文化全体にとって非常に大きな意義があると強く信じている。

この頃私は4歳になる自分の孫息子のイワンに桃太郎やかぐや姫のおとぎ話や『安寿と厨子王』の話を聞かせているが、この小さな孫もおじいさんのように日本と日本人の天才にたいする愛情と尊敬の念をもつようになってほしいと、心から願わずにはいられない。

私と日本

日本文学に捧げた30年



ボリス・ラスキン
（日本文学翻訳家。「プログレス」出版所日本課編集長）

白状すると、私がモスクワの東洋学大学に入学したとき、日本にかんする私の知識はおよそゼロに近かった。その頃私がもっとも興味をもっていたのはインドと中東だった。その私が日本語を学ぶことになったのは、今はすでに亡き東洋学の泰斗N・I・コンラド博士とK・M・ポポフ教授のお二人から勧められたからにほかならない。そのときから数えてまる30年、私の一生は日本と結びついてしまったが、私はそのことを少しも後悔していない。

私の目の前に、次第しだいに日本文化の世界、独特の風俗慣習と世界でも第一級の文学をもつ日本文化の世界が開けてきた。そして、わが国の読者が日本文化の多様性と、日本民族の性格をある程度認識する道は文学をおいてないと考えた私は、日本文学の翻訳に一生を捧げる決心をしたのだった。

日本人の中には叙情的な性格とビジネスライクな性格が一つに結びついている。もの静かに自然の美しさに浸って楽しむ能力と、自分の目的を遂げようとするときの驚くべき粘り強さとが、また人間らしい気持ちと、陽が当たる場所を奪い合う激しい闘争心とが同居している。

これまで私は井伏鱒二、井上靖、開高健、山本周五郎、松本清張などの作品をロシア語に翻訳したが、文体も主題の設け方もまるで似通っていないこれら作家の作品を選んで翻訳したのは、ことによると、日本人の性格と現代日本の現実がもつ多種多様な側面をソ連の読者に知らせたかったからだろう。

私の近い将来の予定は、川端康成の短編集と中編小説『古都』、井上靖の長編小説『氷壁』、開高健の評論集（一巻本）をロシア語に翻訳することである。

私と日本

伝統に生きる洗練された芸術

ユーリー・グリゴロビチ
（ボリショイ劇場首席バレエ演出家、ソ連人民芸術家）



ボリショイ劇場の若いバレリーナたちと。

日本は何と印象深い国だろう！ お話ししたいことが山ほどある。バレエ団と一緒に何度も訪日する機会に恵まれたが、その度に何か新しいもの、興味深いものを見つけた。

日本の演劇——能も歌舞伎も大好きだ。なんとも素晴らしい衣装、興味をそそる能面、所作事、高度の文化と役者の技の感動的な結合。能は世界に類のないもので、最も古く興味深い文化現象の一つだ。歌舞伎役者の洗練された演技に、多数のロシア・ソ連の演出家が大変な感動を受けたものだ。わが国の知識人に歌舞伎を紹介したのはメイエルホリド（一八七四—一九四〇年。演出家、俳優）だが、それ以来ずっと歌舞伎は、わが国で親しまれ、敬意をもたれている。専門家にとっての最大の関心は、日本の演劇の制約性、現代のテンポの早い時間の概念を無視した緩慢な動作だ。能にしろ、歌舞伎にしろ、その衣装にしろ、何時間でも語ることができよう。

日本人のていねいさについて語ってもおそらく、目新しくはあるまい。だが残念ながら、ていねいさはこの世界から徐々に消えていっているので、至るところでていねいさにぶつかると、心地よさは倍増するというわけだ。

絵画も好きだ。歌麿、北斎に惚れぼれする。日本の現代画家の美術展にもいつも興味津々で出かける。日本の浮世絵が西洋美術に与えた影響は有名だし、その影響は当然だと思う。

建築を避けて通るわけにはいかない。日本建築は世界の現代建築の多くの潮流の礎を築いた。平面を非常に上手に利用して空間の形を変えている。

一度でも奈良か京都に行ったことのある人は、人間の創造物と自然とのすばらしい結合についての記憶を、一生心の中に留めおくだろう。日本の芸術は非常に繊細で、洗練されている。日本の芸術は極めて民族的で、昔の伝統に立脚しており、伝統を大切にし、保存している。しかも新しいものを何もしりぞけていない。

日本人の実務性、勤勉さ、忍耐強さ、目的達成のための不屈さといった性質に大変引きつけられる。これは日本民族に対する尊敬の念を起こさせる。

強まる両国の音楽のきずな

エブゲニー・ネステレンコ
（バス歌手、ボリショイ劇場ソリスト、ソ連人民芸術家）



ボロジン作曲のオペラ「イーゴリ公」でイーゴリ公を演ずるネステレンコ（ボリショイ劇場の公演）

私が日本の音楽家たちと直接親しくなったのは、一九七〇年にモスクワで第4回チャイコフスキー記念国際音楽コンクールが開かれた時のことだった。このコンクールに私も出場したが、このとき私に金賞を与えてくださった声楽部門の審査員の中に、日本の有名な歌手の関鑑子女史がおられた。女史とお近づきになったのはこのコンクール、というよりもコンクールが終わってからだった。

そのうちに時は流れて、こんどはあの関鑑子女史のお嬢さんと私は一緒に仕事をすることになった。最近の2回のチャイコフスキー・コンクールで関女史のお嬢さん、小野光子さんが、私同様、声楽部門の審査員に選ばれたからである。小野さんは著名な音楽教師ニーナ・ドルリアク女史のクラスで勉強したモスクワ音楽院の卒業生で、魅力ある女性であり、すばらしい歌手である。

一番最近のチャイコフスキー・コンクールでは、日本の木村紀子さんがロシア・クラシック音楽の作品を外国人出場者の中でもっとも見事に歌い、レニングラード音楽院特別賞を獲得した。私は日本人の女性歌手がロシアの古典作品を歌って表彰されたことはまことに意味のあることだという気がするので、木村さんの受賞を思い出すたびにとてもうれしい気がする。

私が聞いた話によると、日本ではロシアの古典文学が人気があるというが、ロシアと現代ソ連の音楽が日本で人気があり、愛されていることも私は知っている。とくにチャイコフスキーの人気はすこぶる高いという。小野光子さんはこの前モスクワに来た時、私と、ミハイロフスコエ村にあるプーシキン博物館に日本のレコードをプレゼントして下さった。そのレコードはプーシキンの詩にロシアの作曲家が作曲した歌曲の数々を小野さんが歌ったものの録音である。たいへん録音がすばらしく、ジャケットのデザインも趣味がよく、プーシキンの立派な肖像画が印刷されている。思うに、このようなレコードが日本で出た事実そのものはかなり意義深いことで、ロシア文化への関心を雄弁に物語っていると思う。

私はことしの10月に日本へ行ってソビエト芸術祭に参加する予定になっている。この前の日本訪問は一九七五年のことで、そのときは東京、大阪で2回コンサートを開いた。短い旅であったし、天気にもあまり恵まれなかった。ことし日本へ行ったら、もっと長く滞在してもっとよく日本を見、完全な日本観を持てるだろうと期待している。

クラシック音楽への驚くほどの愛着ぶり

ラーザリ・ベルマン
（ピアニスト）



何よりもまず私が驚き、うれしかったのは日本ではクラシック音楽があらゆる年齢の人たちに非常に大衆的に愛されているということだ。世界中でこれほど多くのクラシック・ファンのいる国が外にあるだろうか？ 日本公演の時、青少年たちは先生に連れられて、団体でコンサートに来ているのではないかという気が私にはした。申し合わせたのではないのに、私と妻は、期せずしてこの国では、歴史や文学などと同じように、クラシック音楽も学校の必修科目に入っているのではないか、と憶測したものだ。

もう5年も日本に行っていない。でもこの間、私が公演旅行で訪れたどの国、どの大陸でも、コンサートの度にほとんど毎回、ホールに日本人旅行者の姿を見かけた。日本の音楽愛好家たちは楽屋に来て、私のコンサートを覚えていると語ったり、あれから日本で私のレコードが何枚か出たと話してくれたりした。率直に言って、これはとてもうれしいことだ。

ロシアの伝統的な客の歓待ぶりは世間でもっとも賛辞を受けている。カフカズの民族の客好きも広く知られているし、高く評価されている。それなのに〝日本的歓待〟という言い方は、私は一度も聞いたことがない。でも私はこの言葉の組み合わせをぜひとも慣用語にしたいと思う。事実これは存在するのだし、一度でも日本的歓待を経験した人は大変な満足を味わうだろう。それは私が請け合う。

日本を訪れた外国の客人に、日本滞在を心から楽しんでもらおうと日本の人たちが心から願い、そのために大変な努力をしているような気がする。私と妻は、例えば、日本では大変気楽に過ごした。異なる文明の国にいるということはよく分かっていたのだが。

日本と再会できる日を夢見ている。

ロシア・ソビエト芸術祭の日程

本誌ことしの5号ですでにお知らせしたように、今秋、東京、大阪をはじめ全国各地でロシア・ソビエト芸術祭が行われる。ソ連から約四〇〇名のアーチストが来日し、バレエ、オーケストラ、室内楽、ピアノ、バイオリン、声楽などのコンサートのほか、演劇の公演も行われる。来日するアーチストとその公演期間は次の通り。

☆ボリショイ・バレエ（9月7日—10月13日）☆レニングラード・ボリショイ・ドラマ劇場（9月16日—10月26日）☆ウラジーミル・スピバコフ（バイオリン、9月19日—10月13日）☆ユーリー・バシュメット（ビオラ、9月26日—10月13日）☆モスクワ・ビルトゥオーゾ室内管弦楽団（9月26日—10月13日）☆エレーナ・オブラスツォワ（メゾソプラノ、10月1日—20日）☆エブゲニー・ネステレンコ（バス、10月10日—20日）☆ソビエト国立交響楽団（10月12日—29日）☆スビャトスラフ・リヒテル（ピアノ、10月20日—11月末予定）☆ミハイル・プレトニョフ（ピアノ、11月4日—18日）。

なお、詳細についてのお問い合わせは、ジャパン・アーツ（〒162東京都新宿区市ヶ谷本村町29市ヶ谷リンデンビル、電話03・235・3021）へ。

私の〝日本病〟の後遺症

アレクサンドル・イワニツキー
（64年東京オリンピックのレスリング・フリースタイルの金メダリスト、国家テレビ・ラジオ委員会スポーツ番組編成本部長）



一九六四年10月。東京の銀座。一緒に歩いていた水泳選手ガリーナ・プロズメンシチコワが土産物屋の店頭でふと足をとめた。彼女の髪の色が母親の背におぶさっていた髪の黒い坊やの注意を引いた。坊やは素早くもみじのような手を伸ばして、ガリーナの髪の毛を引っ張った。ガリーナはあっと叫んで、勢いこんで振り向いたが、犯人が坊やと分かると、拍子抜けした顔になった。坊やの方でも「おや、こんな色白のおばちゃんがこの世にいるのか」という目付きをしたその両方を見て、私は腹をかかえて大笑いした。

……音のないのに音を聞くことができるか。京都の庭にいたら、それができるのだ。ほら、そこの岩棚の石のあいだから一筋の渓流が流れ出ている。流れが悪くなり、また淀むにつれて水は音楽のように高く低く音をたてる。泡立つ早瀬は白みがかり、苔むす岸辺の淀みは緑がかって、水の色も移り変わっていく。この響きを放つ静けさのすばらしい芸術は名人の庭師の手でつくり出されたものなのだ……

……広島の原爆記念館のもの悲しい思い出。溶けてそばのように凝結した釘、溶けて、砂浜に打ち上げられたクラゲのような形になったガラス、地獄の業火に焼かれてシュールレアリズム風に曲がってしまった鉄のはりなど……

私たち、ソ連のオリンピック参加選手の一部がお客に呼ばれた。呼んでくれたのは「日本のうたごえ」合唱団の皆さんだった。そのもてなしには心温まる思いだった。私たちは日本訪問の印象を話し、耳慣れない奇妙な、けれども驚くほどよく分かる古いメロディーの歌を聞いた。おひらきになる前歌ってくれということになった……こんなことをやるのは初めてだったが、『モスクワ郊外の夕べ』を歌うことにした。歌い出しのところがそろわなかったので、第一節のところでつかえてしまった。ホールにいた全員の人たちが歌声をそろえて助けてくれなかったら、とてもあとが続かなかったところだった……

こんな情景が記憶の倉にいっぱい詰まっている。では、〝日本病〟のそもそもふりだしはなんだろうか？ 遠いようで近い国日本、よく分かるようで分からない国日本に心を引かれるのはなぜだろうか。

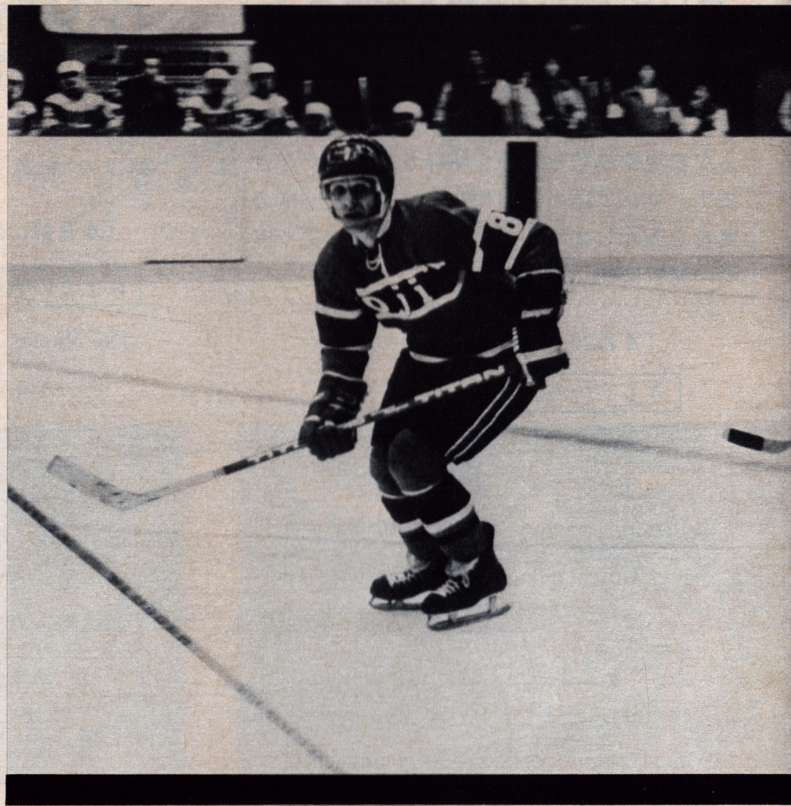
〝日本病〟の根はいったいどこに求むべきか。〝日本病〟の徴候は何か。後遺症はないだろうか。後遺症はある、と私は考える。善意が芽生える、それが後遺症なのである。日本との出会いが時間の長いものであっても、また観光旅行のように短いものであっても、先入観にとらわれずにおたがいがよく見詰め合ったら、自分の目で見たものを本当に知りたいという気持ちがいつまでも残るにちがいない。

日本よ、どうもありがとう

ビャチェスラフ・スタルシノフ
（アイスホッケー選手）

日本にも多くのファンをもつソ連の有名なアイスホッケー選手ビャチェスラフ・スタルシノフに本誌記者オリガ・ベドニャコワがインタビューした。

正直のところいく分興奮気味で私はモスクワ工学物理大学を訪ねた。これから会うスタルシノフはこの大学の体育学講座主任である。世界選手権優勝9回、五輪優勝2回、一九六五年世界選手権ベスト・フォワード、一九六三—六五年ソ連最優秀フォワードなど輝かしいタイトルの持ち主に会えるのだ……日本のTVアナでさえ、いつも一息でスタルシノフのタイトル全部を言えるとは限らなかったそうだ。ついでながら、日本選手権優勝2回（事実、スタルシノフのスポーツ歴にはこういうタイトルも入る）のスタルシノフは一九七六年から七九年まで北海道で王子製紙チームの選手兼コーチをしていた……



—— なぜ日本にいったのですか？

「理由はいくつかあります。現役時代にはどういうわけか日本に行く機会がありませんでした。でも、日本についてはいろいろ興味深いことを読んだり聞いたりしていました。ですから王子製紙の申し出を知った時は迷わずに受けてしまったのです。同じ頃ヨーロッパのある国からも同様の申し出があったのですが…… でも、日本の方にしました。この選択に間違いはなかったと信じています。

日本でプレーイングコーチをやって、自分のコーチ能力、コーチの方法、戦術を点検することができましたし、試合への参加を通じてアイスホッケーのだいご味を堪能させてもらいましたからね。日本の選手たちと経験を分かち合えたことは実によかったですよ」

—— 日本の選手たちはよい生徒でしたか？

「実によい生徒でした。日本のアイスホッケーはまだ若く、自分のスタイル、特徴を探している段階です。めきめきと進歩しています。〝'83セイコースーパーアイスホッケー〟（東京、札幌、神戸）をとってみても、日本チームはソ連のナショナルBチームには負けたけれども、米国のナショナルチームには勝ちましたからね……」

—— 恐らく、その成功は部分的にはあなたやあなたに代わった他のソ連のコーチたちの助力があったからでは…… 日本の選手に自分の経験を伝えたわけですから。日本はあなたに何を与えてくれました？

「とてもたくさんのことを。日本の国、日本の人々についてこの上なく気持ちのいい、感謝に満ちた思い出が私にはいっぱい出来ました。3年という歳月は日本人の性格や風習、全体的雰囲気を知るために少ないとは言えません。人間的に大変おもしろい経験でした。今でも私は日本のニュースには特に敏感です。昔と何が変わったか、何が昔のままかを比較しています。日本語を忘れかけているのが残念です。使う機会がありませんからね。日本の人たちは長いこと私に日本語やロシア語の手紙をくれましたけれど……」

—— こちらに帰ってから日本のチームと会われました？

「一度、日本のナショナルチームが世界選手権大会（Bプール）に向かう途中モスクワに立ち寄ったのですが、チームの半分は私がコーチした王子製紙の選手でした。あの頃はまだほんとに若い選手だったのに今やもうベテランで。彼らはモスクワで2試合に出ましたが、私を呼んでくれましたよ。試合中の選手たちを観察しました……いつも彼らを陰ながら見守っているのですがね。チームのリーダーたちが新聞の切り抜きを送ってくれたり、それに今チームで働いているウラジーミル・シャドリンからもいろいろ聞いています。休暇で帰国した時などにね」

—— 日本国内を歩かれたと思いますが？

「ええ。チームと一緒に。それに日本を離れる前に、最も興味深い土地をまわる旅を企画してくれましたしね。ちょうど春で桜が咲いていました。日本の一番美しいものはみんな見られました。祭りやいろいろな風習を思い出します。多くの国々が伝統を敬いますが、日本は特に大切にしているようです…3年間は気づかぬうちに過ぎてしまいました。仕事はおもしろかったし、人々との交際も気持ちのいいものだったし。どれもこれも一生私の記憶に残るでしょう」

—— その中でも一番強烈な印象は？

「私はどの国民も平和を望んでいるし、他国民の代表に対しては、もしその人が善意の意図をもって近づけば、好意をもって接してくれると確信していましたが、日本でこの確信を確認できてうれしかった。これは大変重要なことです。人が本当に手助けしてあげたいと思って訪日し、そのことが実際に確かめられれば、日本人は自然に自分の方から心を開いてくれます。このことが日本から受けた主な情緒的印象です。今、日本からの報道にじっと耳をすまし、私は、あれこれの事柄に関してあの国民——遠くて近い国の優秀で勤勉、礼儀正しい勤労者が何を考えているか、はっきり分かります」

ロシア語のページ

A Б B

―NHKテレビ ロシア語講座から（4月後半）―

テレビでロシア語を学ぼう！

この欄では、NHK教育テレビ・ロシア語講座のご協力を得て、同講座のテキストから主な表現や単語その他を紹介させていただきます。ロシア語の単語や文にはカナで一応の発音を表記しますが、是非テレビの放送で実際の発音に親しんで下さい。

〔4月20、21日放映〕

きょうの表現

Я студéнт.（ヤー ストゥヂェーント）

ぼくは学生です。

※ Вы профéссор?（ヴィ プラフィェッサル） あなたは教授ですか？

――Нет, я не профéссор, а студéнт.

いいえ、私は教授ではなく、学生です。

きょうの単語

①студéнт(ка)（ストゥヂェーント(カ)） （女子）大学生

②профéссор（プラフィェッサル） 教授　③учени́к（ウチニーク） 生徒

④учени́ца（ウチニーツァ） 女生徒　⑤сын（スィーン） 息子

⑥дочь（ドーチ） 娘

〔4月23、25日放映〕

きょうの表現

Кто э́то?（クトー エータ）

これはだれ？

⊙кто 「だれ？」聞いているのが名前なのか、職業なのか、その他の何なのかはわからない。漠然とした聞き方。

⊙кто は人だけではなく、動物にも使う。それ以外の時は что を使う。

⊙この文章は日本語の場合と同じように、その人に聞こえてしまうと少々失礼になるような聞き方であるから、気をつけよう。

※Кто э́то?　これは誰ですか？

――Это актёр.（アクチョール）　これは俳優です。

※Кто онá?（アナー）　あの人はだれ？

――Онá актри́са.（アクトリーサ）　彼女は女優です（だよ）。

きょうの単語

①актёр（アクチョール） 俳優　②актри́са（アクトリーサ） 女優

③писáтель（ピサーチリ） 作家　④журнали́ст（ジュルナリースト） （新聞・雑誌の）記者　⑤отéц（アチェーツ） 父　⑥мать（マーチ） 母

〔4月27、28日放映〕

きょうの表現

Где Ми́ша?（グヂェー ミーシャ）

ミーシャはどこ？

⊙「どこに～があるか（いるか）」を尋ねるときは、гдеにただ名詞をつければよい。「ある」「いる」に当たることばはいらない。

⊙Ми́шаは男の名前Михаи́л（ミハイール）の愛称。

⊙Там.（ターム）（あそこです。）Здесь.（ズヂェーシ）（ここです。）という表現（答え方）を覚えておこう。

きょうの単語

①вокзáл（ヴァグザール） （列車のとまる）中央駅

②стáнция（スターンツィヤ） （電車、地下鉄の）駅

③шкóла（シコーラ） 学校　④университéт（ウニヴィルスィチェート） 大学

⑤магази́н（マガズィーン） 店　⑥музéй（ムズィェーイ） 博物（美術）館

〔4月30日、5月2日放映〕

きょうの表現

Э́то моя́ женá.（エータ マヤー ジナー）

私の妻です。

⊙моя́＜мой 「私の」の女性につく形。ロシア語では、後に来る名詞が男性か女性かで、「私の」の形が異なる。

※Это мой муж.（モイ ムーシ）　私の夫です。

きょうの単語

①муж（ムーシ） 夫　②женá（ジナー） 妻

③жени́х（ジニーフ） 婚約者（男性）　④невéста（ニヴィェースタ） 婚約者（女性）　⑤брат（ブラート） 兄（弟）

⑥сестрá（スィストラー） 姉（妹）

NHKテレビ・ロシア語講座のテキストは、最寄りの書店でお求め下さい。書店にない場合は、日本放送出版協会（郵便番号150 東京都渋谷区宇田川町41―1、電話03・464・7311）へお問い合わせ下さい。

今日のソ連邦
一九八三年4月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3―9―13・電話03―447・3536）

定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）